

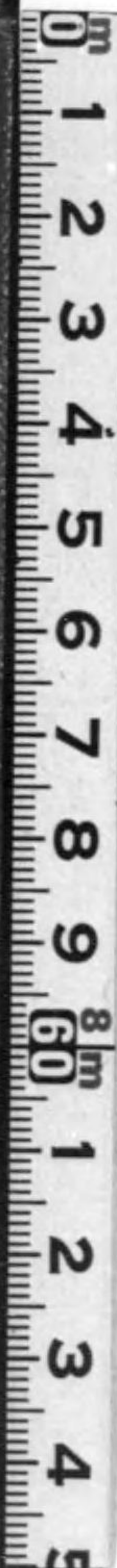
209-Ke39a7



1200500729086

209

Ke39a



始



209
KE39a



早稻田大學
教授

煙山專太郎著

世界大勢史

早稻田大學出版部刊



9 9 3
7 4

序

我等の眼前に展開してゐる苛烈な戦局は、今や、ひとり交戦國ばかりではなくて、すべての中立國をも、直接間接に砲煙彈雨の中に暴露せしめ、世界を擧げて戦渦の埒外に立つことを絶對に不可能ならしめてゐる。維新の變、官幕兩軍の上野に衝突した際には、我が三田の聖人は、銃聲を耳にしながら、學生の爲めに靜に經濟書を講ずるを廢しなかつたさうだし、又、前世紀の初、普魯西が佛軍の蹂躪する所となるや、兼て賤蔑の目で普國を見て居た獨逸の大哲學者は、己の原稿をかかへたまま、寧ろ冷然として戰場を脱出したといふ話はあるが、日本と獨逸とが、現に迎へつつある戦は、往時のやうな内亂でも、王朝間の争鬪でもなくて、食ふか食はれるかの悲痛極りなき民族戦に外ならのである。我々のかつて經驗したことのない此恐ろしい戦役では、日々の刊行物は、一として火のやうな愛國的情熱に燃えて居らぬ

はないが、とりわけ、我が民族の歴史や傳記に關する作物が、最も世間から迎へられてゐるやに思はれるのは、これが我々の決死的の努力を最も力づけてくれるものであるからである。之によつて我が國史の中にあらはれてゐる人物は、益々闡明されるし、又その埋れたるは新に掘り出されてその眞面目を發揮されるのである。同時に政府當局によつて民族そのものの研究も奨められ、これが將に一代の風尚とならうとして居り、日本民族そのものに付ての研鑽があらゆる方面から進められつつあるは、洵に熾なりといはねばならぬ。戰場からの報道の吉凶禍福に心ときめきながら、我が民族の過去、現在、將來に付て考へらるべき資料の豊富に供給される事に喜悅を感じざるを得ないのは、戰鬪に於て敵を擊摧しつつある日本民族が、同時にその心田を開拓して、我々自らを少しでも深めて行き、我が民族にふさはしき偉大なる將來を築き上げんことを期するものがあるからである。

交戰各國の情報を手にし得る便宜の最も缺乏してゐる我々には、彼等の實情はよくは、わからぬが、察する所、彼等に在ても、歴史及び傳記の研究熱の盛なことは、

我が國と同斷だらう。前大戰の直後、悲運に沈淪した獨逸では、フレデリキ大王に關する著述や映畫ほど歓迎されたものはなかつたといふが、思ふに、一國が非常時局に際會し、生死存亡の危機に立ちつつあるの時、萬人の齊しく望む所は、かつての國民的英雄の再來して、時艱を匡救せんことの外にないからである。

傳記熱、歴史熱のはやりは、戰時と限らず、平時でも大に歓迎されて良いことである。蓋し、傳記は、個としての人の經歷を、又、歴史は、彼が族としてのそれを明にして、共にその眞面目を發揮せんことを期するもので、それが何れの國、何れの民族の場合でも、彼等各自の認識に重要な資材を供給せんとする、互に補足的で、互に缺くことの出来ぬものであるからだ。歴史及び傳記が、文學として、又は修身道德としての用途から始まり、遂には科學的研究を基礎とする一個の藝術たるんことを期する第十九世紀この方の民族史學及び傳記學にまでも發展したのではあるが、刻下の様な戰時には、その共に著しく傾向的であることは、當然、必然の成り行きと云はねばならぬ。蓋し、銃後の老幼男女は、之によつて大に國民的の團結

心を鞏固ならしめ、その發奮と努力とに培はしむる動力を得るのであるし、又戦線の將兵は、彼等のすさみ勝ちな陣營に良い読みものを提供されてその生活を潤はされ、滾々として盡きない元氣の源を養うて行くことにもなるからである。何かと不自由な刻下の事情の下にありながら、汗牛充棟位の形容では、現はしきれないほど、昨今の出版界に史傳關係の新刊書が殺到してゐるのを見るは大に意を強うし得べきことである。中には、時局あてこみの一夜作り類のものが少くないかも知らぬにしても、これ等とても、當局の一々の嚴密な檢閲を経て印行されたものである以上、さう出たらめの品ばかりではなからうし、同類の今までの作品よりは、相當に事實の正確さや表現のよさをねらつてゐるに違ひがないから、問題の今後の研究が、之により一段の便宜を受くるに至るだらうことは、疑はれないと思ふ。

しかしながら、これだけではまだいかぬ。各の民族に關する研究材料が披瀝せられ、その認識がこれまでよりも深められて行つたにしても、それで現在の世界は大觀されたとは云へぬ。地域的に若くは年代的に斷片的な知識が供給されてあるだけ

ではいかぬのである。どうしても、少くとも、今日の最進歩的で有力な若干民族の進退動向を中心とする大綜合が與へられて居なければならぬのである。さうでなくては、我々の眼前に日々くり廣げられてゐる曠世の大禍亂の醸さるるに至つた深刻な事情が、十分にのみこめたとは云へないのである。そのためには、一の特定の民族、若くは國家だけに偏した見方ではいかぬ。重要なすべての民族若くは國家の發展を通觀するのみならず、更に、之を沿革的に云つても、時代を限つてゐる短い期間だけではなく、聊か大袈裟な言ひまわしかも知らぬが、人類の文化的發展をば、少くとも、その數千年の昔までも溯つて總觀せねばならぬのである。すべて歴史上の出來事は、その關係が多方面で、その持つてゐる意義が重大であればあるほど、空間的には廣く、時間的には遠い視野から之を觀察することが必須である。人類が經驗した最初の世界戦役と云ふほどの大事變は、悠久な世界歴史の背景から眺められなければ、その眞義が味へるものではないのである。換言すれば、世界史そのものを復習してかからねば、紛糾と亂脈とを極めてゐる現代の世界の眞の理解が出來

ないと云ふことになるのである。而してこれには、冷かな頭腦ほど必要なものはない。交戦國民としての我々は、獨逸統一運動の當時に、獨逸史をものして大にこの運動に貢献したその偉大なる國史家が、歴史の用は、國民をして感奮興起せしむる「ガイスタレンツ」にありと叫んだりし如くに、我々の國史や傳記そのものからして、大なる精神力を鼓吹されなければならぬけれども、之と同時に、世界の歴史が、我々に示してくる生々しい史實に直面して、率直にそのありのままの姿を認識し、此悠久な人類の過去に由て、我々の將來を深く省察し、冷靜沈著に考慮する所がなければならぬのである。國史を讀んで感奮興起するが、同時に興亡幾千年の世界史を繙いて靜思深慮すると云ふ冷熱兩様の極めて微妙なる心の働きを示さねばならぬのである。すべて史上に於て、大事業を演じた民族は、かういふ一見、矛盾した心の持主でないものはない。さうでなければ、假令、一時、成功らしいものはあつても、それは到底、永續きせず、多難な戦局を克服して、眞の大を將來に成すなど云ふことは出来ないのである。

こんなことを云ふと、讀者から、それはあまり大業な話だ。忙しい今日、浩瀚な世界歴史の古代から現代までを一々讀むなど出来る相談ではない。迂濶千萬な馬鹿馬鹿しいことだと必ず抗議が持ち込まれるに違ひない。それは、全く尤もな次第で、私自らも決してそんな大冊の繙讀を讀者に注文しようとするものではない。ほんの中等學校の教科書程度のもを「ばら讀み」するだけでも宜しいと思つてゐる。ただ歴史の教科書には、どちらも羅列式、列舉式のこまもの店風の煩瑣な所があつて、あまり一般向きに出來て居ないと云ふ缺點がある。だから、徒に固有名詞の送迎に忙殺されて、結局は、要領を得ずに終ると云ふやうな嫌が少らずありはしないかと懸念される。一體、歴史と云ふものは、人生の何れの時代でも、壯年には壯年なり、老年には又老年なりに、讀んで興味の深いものである筈で、血が沸き立つてゐる少年時代には、わけても、さうなのである。乾燥無味と言つて言ひ過ぎではあるまいと思はれる教科書が用ゐられてゐるに拘らず、歴史の學課の彼等にとつて中々印象的たり得るのは、書中に挿まれてゐる數々の美しい繪畫や地圖に對する魅力と、之

を口授する先生方の巧妙な講述力との賜物である場合が最も多いと思ふ。所が、一般の讀者には、さう云ふ良い先生が付いては居ないのだから、此點、餘程、考へられなければならぬのである。記述の繪畫的であり、説明的たるを要することは、教科書の場合と少しも違ふ所はないが、之と同時に、煩はしい細なことをば一切省略して、出来るだけ、記事を簡明にし、之をしてより多く統一的、概括的ならしめ、飽くまでも、過去の史實を通じて現代の世界を透觀せしむることに第一段の注意を拂はねばならないのである。學問のための學問と云ふ點から云ふならば、近代、中代、古代、先史時代、皆それ〴〵獨特の意義深き存在たるを否むことは出来ぬけれども、現代から見た過去の各の時代は、現代を發展せしむべきための長い行程のいくさりに過ぎずとされても仕方がないのである。さういふ次第であるから、近代も、中代も、古代も、將た先史時代も、皆、齊しく現代から遠く之をふりかへつて見て、之をば現代の事相と照し合せて見ることによつて、初めてその各の有する眞義に徹し得べきものと信ずるのである。

横には東西を結び、縦には古今を一貫しようと思ふ歴史のかやうな功名的な統一觀は、全く近來の產物である。十九世紀の中葉以降、かくて此新史觀による通史若くは一般史は、歐羅巴第一流の史家によつて屢、試みられてゐるが、しかし、それは、歐羅巴だけに關してであつた。世界史又は萬國史の名を冠しては居つても、事實は、多少、有機的に取扱はれた歐洲史、若くは精々、歐洲の膨脹史以外のものではなかつた。これ等の史家も、所謂世界史を以て、世界の歐洲化の物語に過ぎぬとするすべての歐人の自惚れと自己陶醉とから蟬脱することが出来なかつたのである。歐洲史家のかやうな史觀が、從來の自己中心主義から漸く反省され始めたるやに感ぜられるのは、全く我々の現代になつてからの現象に屬する。ブランデンブルグ教授の小さいが、刮目を値する著作を公にしたのは、實に我が蘆溝橋事件の起つた年のことである。

私の此小冊子は、これ等、歐米の諸學士の驥尾に附して、聊か現代世界の史的發展のほんのあら筋を述べようと試みたものである。個としての人を傳へようと云ふ

新なる傳記と、族としての人の經歷を追及せんとする民族史學とに次いで、全としての人類相互の交渉と進展とに説き及ぼさうと云ふ一の世界歴史をねらをうとしてゐるものである。書名の示してゐる様に大勢の推移を掃寫しようと思ふものではあるが、その期する所は、結局は、修羅の巷となりつつある世界の現状を明にせんとするにあるから、之をば世界現代史と題しても不倫ではないであらう。所がその結果は御覽の通り、極端に簡短なものとなつてしまつた。ライプチヒの教授の上記の作は菊判二五四頁、又、教授より五年前にセーニョーボス教授のものされたものは、もと大英百科全書の新版のために作られたもので、此種の通史としては、量に於て恐らくは最小だらうが、それでも、四六判で二百頁に垂んとしてゐる。私の此大勢史を試みに此程度の本に横文に翻譯するとすれば、セーニョーボス教授の歐洲史ほどの分量にもなるまいと思ふ。全卷は、三編、六章、三十節に區分されたが、それは、讀者の便宜をはからう老婆心に出でたと云へ、寧ろこけおどしに近い仕わざと云はるべきだ。これがため、記述の抽象的に墮するは、萬、止むを得ないとして

も、いかにも機械的で、何となくせせつこましく、窮屈な感じを與へしめる。一般に不急の著作が最も遠慮されなければならなくなつてゐる刻下の時局に於て、敢て之を以て當路を煩し、廣く江湖に訴へんとするに至つたのは、此方面で緊急重大な缺亡が十分に満たされて居ない憾が多分にあるからである。もとより微力な私のさやかな試みに過ぎぬし、一夜作りと云ふやうなものではないにしても、不満足な節が多々存在してゐる。されば、之を緒として、同學の君子のかやうな通史概説の方面にも耕作の鋤を容れられ、それ／＼の大勢史觀を世に問はるるやうになつたならば、學界と限らず、一般の讀書界にとつても、最も喜ばしいことたるは疑ないものである。

最後になつたが、私は、此小冊子の著作及び印行に付て早稻田大學出版部の池田美代二君の私に對して與へられた並々ならぬ友情と親誼とに向つて心から感謝せざるを得ない。君の聲援と助力とがなかつたら、これが公にされ得たらうかさへ危ぶまれる位である。此小著が若し何ほどでも、我國現在の讀書界に貢獻し得る所あり

とすれば、その効果の一半は、同君に歸せられねばならぬ。

昭和十九年四月一日、慈母第四十四回の記念日に際し東都染井の僑居にて

著者識す

目次

緒序

言……………一

第一節 世界歴史溯源……………一

(一) 現代の世界と世界歴史……………二

(二) 東大陸と西大陸……………四

第二節 東西洋の二大文明系統……………四

(一) 東大陸に於ける南北及び東西の兩對立……………五

(二) 東洋の天地……………五

一 印度の世界……………八

二 極東の帝國……………八

 I 支那の政治的統一とその膨脹……………一〇

 II 支那の民性……………一〇

(三) 西洋の天地……………一一

目次……………一

- 一 極西の帝國……………二
- I 東地中海側岸の世界……………二
- II 地中海世界の統一……………三
- 二 「羅馬の平和」と基督教……………五

第一編 「羅馬の平和」破れてこの方の歐羅巴

- 第一章 所謂「歐羅巴」發達時代の一千年……………六

第三節 諸外民族の歐羅巴闖入……………六

- (一) 歐羅巴中世史の歴史的意義……………六
- (二) 東西洋に於ける民族の大移動……………九
- (三) ゲルマン民族の出現……………三
- (四) 新民族の形成……………三

第四節 回教の世界と基督教歐羅巴……………四

- (一) 歐羅巴に於ける猶太教の社會……………四
- (二) 回教及び回教の世界……………五
- 一 回教の勃興……………五

二 回教の東西洋蔓延……………七

(三) 中世歐羅巴の基督教社會……………九

- 一 東歐羅巴のスラブ、海上のノルマン……………九
- I 東歐羅巴のスラブ……………九
- II 海上のノルマン……………三〇
- 二 封建の西歐羅巴……………三
- 三 基督教會の分裂と神聖羅馬帝國創建……………三

第五節 東西洋の角逐……………三

- (一) 西洋の同化力、西洋の東侵……………三
- 一 西洋の同化力……………三
- 二 西洋の東侵……………六
- (二) 東洋の西侵……………七
- 一 蒙古大帝國……………七
- 二 土耳其古帝國……………〇

第二章 歐羅巴對外膨脹の時代……………四

第六節 所謂「再生文化」……………四一

(一) 「再生文化」とは何ぞ……………四一

(二) 文教刷新の運動……………四三

一 伊太利の古學復興……………四三

二 獨逸及び瑞西に於ける宗教改革……………四四

(三) 東洋からの影響……………四六

一 回教國の貢獻……………四六

二 支那の文物の西傳……………四七

第七節 歐羅巴諸國民の海陸膨脹……………四八

(一) 海上の膨脹……………四八

一 世界歴史の開幕……………四八

二 海上發展の先驅……………四九

I 東大陸に於ける葡萄牙人……………四九

II 西大陸の西班牙人……………五〇

三 後進の諸海國民……………五一

(二) 陸上の膨脹……………五三

(三) 極西と極東……………五三

第八節 歐羅巴の新なる戰國時代……………五五

(一) 諸大王國の擡頭……………五五

一 第十六世紀初年の歐羅巴……………五五

二 諸大王朝の争闘……………五六

(二) 舊新兩教の争とその國際戰役……………五八

(三) 近世歐羅巴の國際生活……………六〇

第九節 第一次全歐大戰……………六三

(一) 植民地の争奪と英國の特殊的地位……………六三

一 歐羅巴政策の一新要素としての植民地……………六三

二 英國の二重性格……………六三

(二) 歐羅巴の國際政局に於ける東歐羅巴の發達……………六五

(三) 局地的戰役から全歐大戰役へ……………六六

一 西班牙繼嗣戰役……………六六

二 史上、最初の全歐大戦……………六

第十節 佛國革命と第二次全歐大戦……………六

(一) 佛 國 革 命……………六

(二) 歐羅巴の動亂……………七〇

一 佛 國 の 新 陸 軍……………七〇

二 佛國第一帝政の功名心……………七一

(三) 平 和 の 克 復……………七三

一 和 約 の 成 立……………七三

二 「歐洲協調」と「英國の平和」……………七四

第二編 國民主義全盛の比較的平和な中間時代……………七六

第三章 國民主義の時代……………七六

第十一節 「啓蒙文化」の發展……………七六

(一) 「啓蒙文化」とは何か……………七六

一 英國の議會政治……………七九

二 其の産業上の革命……………八二

(二) 反動時代の諸革弊……………八三

第十二節 西大陸の解放……………八四

(一) アンゲル・サクソン民族の解放……………八四

(二) 羅典民族の解放……………八七

(三) 西大陸は西大陸人の西大陸……………八八

第十三節 歐米列國の極東侵迫……………九〇

(一) 支那に對する海陸からの侵迫……………九〇

一 南方海上からの侵迫……………九〇

二 露國の南下……………九二

(二) 日 本 の 開 國……………九三

(三) 極西への隸従か、將た極東自の解放的努力か……………九五

第十四節 澎湃たる歐羅巴の國民運動……………九六

(一) 歐羅巴の國民運動とは如何……………九六

(二) 佛國中心の時代……………九八

一 七月革命……………九九

二二 月 革命……………100

 I 二月革命と佛國……………100

 II 二月革命と伊太利及び獨逸……………101

 (三) 獨逸の歐羅巴大陸制覇の時代……………102

第十五節 新月帝國に於ける解放運動……………102

 (一) 基督教世界と回教世界……………102

 (二) 所謂近東問題の發展……………102

第四章 帝國主義の時代……………111

第十六節 歐羅巴の新均勢……………111

 (一) 改造された新歐羅巴……………111

 一 歐羅巴の六大強國……………111

 二 歐羅巴の諸暗礁……………114

 (二) 兩大同盟系統の成立……………115

 一 三國同盟……………115

 二 二國同盟……………116

第十七節 國民主義から帝國主義へ……………116

- (一) 外延的膨脹の要求……………116
- (二) 内包的膨脹の主張……………119
- (三) 國民的政策としての帝國主義とその軍事及び外交……………123
 - 一 陸軍主義及び海軍主義……………123
 - 二 均勢から包圍へ……………125

第十八節 暗黒大陸及び大洋洲の分割……………127

- (一) 暗黒大陸の分割……………127
- (二) 大洋洲の分割……………126

第十九節 極東の變局……………126

- (一) 極東の歐洲列國……………126
- (二) 日本の勃興……………123
 - 一 不平等條約の改正……………123
 - 二 極東の二大戦役……………123
- (三) 米國の太平洋進出……………126

第二十節 回教世界の萎縮……………一三九

(一) 北阿弗利加及び中東の回教圏……………一三九

(二) 土耳其帝國の陵夷……………一四一

第三編 世界の戰國時代……………一四五

第五章 第三次全歐大戰……………一四五

第二十一節 大戰の勃發……………一四五

(一) 大戰前夕の歐羅巴……………一四五

(二) 青天の霹靂……………一四七

第二十二節 全歐戰役から世界的戰役へ……………一四九

(一) 汎スラブ主義對汎ゲルマン主義の争……………一四九

(二) 英獨争覇の戰……………一五二

(三) 「中歐」政策の三日天下……………一五四

(四) 敗れたる獨逸の世界政策……………一五五

一 獨逸の對英封鎖と米國の參戰……………一五五

二 露國革命と四國同盟の崩壞……………一五九

第二十三節 大戰の諸特質……………一六〇

(一) 國民的戰役である……………一六〇

(二) 攻城的戰役であり、長期的戰役である……………一六二

(三) 立體戰であり、無法規戰であり、從て最犠牲的な戰役である……………一六三

(四) 世界的戰役だが、眞の意味の世界戰役ではない……………一六五

第二十四節 大戰後の歐羅巴……………一六八

(一) 休戰條約から五箇の平和條約へ……………一六八

(二) 民族主義の徹底……………一七一

(三) 民主主義の充實……………一七三

(四) 國際聯盟……………一七三

第二十五節 大戰後の東西兩大陸……………一七六

(一) 戰國七雄國に於ける飽和的諸國……………一七六

(二) 國際聯盟を率ゐる大國……………一七八

一 歐羅巴大陸の覇者たる佛國……………一七八

二 戰後の大英聯合……………一八〇

(三) 聯盟以外の大國……………183

一 ソウエート(蘇)聯邦……………183

二 西大陸に居然たる米國……………184

第六章 世界的大戰から眞正の世界大戰へ……………186

第二十六節 東西の不飽和國家とその現状打破の運動……………186

(一) ウエルサイエ體制下の獨逸……………186

(二) 華盛頓體制下の日本……………186

(三) 國家主義伊太利の興起と歐羅巴に於ける獨裁政治の流行……………188

一 國家主義伊太利の興起……………188

二 歐羅巴に於ける獨裁政治の流行……………189

第二十七節 世界主義から國民主義に轉向の回教世界……………196

(一) 回教世界の國民主義……………196

(二) 土耳其革命……………198

一 土耳其の新國民主義……………198

二 土耳其革命の發展……………199

三 兩海峽の問題……………101

第二十八節 極東の新風雲……………101

(一) 一九二九年恐慌の世界襲來……………101

一 暴風の前夕……………101

二 暴風遂に到る……………102

(二) 膨脹日本の進路……………102

(三) 日本の滿洲進出と國際聯盟……………109

第二十九節 紛糾せる極西の政局……………111

(一) 獨逸の第三帝國……………111

一 獨逸第三帝國勃興當時の歐羅巴列強……………111

二 獨逸第三帝國の登場……………113

(二) 歐洲不飽和國の現状打破運動……………115

一 伊太利のエチオピア征服……………115

二 獨逸のウエルサイエ條約破棄……………117

I 獨逸の埃太利併合企圖……………117

II 獨逸の再軍備並に非武装地帯進駐……………三六

(三) 伯林羅馬樞軸……………三〇

第三十節 世界大戦役の發展……………三三

(一) 日獨伊防共協定から獨伊同盟並に日獨伊三國同盟へ……………三三

(二) 全歐大戦役及び大東亞戦役……………三三

一 全歐大戦役の勃發……………三三

I 民族的統一に邁進の第三帝國……………三三

II 獨蘇の血闘……………三三

二 大東亞戦役の勃發……………三六

I 一九三七年太平洋西側岸列國の狀勢……………三六

II 日本の支那大陸進出とその大東亞政策……………三〇

(三) 遂に未曾有の世界大戦役となる……………三三

一 極西大戦亂に於ける米國……………三三

二 極東の大亂と米國……………三三

三 世界大亂渦中の東大陸と西大陸……………三七

緒言

第一節 世界歴史溯源

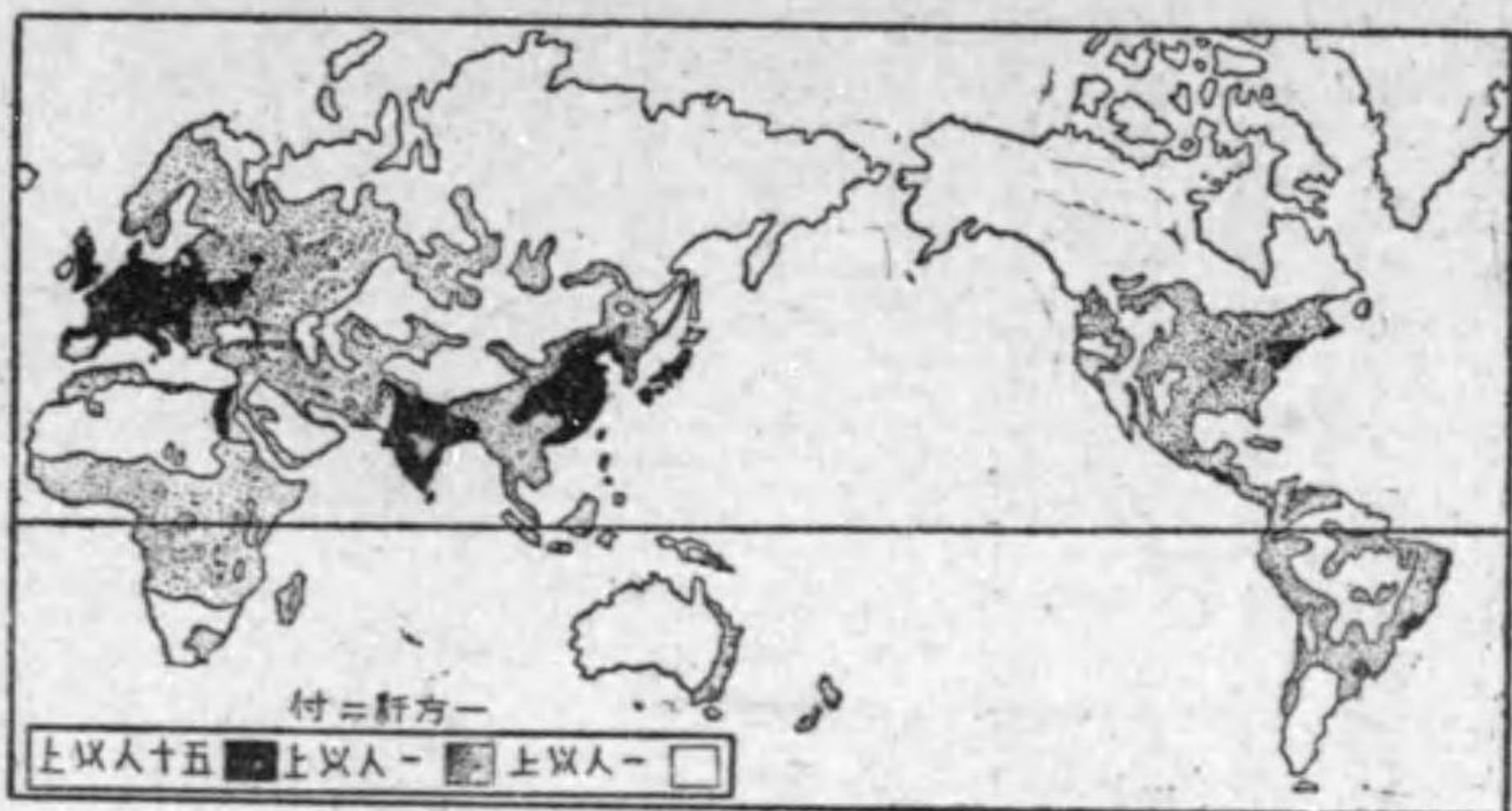
(一) 現代の世界と世界歴史

人類社會は今や全く一の渾一體となつてゐる。形而下、形而上、何れの方面から見ても、我々の生活は、距離や位置の如何に拘らず、頗る纏綿せる幾重もの紐帶で繋ぎ合はされ、その關係は、最も有機的となつてゐる。かやうなことは、百年前、我々の父祖の時代には、全くなかつた所だし、多く想像せられない所なのであつた。現代の人類が、いかに比鄰もさながらの緊密な相互依存の生活を追うて居るものであるかは、世界的の大戦亂が、第二十世紀の全人類を奄有するに至りし生々しき事實を見ても知るべきである。これは蓋し、すべての國、すべての民族の利益や、關心が、今や全く世界大となりつつあることを如實に語るものであるからである。かやうな曠世の大禍亂は、もとより一朝一夕に勃發したものではないから、之を正しく了解しようがためには、我々は出来るだけ、遠くその源に溯つて、その涓滴までもきはめなければならぬ。本講は、左様な意向の下に、世界歴史の推移を丹念に追窮して行くことによつて、聊か現代の狀勢を鳥瞰しよ

うと試みたものである。

(一) 東大陸と西大陸

世界人口分布



表面の七割以上を海水で占められてゐるから、或は、水球と呼んでも、よかりさうに思はれる我が地球の陸地は、北半球に偏在し、従つて、南半球は、最も多く海洋的である。その陸地的な北半球でも、亞細亞は自ら、すべての大陸の中心に位して居り、歐羅巴は、亞細亞の一半島に過ぎないし、阿弗利加は、その派出的の大地塊に外ならぬと見らるべきだし、更に、南大陸の濠洲とても、多くの島々の繋がりで、亞細亞が延長したものだと言つても、ひどく不都合だとは思はれぬ。されば、地球上の陸地は、東西の兩半球で、各獨立した東大陸、及、西大陸の二大塊に分れてゐるとも見做さるべきである。兩大陸塊は、南するに従つて遠ざかつてはゐるが、北端では、最も接近してゐるから、我々の祖先の初めて此世に現れた當時の地形が、略々現在の通りであつたとしたら、文字が作られ、記録が傳へられるやうになつた、所謂、歴史時代に我々がはいるよりも、ずつと以前の悠遠な昔から、彼等が、地球上のすべての陸

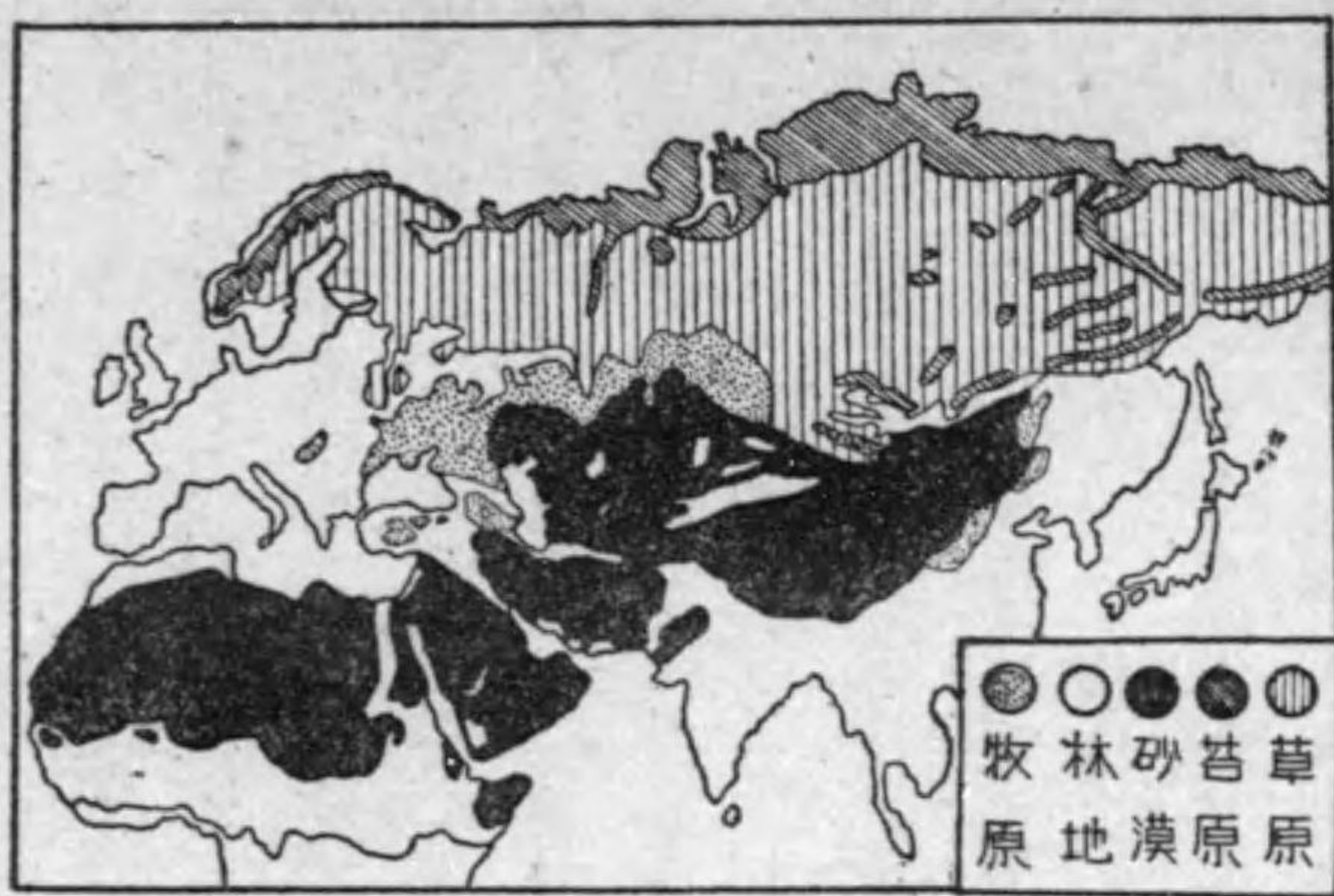
土に蔓るやうになつたりし事情も、容易に納得されるのである。

所が、かやうにして弘まつた人類も、今日では、所によつて、その分布に疎密の甚しい違ひがあり、陸地面積の三分の二を占めてゐる東大陸だけで、地球總人口の四分の三以上がかき集められて居り、又同じ東大陸の中でも、極東、印度、及び、極西（即ち、歐羅巴）の三つの地域に、その殆んどすべてが集中されてゐると云つた状態となつてゐる。これに次ぐ稠密地帯は、北亞米利加大陸で、以上の四個の地域は、僅に陸地面積の七分の一に過ぎないのに、世界人口の大部分をここに集めてゐると云つても良いのである。而して、これ等の地域こそは、現に、政治、軍事、經濟、文教、すべての方面に於て、時代の第一線に立つて活躍してゐる、日、米、英、獨、佛、露等、諸大國の蟠居してゐる所なのである。

東大陸の上記三地域は、又最も、歴史的な文化の發生培養された所でもある。西大陸でも、兩米大陸の間に挟まつてゐる地中海の側岸なる、熱帯直下の高原は、かつては、アステック、マヤ、インカ諸族の獨立の文化を創めた所であつた。これは、まだ、鐵器時代にはいつて居なかつたけれども、已に象形文字や、一種の曆制を有し、又頗る各種の藝術にも長じた、すぐれたものであつたが、西班牙人の渡來すると共に、馬と鐵砲とで、無残にも、壊滅されてしまつた。従つて、西大陸の現代文化は、全く東大陸から派生された、そのすべての性質に於て全く東大陸的のものなのである。

第二節 東西洋の二大文明系統

東大陸中の中央大陸



(一) 東大陸に於ける南北及び東西の兩對立
 最も複雑な地塊をなしてゐる東大陸に、最も著しい事は、西はサハラに始つて、亞刺比亞、イラン、トルケスタンから戈壁までも連なる大沙漠が、此の大陸を横斷してゐることである。此の大障壁によつて、エウラシア大陸は、自ら冷たい氷海に向つてゐる北方と、暖かい海で洗はれてゐる南方との二つに分れてゐるが、これは、大體に於て、坦々たる草原の廣がりである歐羅西伯利亞と、綠野で蔽はれてゐる南亞細亞との對立である。中央大障壁のあたりの草原で育つた遊牧民族が、ひたむきに南方を、彼等が抄掠奪略の目的物として狙つたのは、ここが、資源、豊に、人間の賑つてゐる華やかな國の所在地だからであつた。

此の廣い大陸には、北南陰陽の二元の外に、東西といふ今一つの大きな對立も存在する。歐羅巴は、亞細亞と連つてゐるその廣い東の側面では、地質、地勢、風土、すべての點で、西伯利亞の延長に相違ないと云つて宜しいけれども、墨西哥灣流の影響を被つてゐる大西洋の側面は、東の半面とは、甚しく異つてゐる地域なのである。北回歸線から北緯四十度位までの北温帶を發祥の地としてゐる東大陸の文化が、歐羅巴では、更に二十度も北に押し進められてゐる特異の現象のあるのも、これがためなのである。

歐羅巴に於ける東西の地理上の對立は、同時に、文化的のものでもあるが、同様の現象は、又、之を東大陸の文化地帯の上にも見ることが出来る。此處は、世界の屋根を以て目せらるる葱嶺によつて、自ら葱嶺此麓と葱嶺彼麓とに分たれ、印度河及恒河畔に起りし文化が、黄河及揚子江畔のそれと合流し、東支那海、及日本海を以て成る極東地中海の側面に、新なる文化を醗酵せんとするもの様に思はるるに、荒涼たる沙漠の間を點綴してゐるニールや、ユーフラート、チグリス兩河畔の沖積地から起つた古文化は、地中海のほとりに燦爛たる花を咲かせ、更に北してその歩を北海の側面に進め、終には、大西洋の彼岸までも及ぼされ、かくて、最も特異なる「歐羅巴文化」は開展し、ここに東西洋の兩大文明系統をくりひろげてゐるのである。東西洋の此の對立では、西方は、殆んど壓倒的の優勢を持し、人口に於て世界總人口の六割九分を支配下に置いてゐる彼(即、歐米)は、陸地面積の八割七分を己のものとなしつ々ある現狀である。

(二) 東洋の天地

一 印度の世界

東洋が西洋に壓倒されてゐる現状は、東洋を代表してゐる古文明の發祥地である、印度と支那との不振を意味する。之を地理的に見るに、印度と支那とは、共に殆んど完全に天與の國防線を繞らされてゐる所である。印度の境には、支那の場合のやうな沙漠こそないが、千古不可踰ヒマラヤの雪山で大陸から遮斷されてゐるから、かやうな隔離作用から生ぜらるる孤立は、殆んど完全に近い。従つて印度も、支那も、共に、交一の獨立の世界をなしてゐるものである。この孤立の單一性こそは、複雑なる地形に由來する多角的の西洋から、東洋をば、何よりも第一に區別するものでなければならぬ。東洋の此の二大地域は、また、共にモンsoonの下にある最も豊饒なる米産地帯である。民生の夙に此處に繁殖した所以は、偶然ではないのである。

ヒマラヤは踰へられないが、西北、印度河の方面には、この隱者國を外界と通ぜしむべき間隙がないではないので、西亞細亞の印度歐羅巴人は、この門戸に由て半島に侵入し、之を征服したのであつた。かかれば、西北に向つて開かれてゐる印度は、寧ろ大なる西洋圏内に入つて然るべきに、實際は孤立索居の状態に留まり、否、却つて東向して極東地中海の側岸と離れがたい關係を結ぶやうになつたるは、不思議の因縁と謂ふべきである。

印度は、この西北の間隙によつて外部からの侵入を被つたこと、少くとも、前後八回に及んでゐるから、その内部の事情は、頗る複雑になつて居り、大まかな數へ方でも、八つの宗教、二十三にも及ぶ言語がその

中では行はれてゐる。これ等、多くの宗教の中で、最有力なるは、四千年の昔から榮えてゐる婆羅門教、即、今日の印度教で、物質を排して只管に精神の解脱に精進した印歐種が、哲學、科學、文學、藝術の各方面に顯はした偉大なる行蹟は、實に世界の稀觀とすべきものでなければならぬ。印度のこの社會に著しきは、種姓の制である。これは、土着の未開民を制し得たる印歐人種が、彼等の血と文化とを保全し、永くその人種的優逸を持続せんがために、腐心して作り上げたもので、これが、その古文化をば、純一無雜の姿で傳へることに大に貢獻した事實は争はれないところである。けれども、印歐種が、出世間の生活に専にして、實際政治を念とせざりし結果、半島は、殆んど政治上の統一を得る機會がなかつたし、それから、又、外侵のある毎に、彼等が自己保全に熱中して、愈々益々、種姓の特權制度を膠柱するのみであつたため、印度の社會、及、人民を擧げて、終に世界の大きな潮流に伴うて流轉せしむべき彈力性を全く失ふに至らしめたことは、千古の憾みとせねばならぬ。耶蘇紀元前第六世紀に、釋迦出でて平等主義の佛教を説き、種姓の害毒を除かんとし、その教は、一時は、全印度に弘布されたこともあつたけれども、より深き根を印度に張つてゐる印度教のために、終には逐ひ立てられ、活路を半島以外に求むるより外なくなつてしまつた。これは、印度教の驚くべき保守性のためで、そこにこの教の強みがある譯だが、何分にも、進んで印度の外にその教を宣傳しようといふやうな積極性が全然缺けて居たから、回教徒の闖入に際しても、勇ましく闘つて之を喰ひ止めることも出來ず、終には、南海から押し寄せて來た英佛等に自己自身の運命をも托するの止むなきにす

に至つたのである。

二 極東の帝國

I 支那の政治的統一とその膨脹

支那も、印度と同じく、それ自らで一の世界をなしてゐるけれども、此處も歴史以前の時代には人種や文化の點で、西方の世界と全く無關係ではなかつたらしく思はれる。單綴語を話す漢民族が、黄河の中流に現はれ、逐次、土着の人民を征服して之に定住したのは、大體、今から五千年の古にあり、彼等は、耶紀前五〇〇年の殷代には、已に金石併用の文化に進み、更にそれから周代の青銅器の時代にと發展した。西洋では、耶紀前三〇〇年、希臘人は、初めて鐵器を知り、これから三百年の後には、鐵は、彼等の間に博く用ゐらるるに至つたといふから、鐵器に關する限り、希臘人は、漢人種に先鞭をつけてゐることになるけれども、支那周代に於ける銅合金の多種にして精巧を極めて居ることは、今日の學者をして、尙且、その技術の優絶を嘆賞せしめずんば止まない。そればかりではない。上代の支那で驚くべきは、その偉大なる思想的活動の方面にも存する。西洋でも、古代希臘のアテネや、中世後半期の伊太利都市は、その破天荒な學問藝術を以て、新時代の開拓者となつたが、支那に於て所謂、諸子百家が輩出し、その民族的天才の大に發揚せられたるは、亦、實に春秋戰國の時代にあるのである。思ふに、支那思想界の此の黄金時代は、その文化の頂點に達した時であつたと謂つても過言ではないであらう。封建の亂脈と混沌とは、却つて天才の自由無礙な

支那帝國と羅馬帝國



る發展を助けた趣が多分にあつたが、耶紀前二二一年、秦、天下を統一し、封建を撤して、中央集權するに及び、支那は、開闢以來、初めて一君の下に統べられたのである。

かくて、平和は國內を支配することになつたけれども、邊境の外民族は、眈々たる虎視を放つて絶えず之を窺窺しつゝあつたこととて、支那は、長城を築いて之を防いだり、金帛や土地を贈つて之を懷柔することを一刻も怠ることが出来なかつた。耶紀前第二世紀、漢が大兵を擧げて西域を征するに及び、烏駝の如き匈奴を挫き、大に支那の領土を西方に擴張することが出来たけれども、その威力を永く支持しきれなかつた。が、しかし、漢の勢力は、ともかくも中外に宣揚され、漢人といへば、支那人を呼ぶ稱呼となり、その最發達した象形文字は、漢字と呼ばれ、又、儒教を始め、ここで發達した學問の體系は、漢學と呼ばれて、北は蒙古、西は西域、南は安南、東は朝鮮、日本までも輸出され、支那は、東洋諸國からは、文華の宗國として

仰がるるに至つたのである。

II 支那の民性

支那の統一は、西洋のすべての文明國を統一した羅馬帝國に先立つこと二百年の出来事である。最初の帝國建立者たる秦は、十五年で亡びて、間もなく漢が之に代つたから、一君統一の政治は、依然、保たれて行つたが、しかし、かやうな皇帝政治も、中々、さう望みどほりの持続的な平和を齎してはくれなかつた。此の點では、西洋最初の統一帝國たる羅馬との間に格段の違ひの存することを否定し得ないのである。羅馬は、實際、その腕力で、彼に従はないすべての民族を片つばしから、討伐撃滅して假借しなかつたのであるが、支那では、かやうな征服が、干戈よりも寧ろ外交上の交渉によつて決せられた場合が少くなかつた。それから、羅馬人は、生れながらの武人だといふ語に、相當、誇張があると私は思ふが、しかし、兎も角も、百戰萬鬪のその軍隊が、絶え間なき血闘に鍊成されて、終には、紀律峻嚴、勇武の絶倫さでは、全く天下に敵なきほどの強いものとなつた事實は、否まれない所である。所が、支那人は、民族としては、決して左様な武人的性格を以て秀でてゐるとは言はれない。彼等は、大の平和愛好者である。此處は、昔から爲政者が、農を國本として之が奨勵を怠らなかつた大きな農業國だし、又、その人民も、日出でて作し、日入りては息し、井を鑿て飲み、田を耕して食ふ、極めて勤勉な泰平の逸民として伸びて來たものである。凡そ平和な農民にとつては、天災地變と、惡政府と、戰亂とほど厭はしいものはないが、これ等の禍の全く宿命的な

支那では、一種の諦め觀で、他を待みとすることなく、家族、宗族を一團として自衛自治の策を講ずるより外に活くるの道がないのである。露國の爲政者は、正教信仰を無知の農民に押しつけて、彼等の服従を買ひ得たが、支那の農民は、政府當局の指圖を待つまでもなく、自ら一種の信仰を發展し、老莊の無爲自然觀を民間信仰に結びつけた極めて卑俗な功利教（道教）によつて、彼等の安價な安心を求むるに至つた。ここでは、儒教の齊家治國説や、佛教の解脱涅槃論は、何れも、迂遠にして俚耳に入りがたしとされてゐるのである。

(三) 西洋の天地

一 極西の帝國

I 東地中海側岸の世界

東洋の文明は、印歐種、又は、漢民族の民族的天才の産物として起り、且、今日に至つた單元的で、又、最持久的なものだが、西洋文明は、之に反して、東地中海の側岸に起つた、色々の民族が、入り替り、立ち替り、銘々の持ち分を貢獻することによつて發展して來た、極めて混成的、融合的の産物である。東洋は、それ自らで満足して他に求むる所がなかつたけれども、五つの海の中に、極めて複雑な地形をなし、統一した一國家をなす便宜を缺いて居た西洋では、阿弗利加、亞細亞の古文明國、皆、やがては、東地中海の岸に出で、ここで豊富なる接觸の機會を持つたのであつた。埃及とメソポタミアとは、かくして、いつでも、彼

等の間の橋梁もさながらのシリアの地を争ひ、初、埃及は、之を制したが（耶紀前第十五世紀）、アッシリア興るに及び、七世紀には、その手を埃及までも伸べた。メソポタミアの強國の地中海の岸に出たのは、これが初めてである。次で、第六世紀には、波斯は、古代のすべての文明國を併呑し、東地中海上に蔓つた希臘人と相對するに至つた。

かやうに、大國間に激しい闘ひが行はれる都度、その間に介在した小國は、ひどい目に遭はされないことはなかつたので、猶太の預言者は、来るべき天下分け目の戦は、これぞ世の終りなる最後の審判の戦であると言つて、彼の國人を警めたものであつた。戦は、これまでは、南のセム人と、北の印歐人との人種的戦役のやうな性質を持つて居たが、舞臺が一轉して、東地中海の海上権の争となると、南北の抗争は、明白に印歐種同志の東西の大對抗戦になりかはり、最後の戦どころか、戦闘は、反復して此の海上に行はれ、波斯は、希臘とサラミスに戦つて敗れたが、北方のマケドニアの希臘を統制するや、大遠征軍を興し、東征して波斯を亡し、進んで印度までも伐ち入るといふえらい勢を示した。希臘人の狭い都市的の國家観は、ここに至つて破れて、人間の住める限りの世界をば、政治的に一括しようといふ世界的帝國の新思想は、之に代つて起つて來た。けれども、希臘人の此の大帝國も、古代のこれまでの諸大國と同じく間もなく潰えたから、大帝國建國の使命は、西洋では、結局、羅馬人の肩に負はせられたのである。

II 地中海世界の統一

中部伊太利、チベル河上の七丘の上に出たが、四方の諸部族から壓迫されどほしだつた、憐れな羅馬人が、やつと、外人たるその王を逐ひ、共和政を樹ててから、伊太利半島を統一するまで、二百餘年もかかつてゐる。即、耶紀前の第三世紀に至つて、彼は、初めて、北は大陸の方、南は地中海上にも拘らず、共和の羅馬が、駭々として海陸に膨脹して行つたことは、實にめざましい限りである。かくて愈々海に出るとなると、第一に彼の前に立ちはだかつたものは、其の本土は已に波斯に亡ぼされたが、阿弗利加の北岸で榮えてゐるフェニキア人のカルタゴであつた。羅馬は、そこで新に海軍を興し、一百年あまりの間に三戦して終に之を亡し、次では、東して希臘を征服し、最後に、ヘレネス世界の代表者たる埃及に向ひ、耶紀前三十一年、アクチウムの海戦で之を撃破した。その間にアルプを踏えて大陸に向つた無敵の羅馬軍は、ガリアを従へ、終にはブリタニアにまでも及んだから、最大の版圖に達した當時の羅馬は、西は、イベリア半島から、東、裏海に及び、北は、ライン、ドナウの兩河から、南、サハラ沙漠に達する、廣袤實に五五〇萬方軒、人口一億と想像される、すべての文明世界を包括した未曾有の大帝國であつた。

これだけの大事業を仕上げるため、羅馬は、英國が太陽の没することのない彼の大帝國の建成に要した位の四百年を費してゐるから、それは、僅か七八十年にしてエウラシアを奄有した蒙古帝國とは、その迅速さの點では、比較も何も出來ぬが、羅馬の場合、驚嘆を値するは、彼が古代の膨脹民族のすべての型を打つて

一丸とし、帝國主義に全く新機軸を出した點に存せねばならぬ。埃及も、アッシリアも、波斯も、皆、その武力を誇る軍國國家として立つたが、羅馬は、之を以て能事終れりとせず、フェニキア型の商業と、希臘型の文化とをも取り入れ、能く古代に於けるすべての膨脹國家の短所を補ふことに成功したからである。

行政の術に長じて居た點でも、羅馬は、寧ろ後代の英人と對較されるであらう。羅馬人は、英人の様な自治をば屬領に許さなかつた。共和政治の名は、相不變、留められたけれども、事實は、皇帝と稱した一君の統制の下に羅馬の官吏によつて治められた。唯、新に帝國に内附した、異種、異語、異俗の諸民族に對する取扱ひは、いかにも鷹揚なもので、言語などは、必ずしも、羅馬都人士の語、即、羅典語を強むない。わけでも、希臘を初め、東地中海の側岸では、希臘語の使用には、些の制限も加へなかつた。それでも、西地中海の側岸、殊に西歐では、羅典語は、自然に普及して行つた。法律、慣習の違つてゐる諸民族に對し、やかましくて窮窟な羅馬の公民法を強ひることは、少なからず不便と考へられたので、天理自然の法と信ぜられたものから、新に衆民法なる寛大な新法を案出して之を適用することにした。それに羅馬自身は、多神教の國であるから、外國の神が、はいり込んで來た所で、やかましく排斥される心配はないから、新附の諸民族も、羅馬帝國の臣民として、皆その地に安住することが出來たし、人種的差別觀の最も薄い羅馬人は、又他民族と結婚することをも意としなかつた。かやうな事情の下に、地中海世界は次第に統一されたので、耶紀二一二年には、帝國政府は、令してすべての帝國臣民に羅馬の公民たる權利を與へることにした。實に

當時の歐羅巴人にとつては、「私は羅馬の公民だ」といふことほど、大なる誇りはなかつたのである。羅馬の帝國主義の偉大なるは、彼が、すべての人を收容して悉く之を羅馬の公民たらしめたるその絶大の同化力に在て存したのである。

二 「羅馬の平和」と基督教

共和時代の羅馬は、内部に、はてしない鬭争をくり返して居たに拘らず、能く大帝國建立の大業をなしおぼせた。さうして耶紀前三一年を最後として、外國との戰爭が止んだら、今度は、内訌も、亦、殆んど止んでしまつた。邊境では、民族的の小ぜり合ひは、相變らずないことはないが、それもないとしたことではない。内にも、帝位の相續に付て、ごたごたが起らぬとは言はぬが、しかし、國の内外を通じて、世の中は、大分、靜かになつた。多年の戦亂で、人々も、此の上の血闘に飽きてしまつたのだ。羅馬市内のヤヌス神の祠堂は、これまで、ずつと開かれどほしたつたが、今や久方ぶり、平和の到來と共に、その扉が閉ざるることになつた。所謂「羅馬の平和」の時代が訪づれて來たのである。

平和の世の中になると、内外の生活は、又、戦時とは違つた意味で活潑になつて來た。人や物資の交通交易が頻繁になつて來る。商賣が盛んになつて、國も、人も、ひとしく富んで來た。羅馬の版圖が廣まつて來ると、羅馬人はその最も得意な工藝上の腕前を顯はして、羅馬を各地方と結びつける道路網を八方に通じたし、又、羅馬式の都市を到る處に築いて、そこには、水道を敷設し、市場を開き、各種の劇場を新設したか

ら、帝國の到る處に、小さな羅馬市が起つて來て、異域も、ために羅馬化された。

かくの如くにして、新なる帝國に、法と秩序とが與へられたが、基督教は、更に之に道德上の理想を提供した。耶蘇は、帝政の初年に羅馬の臣民として猶太に生れた者である。彼は、彼の同族が、偏狹にも、他民族を排擠してやまざるを以て、神の聖旨を謬るものであるとし、五百年前、釋迦が平等主義の福音を婆羅門教徒に説きたりし様に、大に時人を警め、猶太人が此世を惡魔のものであるとし、すべての不幸は、神罰のあらはれに外ならぬとせるに反對して、神の支配の絶對なること、その愛の無窮であることを説いた。此の世に於て尊ぶべきものは、物ではなくて、人をして人たらしむる所以にありと誨へた。

耶蘇に従ふものは、耶紀五〇年頃、アンチオキアに最初の教會を設けた。初めほどは、格別羅馬人の注意をひかなかつた彼等も、羅馬の神々を斥くる態度の執拗さから、政府の嚴辣な迫害の目的物となり、窘逐、三百年の永きに及んだが、終に勝ち抜いたのである。耶紀第四世紀の初、帝國政府が、基督教を國教とするの令を發するに至つたるは、其教徒の熱烈なる信仰、そのすぐれたる品性の、羅馬の朝野を感動せしめた結果に外ならなかつた。

「羅馬の平和」は、危うげながら三四百年も續いて終に破れたから、基督教の採用も、格別、平和に貢獻する所あつたとは言はれない。帝國の敵としての基督教は、其姿を没したけれども、既にして三二五年、ニケーアの宗教會議で、各派に付て正統、異端の別をつけることになり、今や教會の内部に新なる抗爭の種子

が時かるるに至つたからである。そこで異端を宣言されたアリウス派に歸依した輩は、自ら正統派からの窘逐を免れ得なかつたのである。

第一編 「羅馬の平和」破れてこの方の歐羅巴

第一章 所謂「歐羅巴」發達時代の一千年

第三節 諸外民族の歐羅巴闖入

(一) 歐羅巴中世史の歴史的意義

「羅馬の平和」が三百餘年もの永い間、能くも保たれたといふことは、不思議に思はれぬでもないが、それは、當時の彼が西洋唯一の存在で、他に之を脅すほどの大敵の居なかつたせいなることは言ふまでもない。それから又、平和の終に破綻を來すに至つたのは、情性によつて辛うじて生命を繼いでゐるに過ぎなかつた帝政の、もはや、大局を保つに堪へなかつたため、及び、同時にこの弱身につけ込んで、外から色々の闖入者がその境を侵して來たためであつた。かくて、西洋はこれから第十九世紀の初までの十數世紀にわたる一種の亂世に返つたのであるが、その中、史家が、通常、中世史として取扱つてゐる最初の一千年間は、混沌時代（又は之を闇黒時代といふものもある）の前半と、封建時代の後半とに兩分される。この一千年間こそ

は、實に羅馬後の西洋が、新なる生命を伸べようともがいた時で、彼は、猶太の唯一神教、希臘の學問藝術、及び、羅馬の行政的能力の三つに加ふるに、更に第四の要素を以てして、此處に眞に「歐羅巴的」と稱せらるる生新潑刺の新文化體系を發展するに至つたのである。第四の要素とは何ぞ。曰、それは、ゲルマン的、スラブ的なるものである。

(二) 東西洋に於ける民族の大移動

支那も、羅馬も、帝國の統一を完成し得たその時から、各の國防上の最大の關心をば北邊に持つて居た。羅馬は、完全に地中海を制したから、彼を南方から脅す第二のカルタゴは、最早、ない。支那には、南越の蠻族が居るが、これは意に介するに足るほどのものではないし、彼が東夷を以て目してゐる日本とても、同斷であつた。支那の心配は、山岳地帯や、沙漠からやつて來る慄悍無比の西戎と北狄とであつた。そこで、彼は、夙に所謂萬里の長城を築いて之を防いだが、中々、安心がなり難い。歴代の支那政府の中には、前漢や後漢の様に、積極的に兵を送つて討伐を試みたものもあつたけれども、概ね、金帛を贈つて之を懷柔する、彌縫策にのみ依つたため、戎狄の叛服は、常なく、それだけ邊境は、兎角、穩かであり得なかつた。羅馬帝國は、耶紀第三世紀の末から、東西分裂の形勢が漸く明になつて來たが、支那では、五胡と稱せられし戎狄が、どしどし塞内におしかけて來たため、漢人は、之に壓迫されて、耶紀三一七年には、終に江南にその都を遷すの已むなき所謂東晋の世となつた。そこで湖北遊牧の民は、今や公然、支那中原の主人公となり、江

北を制すること百五十年に及び、五八九年、漢人が、再び、全支那を統一するの時に及んだ。戎狄が、一時たりとはいへ、大なる支那帝國の統一を破り、之を分割したといふことは、支那自らの歴史上、劃期的の大事件たるを失はぬけれども、漢族創始の文化そのものは、之がためにその實質の上に何等影響せらるる所なしと謂つて宜しいのである。何となれば、江北の支配者となつた五胡も、全く漢人に同化されて、結局は、その民族的の存在を失うてしまつたし、南せし漢人は、未開の江南を開拓することによつて、新にその文化をば所謂支那大陸の全疆域に擴充することになつたからである。

歐羅巴の場合は、これとは大分違ふ。支那では、戎狄の新要素を加ふるも、文化そのものの面目は、少しも改まらなかつたが、羅馬の場合は、さうではなかつた。羅馬も、北方の警戒が最も嚴重で、ライン、ドナウ兩河間の間隙や、そちこちに長城を築き、北蠻の侵入を防ぐことに油斷はなかつた。尤も、これ等の夷狄の中には、捕虜、又は、奴隸として帝國に連れて來られてゐるものは尠くなかつたし、秦平、日久しうして、羅馬都人士が文弱となり、兵隊の供給が困難になると、蠻人の一隊、又は、種族全體を邊境の監守隊として雇ひ入れ、國防上の責任を分擔させるやうな便法も、案出されて來たから、羅馬帝國には、極端な華夷の二元思想にこびりついて、外民族を賤蔑する支那のやうな差別觀は、行はれず、それだけ、北方蠻人の害を被ること甚しくはなかつた。

所が、羅馬邊境のこれ等の蠻民をして其の堵に安んぜしめない動亂の時代は、西洋にも起つて來た。耶紀

第二世紀の頃、トルケスタンの沙嶋に數箇の大國が起つて、激烈な沃地争をした結果、その煽りを食うて、西方に活路を求めた遊牧民のため、東歐羅巴に屯在した白哲の諸民族が、それからそれと、その波に押されて、終には、安住の地を羅馬帝國の中に求めねばならないものも生じて來た。印歐種のゲルマン及びスラブ及びウラル・アルタイ語の諸族は、即、これである。更に、又、それ自らの獨立の動機で、南方から極西世界の侵略を試みた亞刺比亞人もあつた。

(三) ゲルマン民族の出現

羅馬人が、ゲルマンと呼んだ民族は、ラインとワイヒセルとの間なるゲルマニアの寒濕な森林地帯に住んで居た印歐種のことであつた。これは、羅馬人よりは、背も高く、岩疊で、頭髮も、眼玉も、黒みがかつた南方人とは違つて、金髮碧眼である。彼等は、狩りで野外に出るでなければ、置酒放吟を樂んでゐる他愛なき自然崇拜の蠻民である。羅馬の記者には、彼等の嘘付なことや、不潔を、唾棄してゐるものもあるけれども、又、「ゲルマニア誌」をものして、ひどく此の蠻民の習俗を讚美してゐる者もある。第十八世紀の佛國記者は、この傳聞に従つて、ゲルマンが持つて居た議會のならばこそは、後の憲政の淵源だとほめたたへてゐるが、これは、未開民の間では、一般に、かなり民主的の制が行はれてゐるものなる事實を知らなかつたから起つた誤りなのである。ゲルマン婦人の貞節に付ても喋々されてゐるが、これは、強ち當時の墮落類敗せる羅馬婦人を諷諭せんがためばかりの誇張ではあるまいと思ふ。

東洋の民族に押されたのだから、東方の帝國は、自ら侵入の第一の目標となり、耶紀三七五年、ドナウ渡南を以て、ゲルマンの帝國侵入の第一歩が印せられたのである。それから、色々の部族が、交るゝ、主として西帝國の領土を蹂躪し、大移動は、五六八年まで續いて、これで一段落を告げ、これから第二、第三の大波を待ち受ける段取りとなつた。この間に、東海のほとりを出たゴート族は、黒海岸に轉じ、それから二つに分れて、西ゴートは、バルカンからイベリア半島に、東ゴートは、伊太利半島に入つたし、北方に起りしワンダルは、地中海を渡つてチュニジアに、ランゴバルドも、同じく伊太利に移つて、それと、獨立の王國を建てた。これ等の蠻族王國は、一つの取りのけもなく、結局、後に興つた強國のために滅され、最後まで残つたものはブリタニアを占めたアングル・サクソン族と、ガリアに據つたフランク族とのみであつた。

(四) 新民族の形成

二百年あまりにわたつた此の民族の大移動が齎した結果の一つは、帝國の分裂、及び互解であつた。帝國の版圖、廣きに過ぎ、之をば、一君の支配の下におくことの無理なことが感ぜられたので、諸蠻族の大移動が愈々始められ、彼等が帝國內に押し入つて來る様になると、三九五年、終に帝國を二分し、東方に君^{コンスタンチン}府を首府とする東帝國を立てることになつた。やはり、羅馬帝國と稱し、その人民は、羅馬人の名で呼ばれてゐるけれども、彼等は、實は、希臘語を口にする希臘人に外ならぬのである。此の國は、地理的關係に恵まれてゐたので、永く存続したが、西方の帝國は、四七六年、終に蠻族のために潰されてしまつた。移

動の行はるる都度、戦亂の闘はさるる都度、すべての地方は荒されたから、最も羅馬化された文化的な西歐羅巴は、どこもかしこも、ひどく破壊された。

此の動亂は、しかし、徒らに破壊ばかりで終つたものではなくて、別に建設的の方面もあつた。これらの結果の今一つである、互解したる西羅馬帝國の廢墟の中から、新しい民族や、國家が興つて來て、極西の歴史をして、大に活氣付いたものたらしめ、將來のより大なる發展を期するに至らしめたからである。さういふ國の一つは、羅馬の軍隊が撤退してから、北海側岸のゲルマンの諸族がおしよせて行つて割據し、就中、アングル人、サクソン人、最も優勢で、終にブリタニアの東南部の全體を併せて作つた英國である。今一つは、ライン河畔に起りしフランク人が、五世紀の末から次第に膨脹し、ガリアを併呑し、東はエルベ河のほとりに進出し、更にアルプ、ピレネーの兩大山脈をも踰へるほどの一大國家を築き上げたことである。アングル・サクソンも、フランクも、共に、基督教の正教宣教師に従ひ、洗禮を受けて基督教徒となつた。彼等が、アリウス派の様な異端に赴かずして、直に正教に歸依し、歐羅巴文化を直接にとり入れることの至便な態勢をとつたことは、これからの彼等をして、基督教の歐羅巴世界に自ら重きをなさしむる所以のものでなければならなかつた。フランク族が、歐羅巴の中原を視つて之に侵入したアラビアの回教徒を撃破し、全くその鋒先を挫くといふ赫々の戦果を挙げ得た時には、殊にさうであつた。

第四節 回教の世界と基督教歐羅巴

(一) 歐羅巴に於ける猶太教の社會

西洋古代史上の壯觀は、セム種と印歐種との南北に於ける抗爭の物語りである。これは、羅馬のカルタゴ撃滅を最後とし、勝利は後者に歸して、一旦その局を結んだが、セム種は、これで屏息してしまつた譯ではなく、アラビアの遊牧民の間から回教が起つて、西洋のこれからの發達に大きな影響を及ぼした。が、回教の論述に入るに先ち、基督教、及び、回教なる二大唯一神教の先驅である猶太教を興せる猶太人に付て一言せねばならぬ。

猶太人も、アラビアに起つたものである。彼等が、多年、新月形沃地と埃及との間に遊牧生活を追うてゐる間に唯一神エホバの信仰を得、耶紀前一千年頃、やつとパレスチナに落ち着いて獨立の王國を建て、都エルサレムに奠め、神殿を營み、神に奉仕することが出来たのである。ところが百年をこそこで、折角の王國も、南北に分裂すると、今度は、又、三百年あまりの間に、此等の兩國も、次々にと、強國の餌食に供され、それから後の猶太には、再、政治上の獨立はかへつて來ない。さうして耶紀七〇年には、羅馬帝國のため、エルサレムを陥れられ、エホバの神殿と神物とは、全く破壊され、かくて故郷を失つてしまつた猶太人は、世界の到る處に放浪の生活を追ふの止むなきに至つたのである。

斯く散れ〜になつたのでは、滅亡の外ない猶太人をして、幸にしてその民族的存在を失はしめなかつたのは、彼等の居る所、到る處に僧侶ラッビを中心として教會シナゴグが結ばれ、毎週、安息日の集會に一同集まつて聖書を繙き、祖先の昔を偲び、選民的の自尊心を鼓吹することの怠られなかつたからであつた。此の教國的セオクラーチクの社會では、神意を受け、之によつてその人民を率ゐるものは、僧侶のものである。かくして、自分の民族的特性、特風を持ちつづけ、決して周圍の社會に同化しない異國人の猶太人が、何處でも歡迎される譯はなかつた。羅馬時代の彼等は、信仰の自由を許されたが、官吏や軍人となるには、色々な束縛を加へられて居た。羅馬の滅亡後、蠻族の諸國でも、猶太人は、外國人として取扱はれ、隨分、虐待ゴッム虐殺なども行はれたのである。その中に在て能く存続し、繁殖し得た彼等が、就中、その才を伸し得たのは、經濟生活の方面であつた。アリストテレスの經濟學では、金錢は不毛なものとして教へられてゐるし、新約聖書でも、金で利子を徴することは、禁斷されてゐる。耶蘇は、富めるものの天國に入りがたきは、駱駝の針の穴をくぐるが如しと言つて富を詛つてゐるが、猶太人は、富を害惡視しては居ない舊約の教に違つて、基督教徒の閑却してゐる金融の方面に自らの活路を開いて行つたのである。

(二) 回教及び回教の世界

一 回教の勃興

亞刺比亞は、亞細亞大陸の邊隅に位してゐる沙漠地帯で、ここから出て、新月形沃地を占めたセム民族

は、次々に西洋の歴史を賑はしてゐるが、半島そのものは、剽浪者の住み家たるばかりで、文明の世界からは、全くかけはなれたものであつた。ところが、耶記第七世紀に至り、摩訶末教と稱せられる一神教が勃興し、これまでばらばらだつた諸部族を統合したので、亞刺比亞人は、忽ちにして一大勢力となるに至つた。

摩訶末教、即、回教は、唯一神教の先驅たる猶太教と基督教とを捏ね交せて出来たやうなものだが、猶太教のやうな種族的なものではなくして、基督教と同じく、極めて宣傳的な世界的宗教である。系統的には、寧ろ猶太教の流を汲むこと最も多く、その教も、亦、同じく簡易を極め、何事も神の宿命なりとし、絶対に之に服従する。此の正しい教を世界に弘布するは、神の命じたまふ所なりとするから、抵抗するものに對しては、決して假借しない。沙漠の剽浪民に對しては、無意義な貧の福音などは説かぬし、偶像を排することも、猶太教と同じく、亦、至嚴だ。そこで回教徒をば、馬に乗つた猶太人だと評するものがあるのである。

回教信者に最も大事な五基といふものがある。その第一は、神は唯一の眞神で、摩訶末は、其の預言者だといふ信仰の告白である。二、禮拜、これは、猶太教では、毎日三回、エルサレムに向つて行ふのを、方向をメッカに換へ、度数を増して五回といふことにしてゐる。三、斷食、ラマザンとして預言者、天の啓示に接せし月を紀念し、一ヶ月間、之を行ふ。四、喜捨、五、巡禮これである。尙、又、亞刺比亞の多妻の惡習も制限を加へられたし、酒も禁ぜられた。慈善親切は勧められ、克己節約の徳が説かれた。回教は、實に倫理的、向上的の宗教であつた。

二 回教の東西洋蔓延

回教の傳播は疾風の枯葉を捲くが如く、十年にして、亞刺比亞の全土はこれに靡いたが、更に、三十年あまりの間に、セム種とは宿命的の因縁で繋がれて居た新月形沃地を初め、埃及、波斯も、悉く平定された。

六六一年、都は、ダマスクスに遷されたが、それからは、東の方、印度河まで、更に又、アラブ海のほとりまでも、その手が伸ばされ、東羅馬帝國の都、君府の彼等に包圍せらるる所となること、前後、三回に及んだ。此の方面からの歐羅巴侵入の計畫は、成功しなかつたので、回教徒は、道を西の方、北アフリカに轉じ、ジブラルタルを渡り、忽にして西班牙を略し、進んでガリアを侵したが、七三二年、ツールにフランク人のために要撃せられ、敗れてピレネー山の南に退いた。第十一世紀に至り、小亞細亞は、終に回教徒の掌裡に歸したけれども、ピレネーとボズフォルスとは、相變らず、基督教世界の障壁として之を越ゆることは出来なかつた。が、何れにしても、回教徒の膨脹は、全く驚異的で、七五〇年におけるその版圖は、實に一千万方軒に達すると稱せられた。これは、羅馬帝國に彼此、倍する位のもので、その膨脹の迅速さと、その廣



第四節 回教の世界と基督教歐羅巴

大さとは、僅かに蒙古帝國のそれに及ばざるだけであつた。尤も、回教帝國は、蒙古帝國の持つて居ないすぐれた文化を持つて居たし、又、線香花火的の存在に過ぎなかつた蒙古帝國とは違ひ、今尚、世界の一勢力圏たるを失はないのである。

當時の歐羅巴では、東方は勿論だが、その西方でも、建設的の文化は、まだまだ、成り立つて居なかつた。歐洲史家は、フランク民族の御蔭で、歐羅巴の文化は、アラビア人の鐵蹄から救はれた、と揚言してゐるけれども、當時のフランクの文化は、アラビア人のそれとは比べられない憐れなものであつた。預言者たる繼承者ヘリツァの下に統一されることになつてゐる回教世界も、七五〇年には、それ／＼バグダッドとコルドバとを首府とする二つの帝國に分れたし、更に埃及や、波斯も、これから分れると言つた状態ではあつたが、二大都やカイローは、回教文化の中心として時の歐羅巴の及びもない燦爛たる文華を持つて居た。彼は、波斯や希臘の古文化をとり入れ、其の古典を翻譯し、印度の數字を輸入して數學を起し、その他、天文、地理、博物、理化、醫藥、百科の學、一として究明せられざるはなく、その建築工藝、亦、大に見るべきものがあつた。回教國を媒として、東西洋間の交通は、大に進められ、陸海上の交易は、旺盛となり、之により、新なる文運の進展は大に促がされた。

(三) 中世歐羅巴の基督教社會

一 東歐羅巴の斯拉ブ、海上のノルマン

I 東歐羅巴の斯拉ブ

西歐羅巴でのゲルマンの移動が止んで、セム人の活動が又初まつたと思つたら、ゲルマンと最も近い印歐種の斯拉ブが、今度は、東歐羅巴に現はれ、大體、エルベ河を界として、ゲルマンの東に隣し、七、八世紀の頃には、遙にバルカンの南端までも侵入するに至つた。さうしてドナウの南と北とに分れ、南方の所謂南斯拉ブ人は、多く、政治上の關係から、正教に歸化せしセルビア人と、加特力教を採用したクロアチア人とに分れたし、更にブルガリア人も、その間に加はつて、バルカン半島の民族關係は、頗る複雑なものとなつた。

北方の斯拉ブの中にも、西の方ゲルマン民族の中に突入の體勢を採つたものと、東歐羅巴の平野に留まつたものと、自然に二つに分れ、西なるは、西斯拉ブ人、即、チェツヒ人やポーランド人となり、これ等は、西歐羅巴の文化を攝受して羅馬字を輸入し、加特力教會に歸依したるに、東方の斯拉ブ、即、露西亞人は、東方の教會及び帝國と深い關係を結んだ。

これ等の斯拉ブ諸族の多くは、獨立の國家を建ててゐるけれども、それが満足に存続した場合は、極めて稀である。露西亞だけは、八六二年の建國の方、大體に於て民族的の繁昌を續けて來たけれども、彼の場

合、未開の露西亞人の統一され、獨立することの出来たのは、北歐羅巴のノルマン人の力であつた。

II 海上のノルマン

ノルマンは、北歐羅巴、スカンデナヴィア半島に住んでゐるゲルマンで、此の民族の中では、一番、血の純潔を保ち、又古い風俗習慣を持ち續けて來たものである。この地方は、元來、寒くて瘦せた所なのだから、人口が増したり、社會的不平等が起つてでも來ると、平和の状態が、自然、保てなかつた。かやうな事情の下に、その人民の大きな移動をはじめたのは、第九世紀の頃からで、帆と櫂とで船を操ることの巧な彼等は、荒い海に乗り出し、到る處で海賊を働いたし、又河川を溯り、内地までも、あらしめてゐた。かくて英國の東海岸に上陸して之を占據し、セーヌ河を上つては、ノルマンディーを拓き、遙かに地中海に進出して、シチリアの嶋を占め、南部伊太利に跨る一大國を建てた。一部の冒險漢は、更に、北の方、イスラント、グリーンランドを経て、遠く北亞米利加の海岸までも進出した。實に耶紀一千年頃のことである。

彼等の一支族で、露西亞を建てたものなどは、バルト海の岸から内地にはいり込み、ドニエプル河の上流に至り、此の河を下つて黒海に出で、東羅馬帝國とまでも交通を開いた。これ等のノルマン人に著しいことは、一つのとりけもなく、彼等の占據した新しい國に同化してしまひ、獨立民族としての存在を失つてしまつたことである。即、佛國にはいつたものは、佛人、英國を占據したものは、英人、露國を建てたものは、露人となつてしまつたのである。

II 封建の西歐羅巴

スラブとゲルマンとは、色々と違つた性質の文化を歐羅巴の東西に作つてゐるが、後者にあつて、前者にはないものの一つは、封建制度である。これは、羅馬瓦解後の混沌界に、いくらでも、安定的の状態がほし必要から、主従依存の古俗の濃いゲルマンの間に起つて來たものである。露國にも、昔は、國防のため、臣下を各地に封ずる風はあつたけれども、これ等の封士は、ゲルマンに見るやうに世襲されず、主君の都合で、いつでも、回收され得るものとなつて居た。

世が亂れて來ると、歐羅巴に於ける武人の習俗も、色々と變つて來た。民族の大移動に際しては、歐羅巴を蹂躪したものは、騎兵で、ゴート族の騎兵こそ初めて羅馬人の注意を引いたものであつた。それから最も畏るべきフンや、回教徒もやつて來たのである。フランク族は、辛うじて此の回教徒の脅威に衝ることが出來たけれども、此の危機は、西歐羅巴に甚大の印象を與へて、騎士を中心とする封建の一大國防組織を急展せしむるに至つた。極東の支那で、一千餘年も前に行はれたものに類した制が、今や極西基督教社會の一半にも、第九、第十、兩世紀の頃から急速に發展して來たのである。

騎士は、それ／＼封士を受ける代りに、其の主君に對して忠勤を勵むべき義務を負はされ、かういふ關係は、すべての騎士を繋ぎ合せ、上は國王から、下は最も小身微弱のものまでの幾階級を織り込めた一系の大きな組織たらしめた。が、それは、政治的にいふならば、實は、極めて支離滅裂な無組織體といつても然る

べきほどのもので、主君の権力は、原則としては、無限で、下剋上は、堅く戒められては居るが、英國などのやうに、主君の専制に對してその臣下に反抗の權を認めてゐる所もあるし（一二一五年の大憲章）、さなくも、大陸の諸國には、封建各階級から成る一種の議會を隨時、召集して、大政を翼賛せしめてゐる制もあつた。只、この後の場合、それが尻切り蜻蛉に終つただけだつた。

それ故、平民は、政治上では、全く無力と言つてよろしかつた。封建貴族の城下町を圍んで、數多の農民が、生産に従つて居たが、彼等の大部分は、身體の自由こそ許されてゐるが、農耕の義務を以て、代々、その地に釘づけにされてゐる農奴で、その仕事は、中々の苦業だつたから、百姓一揆も、此の當時は、決して珍しい現象ではなかつた。

同じ西歐羅巴封建の社會でも、英國が第十一世紀に佛國から輸入した様な中央集權的の制が行はれてゐる所では、割合に秩序も保たれたけれども、さうでない限り、暗君が立つたら最後、忽にして内亂となつた。假令、平和が一定の封土内には保たれても、各君主の間は、力の平均を求めるための同盟でも結ばれてない限り、殆んど戰時的の状態にあつた。即、封建時代は、全く強者が弱者を虐ぐる、露骨なる強食弱肉の世なのであつた。倫理道德は、國を代表する君主の間では、全く無意味なものだとされた。十五世紀の伊太利の政治學者は、君主たるものは、その目的のためには、一切、手段を問ふべきではないとし、狐の皮をかぶつて獅子の慾を逞うするものを理想の人物とした。

三 基督教會の分裂と神聖羅馬帝國初建

かう云ふ亂脈の状態を少しでも矯正しようと、當時の基督教會が、聊、骨折らぬでもなかつたが、その力が足らぬ。此教の分布も、回教の様に急激ではなく、頗る遅々たるもので、第九世紀の初に至つてさへ、舊羅馬帝國の全領域に多くを加へることが出來ず、やつとラインを越えてウェーゼル河畔まで進出し得たに過ぎなかつた。それと云ふのも、蠻族の新手が絶えずやつて來て、應接に遑なからしめたのが一つの理由だつた。異端とされてゐるアリウス派に歸依してゐるものが少くなく、それなどは、更に正教に引き戻さねばならぬ面倒があつた。今一つの理由は、回教徒の北侵に對する防禦警戒であつた。しかし、歩みこそろいが、傳道が中止されてゐる譯ではなく、耶紀十世紀になると、西スラブ人が、基督教會にはいつて來たし、同世紀の末には、露西亞人も、終に洗禮を受くるに至つた。

基督教會は、縫目のない衣に擬せられて、一般教會と稱したけれども、色々な事情に動かされて、内側の統一を完全に保つて行くと云ふことは、不可能であつた。その外部からの影響の中には、印度からと思はれるものもある。これは、教會のかなり初期からあつた現象だが、埃及やシリアあたりの信徒の中には、眞の信仰生活は、現世の厭離と苦行とによるの外、ないと考へてゐる手合あり、かういふ隱遁者が修道院を結ぶの俗は、いつしか西方にも弘まつて行つた。教會の情弊がひどくなつて來ると、かやうな托鉢僧が出て、矯正の運動を怠らなかつたから、西歐羅巴の加特力教會には、刷新的の流れが脈々として絶えなかつたが、保

守的、守舊的な東方には、それが少かつた。

猶太教以來の傳統であり、回教、亦、堅く之を支持してゐる偶像排斥の俗も、聖像を造つて祭壇に飾り、香をたき、蠟燭をともし、その前に額く基督教徒の上に影響を及ぼさずには居なかつた。基督教會も、今や封建制度の様な一つの大きな組織體である。東方では、エルサレム、アレクサンドリア、アンチオキア、及び君府、西方では、羅馬に、それぞれ大伽藍が建てられてあり、わけても、帝國の首都たりし羅馬の本山は、使徒彼得アポストルペテロの開基と傳へられてゐることもあり、その大司教は、殊に法皇パピスと稱し、基督教會のすべてを統轄する權威あるものの如くに振舞つた。しかしながら、此の如きは、基督教發祥の地たる東方のもとより首肯し得ない所なのである。

耶紀第八世紀になつて、偶像排毀の論が、先づ東方にその聲を揚げたのは、當時の西方が文化の點に於て東方には及びもないからであつた。時の東羅馬皇帝、亦、政治上の理由から之を助けたから、争は一百年あまりも續き、羅馬法皇は、東帝國に對抗すべく、フランク人と結びて耶紀八〇〇年、其王に冠を與へ、之を神聖羅馬皇帝と稱したり、又その皇帝が同一の政策から、バグダッドの回教教主と懇懃を通じたりするなどの事も起つた。かやうな事情の下に建てられた神聖羅馬帝國が、一千年にも垂んとする長い壽命を持ち續けたと云ふ事は、西洋史上の一奇象である。東方に於ける偶像排毀の政策は、結局、失敗に歸し、その撤回を餘儀なくされたけれども、第十一世紀の中頃から、東西兩教會の分離は、確實となり、東方は、加特力教會

に對して、自ら正教會カソリックと稱した。

第五節 東西洋の角逐

(一) 西洋の同化力、西洋の東侵

一 西洋の同化力

これまで挙げられた歐羅巴侵入の外民族は、印歐種及びセム種ばかりだつたが、今一つ、最も東洋的なツラル・アルタイ語系の諸部族もある。これも、北と南との二つに分つを便とするが、その北なる、最も古くから北東部歐羅巴の住民たりしウラル語系のフィン人、エスト人は、スラブや、ゲルマンのため、フィンランド灣の北と南とに逐ひこめられ、近隣強國の支配を受けて現代に至つたものである。エスト人は、十四世紀、獨逸騎士團體の治下に、フィン人は、又、瑞典によつてそれぞれ基督教を輸入し、全く西歐化した。

彼等の南方で、歐羅巴に侵入した部族は、最も東洋的な手合で、その中の魁をなせしは、漢のため伐たれて西した匈奴フンである。此畏るべき遊牧民は、カルパチアを踰へて匈牙利の平原を占め、之を本據とし、其王の下に歐羅巴をあらしまはつた。フンが挫けた後、同じ平原の主人公となつたのは、アワール(支那史上の柔然)で、これ、亦、歐羅巴の脅威だつた。この部族は、基督教にも歸依したが、終に亡され、近隣のスラブあたりと融合してしまつた。

アワールに逐はれ、ドナウを渡つてバルカン山の南北麓を占めたウラル語族の一種たる物牙利人は、第十世紀には、アドリア海から黒海にわたる一大國を作つた。此民族は、東帝國の正教會に歸依し、彼等の口にせしウラル語をば忘却して全くスラブ化したから、今日では、言語の點からスラブ民族として取り扱はれることになつてゐる。

最後に東洋民族と因縁深き匈牙利の野を第九世紀の末に占めたものは、マヂアール人（馬扎兒）で、これも、亦頻に西歐をあらしまはつたが、結局、第十一世紀の初に、加特力教に歸依しておとなしくなつた。西洋にとつて厄介な存在は、同化の至難なりし、別のアルタイ語系の諸民族であつた。

二 西洋の東侵

これ等同化難の東洋人は、歐羅巴への侵入の途中で、西亞細亞のあたりに停滯してゐる連中で、その一つは、セルヂュクを祖とする土耳古人であつた。彼等は、其西漸の道すがら、薩滿教から景教、景教から回教中のスンニ派にと、三回も、その宗門を更へ、第十一世紀にバグダッドに落ちつくや、その熱狂的信仰の故を以て、回教教主に信任され、重用されてその親兵となつた。回教は已にして分れてスンニ、シアの二派となつて居たし、東方の回教國は、物質文明に耽溺して無氣力に陥つて居たから、土耳古人は、終に政權をこれから篡奪して、シリア、小亞細亞を征服し、勢、大に振うた。亞刺比亞人の時代には、自由だつた基督教徒の聖地巡禮が、困難になつたのは、土耳古人が此舞臺に現れてからであつた。

東西兩教會の融和の全く望まれない状態だつたにも拘らず、東羅馬帝の羅馬法皇に對する救援の哀求は、立所に容れられ、第十一世紀の末を以て、西方の教會、及び、列國は、上下を擧げて回教徒征伐の所謂、十字軍を發するに至つた。これは、その動機に於て全く純白なる宗教戰役で、二百年の間に前後八回にわたる遠征軍が、或は陸路から、又或は海路から發せられ、その中の四回は、聖地、二回は埃及、一回は君府、残る一回は、チュニジアに赴いたのであつた。

永い行軍を卒へ、やつと目的地に達しながら、疫病等のために空しく異境の鬼と化したものは、實に測り知られぬ。若干の新國家も、東方に建てられはしたけれども、その終を完うし得たるは殆んどなく、西洋人は、此極めて犠牲的な戰闘によつて、東洋人が決して彼等の教へられて居た様な蠻人ではないこと、東洋の天地には、寧ろ西洋に優る文化の存することを覺知したのである。地中海の東西側岸の交通は熾になり、貿易は活氣を呈し、從てその衝に當つてゐた伊太利の都市は、非常に繁昌した。

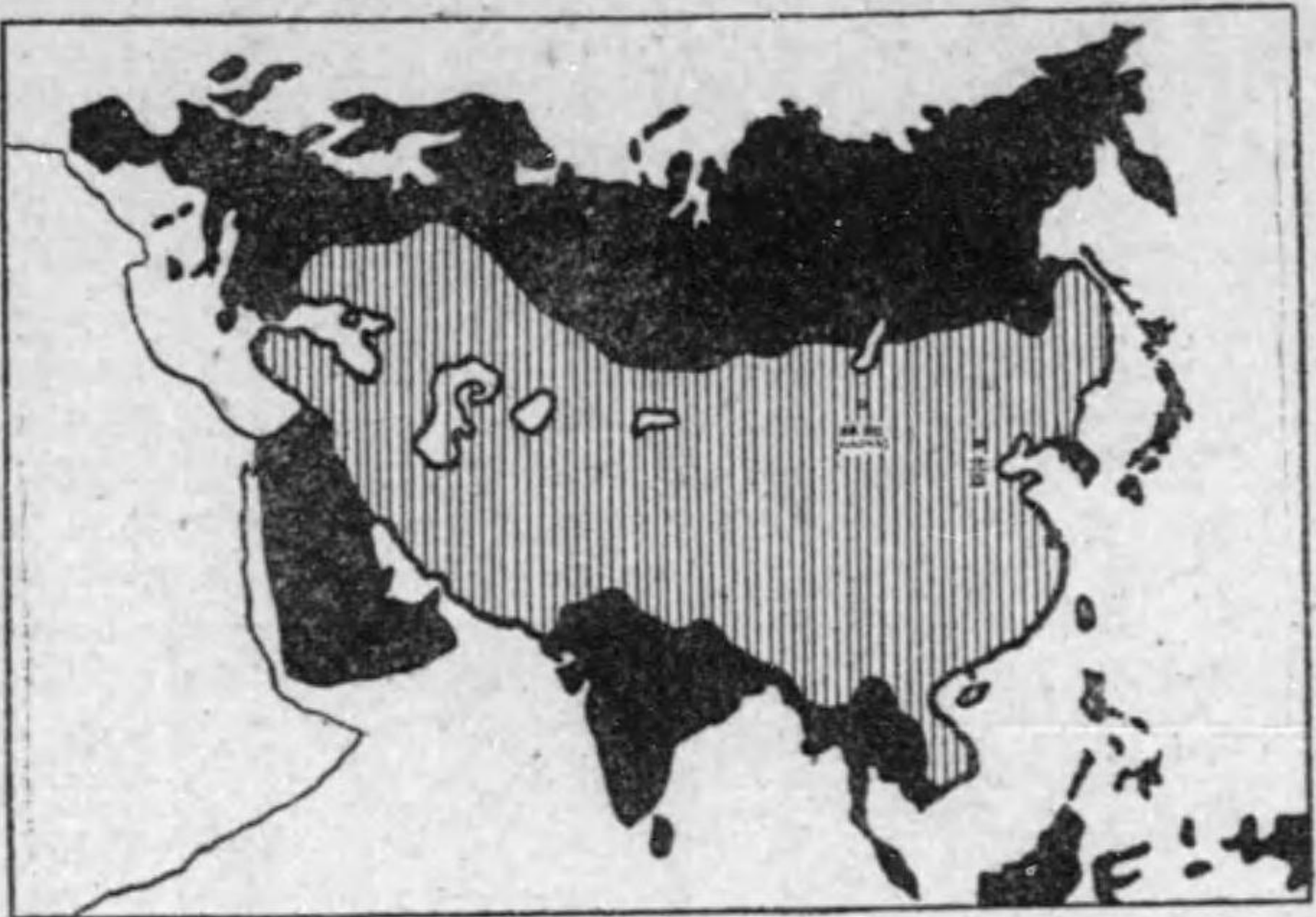
(二) 東洋の西侵

一 蒙古大帝國

一旦は聖地から回教徒を逐ひ出したが、九十年ならずして亦取りかへされてしまひ、基督教徒も、回教徒も、此所謂神聖戰役では、徒に一進一退をくり返してゐるばかりで、はかばかしい結果を得なかつた。これまで歐羅巴に侵入した外民族は、結局は、東なり、西なりの教會に歸依し、希臘字（又はキリル字）なり、

羅馬字なりを輸入することによつて歐化し、次第に従順な基督教徒となつてしまつたけれども、それだからといつて、西洋は、以上の外侵から安全だとは言へなかつた。當時に於ける武器としては、まだ弓馬以上の

蒙古大帝國



ものはなかつたので、歐羅巴は、騎士を核心とする封建制を布き、以てその國防の安全と社會的秩序とを保たうとしたが、歐洲の騎士も、十字軍のためにひどくその力を消耗してゐる。所が、目を放つて東洋の天地を顧ると、そこには騎射では、此上ない名人で、あらゆる困苦缺乏に堪へ得る慍悍な遊牧民が朔北の野で絶えず養はれつつある。彼等の中、塞内に押し入つて支那の中原を占め得たものは、一つの例外もなく、同化して平和な漢民族になり切つてしまつたけれども、塞外に留つてここに國を建て、圖南の機會を覗つてゐる遼や金の様なものは、相變らず、その蠻的な精力を蓄へつつあるのである。

さ様なアルタイ語系の蒙古人が、内外蒙古の各部族を統一して一大勢力をなすに至りしは、實に耶紀一二〇六年であつた。南北朝時代でも、將た五代でも、先づ南して支那に侵入した連

中は、中原の地方地方に割據しただけで、漢民族に代つて四百餘州を統轄するまでには至り得なかつたに反し、支那に入ることが出來ず、若くは、他の事情から進路を西に採つた部族の中には、結局は、西洋侵略の目的を達したものが少くなかつた。新興の蒙古人は、後者に倣つて先づ西し、歐羅巴を蹂躪すること、一二二一三年と一二四一年との二回に及んだ。アラビア人の様な、傳道上の理想を持つてゐない彼等には、略奪が、すべてであつたから、破壊は、從横無礙に行はれ、基督教徒をして、これ神の下したまへる鞭であると戦慄せしめた。歐羅巴封建の騎士は、日本が米英に對して宣戰を布告し、獨伊の兩國、亦、之に倣ひて對米大戰を宣言した時から、丁度、七百年前の一二四一年の春に、シレシアの野に蒙古軍を迎へ撃つたが、敗れ、基督教の歐洲ばかりではない、全回教圏も、共に震撼し、亞刺比亞を除く亞細亞の回教徒も、悉く之が征服する所となつた。そこで、蒙古軍は、此度は踵を返して東方に向ひ、衰殘の南宋を亡したから、一百年を出でずして、蒙古帝國の領土は、回教世界をも凌駕し、ユウラシアの中央大障壁の中に挟んで、西は黒海、及び、地中海から、東、日本海、東支那海、及び、南支那海に及ぶ廣大無邊のものとなつた。支那が外民族の手で統一されたのは、實に開闢以來、これが最初であつた。

蒙古大帝國に著しかりしは、武力のみで、特別の文化の持ち合せのなかつた彼には、民族や宗教に付ての差別觀と云ふものもなく、何でも彼でも、寛大に之を包容した點だつた。空前の大帝國を、造るには造つたが、之を統治する行政上の手腕が缺けて居たこととて、それは忽にして四分五裂し、蒙古世界の核心をなせ

し元朝も、百年ならずして雪だるまの如く消えてしまった。所が蒙古の勃興で戦いてゐた西洋は、引き続きて又もや、東方からの大きな脅威を迎へねばならなかつた。

二 土耳其帝國

十三世紀の中頃、セルジューク土耳其は、蒙古軍のため撃破されたが、その一部族のオスマンを祖とする輩は、小亞細亞のブルサを都として、隱忍すること多時、十四世紀の中葉には、ダルダネル海峡を渡つて更にその根據地をバルカン半島に遷し、一四五三年、終に東羅馬帝國を滅して君府の主人公となつた。一千年を越ゆるその存続期間に、六十五回を下らざる宮廷革命あり、一〇六代の皇帝中、天壽を完うし得しもの僅に三十四人と云ふ亂脈を續けて來た東羅馬帝國が、よくも滅亡の運命をそれまで免れて來たと云ふのは、一に帝國の占めし比類稀なる地の利とその富との御蔭であつたと云はねばならぬ。かかれば、之を繼承した土耳其の強味は、言ふまでもない所だつたが、彼には、まだ、遊牧生活の方、持ち續けてゐる偉大なる組織團結の力がある。彼が基督教徒から貢として徴せし兒童に、嚴重な教練を施して作り上げた所謂、新軍は、彼の最も畏るべき戦闘機關であつた。更に彼には、多神教から一擧に改宗して得た、回教のスンニ派に對する燃ゆるが如き信仰と、不屈の傳道的闘志とがあるのである。

かくて十四世紀から十六世紀まで、君府政府の膨脹政策は、滔々たる勢を以て發展し、スンニ派の回教界は、モロッコを除いて殆んどその支配に歸した。黒海は、今は彼の内海に過ぎなかつた。その膨脹は、蒙古人や亞刺比亞人の場合の様な急速度で行はれては居なかつたが、その代りに相當の堅實性を有するものであつた。一五二九年、土耳其軍の精銳の神聖羅馬帝國の首都に對する包圍攻撃が若し成功したなら、宗教改革騒ぎの當時の歐羅巴は、どの様な混亂状態に陥つたらうか測り知られない。ついでこれから四十二年の後、歐羅巴各國の聯合艦隊は、土耳其艦隊をレバンターに破つたから、膨脹土耳其の進路は、陸上でも、海上でも、堰き止められたが、しかし、一五一七年に埃及を亡して、その回教君主から、ハリファの衣鉢を繼いだ後の土耳其皇帝は、今は回教世界の教主を兼ねるものでもあつた。

第二章 歐羅巴對外膨脹の時代

第六節 所謂「再生文化」

(一) 「再生文化」とは何ぞ

永い東西洋角逐の歴史の中で、中世、一千年にわたる東洋の優勢が、十六世紀以降、遂に挫けるに至つたのは、新に起つた大なる文化運動により、西洋が再生し、東洋の持たない力を與へられたからであつた。

中世の歐羅巴には、澤山の國はあつたが、その各々の人民の間に、まだ國語と云はるべきものが發達して居なかつたし、今日、理解される様な明確な國民と云ふ觀念も、成立しては居なかつた。此處には、一つの

教會と一つの帝國とがあり、その下に治められてゐるものは、羅典語を共通の語としてゐる基督教徒なのであつた。一般の人民は、極めて無學蒙昧で、物識りと云へば、僧侶ばかり、學問と云へば神學ばかりと云つて然るべき状態であつた。それから、民衆に比べれば、少しは物識りだらうが、決して學問の眞の味方ではない僧侶連は、人間は、寧ろ性惡で、肉慾の奴隷だから、眞に神に事へようと思へば、廉く現世を厭離せねばならぬと教へ、すべて多神教的、異教的なものは、時代や、場所のいかんに一切頓著せず、之を排斥した。回教が外道として唾棄された如く、希臘、羅馬の古典と雖も、異端として齒せられなかつたのである。之を宗教的に云へば、中世人の住み家は、國とか、國民とかを超越した、渾一な、廣い基督教世界なのであるけれども、その社會は、實は、いかにも狭い、窮屈なもので、封建階級の區別は、嚴重で、百姓は農村に釘つけにされ、商人は、同業組合に押し込められてゐるのであつた。しかしながら、此世態も、中々いつまでも、それを持ち續けることが出来なかつた。啓蒙の新しい氣運が内と外とからやつて来て、基督教會が教へ込んでゐる人生觀で、いつまでも人心を縛りつけてゐることを不可能ならしめた。神から解放され、個々の人々をして、その各々の良心の上に立ちて事物に對せしむべきであると云ふ強い要求が起つて來たからである。

史家が再生文化レネッサンスと名けた此運動は、歐羅巴そのものに、一般的ではあるが、亦、同時に深い一種の意味を持つに至らしめたもので、又この中から、議會やら、陪審制やら、大學やら、銀行やらの重要な制度の多

くが生れ出てゐるので、現代の世界とは、離るべからざる因縁を持つてゐるものなのである。前後數百年にわたる此運動では、前期たる十四世紀中葉以降の二百年を以て、發生成熟の期とすべくば、十六世紀の中葉から十七世紀末に至る後期は、運動の西歐羅巴への蔓延期であるとすべきである。

(二) 文教刷新の運動

一 伊太利の古學復興

猶太的の宗教とゲルマン的政治の抱き合で出來た歐羅巴中世の封建文化は、最早、行き詰つてゐる。その前途を切り開くためには、何等かの新要素が加味されねばならぬ。再生文化の使命は、實に古典的と東洋的との二つの要素を輸入することによつて、新生の英氣を歐羅巴に注ぎ込むことであつた。

此運動が、黒死病が歐羅巴をあらしまわり、僅か十年の中に、その人口の四分の一を屠り盡したと云ふ一三四年の頃から、伊太利半島に始まつたものなので、世人は、往々にして此等二つの現象の間に、因果の關係をつけ様と試みてゐる。伊太利がかやうな偉大なる運動の場所として選ばれたのは、ここが古典の遺跡や遺物の多い所であるからと云ふよりも、物的、心的に、ここが歐羅巴の何處よりも、裕福な所だつたことに職由するのである。同じ語を話す同じ民族の住んでゐる此地に、多くの都市國家が睨み合つて居て、かつて統一されないと云ふのは、羅馬法皇の様なものがある上に鎮座して、大きな統一國家の成立を妨げたからでもあるが、何れにしても、大同を欲しない列國が、海港ならば、ヴェネチアや、ジェノアの如く、又内陸

國ならば、フィレンツェやミラノの如く、各々皆その天與の地の利によつて博く交易を營み、以てその大をなさざるはなく、かくて富める彼等は、金に飽かして學術の獎勵に力を注いだから、當時の伊太利は、名匠巨擘の輩出を以て、歐羅巴文化の眞の爐床となつた。率先してポローニアに大學を建て、羅馬法の研究に従事したのは伊太利人であり、陰氣な教會の傳統や、拘束を脱離せんことを冀ふに至つた彼等の、期せずして向つたのは、異端の希臘人、羅馬人の行蹟や、人生觀を究むることであつた。温故知新の資として、古典は、東羅馬帝國を初め、到る處から頻りに蒐集せられ、故人の遺せし作物は、再吟味され、その中から新しい思想、斬新な藝術が作り出さるるに至つた。されば、彼等によつて發展された文化は、再生と云はんよりは、寧ろ新生と呼べるべきものであつた。

二 獨逸及び瑞西に於ける宗教改革

羅馬法皇は、十字軍以後、大體に於てその威力を加へて來てゐるし、加特力教會の富も、次第に増して來てゐる。さうすると、聖職にふさはしからぬ惡俗までも、何時しか、行はるるに至つたので、かかる弊害を矯めようと乗り出したのは、清貧に甘んじ、謙卑と従順とを以て神に奉仕しようとする云ふ托鉢僧の團體であつた。フランシスコ、ドミニコなど云ふ聖徒によつて十二世紀に起されたものは、その最も名あるものであつた。これは、その戒律的、獻身的生活を以て、教會に大きな刺戟を與へたけれども、それは、聊、消極的なものであつた。

學問が起り、讀書人も多くなつて來ると、聖書や教會に向つて、公然、批判を加へるものも現るるに至りしは當然であつた。かういふ手合に向つては、法皇は、絶對服従を要求する立場から、破門や離門を命じたり、罪科の重いものは、焚刑に處したりした。十四、十五の兩世紀は、峻嚴なる法の適用によつて、どうか、秩序と威嚴とを保つことが出來たが、世態の進歩は、世人をして、法皇のさやうな處分法を坐視せざらしめたのである。下剋上の運動は、十六世紀に至り、終に法皇輦轂の下ではない、これも統一のない獨逸や、共和國の瑞西で勃發して、抑へきれない力となつて進み出でたのである。

改革者は、皆聖書の丹念な讀者であつた。彼等は、永い間に積み重なつて出來た教會の大きな組織や、くだくだの教儀は、教祖の期する所ではない、従つて眞の基督教會たるものは、原始の姿に復らねば求められないのだと斷じ、西歐羅巴をば、宗教論争の大洪水の中に投じた。獨逸のルーテルは、基督教徒の基督教徒たる所以は、僧侶連の求むる所謂、善行にあるのではなくて、信仰そのものにあるのだ、と獅子吼したし、カルウインは、又、瑞西にあり、彼の理想する型の教國的共和政治を作り上げた。前者は、彼の徒の政治に干與するを差し止めたが、後者は、自らその理想する新國家の範をジュネーブに示さうとしたのである。之により十七世紀の初になると、西歐羅巴の北部は、加特力教會から離れて、所謂、改革派、即、新教に歸依し、又その同じ新教界内でも、和蘭、スコットランドのカルウイン派は、獨逸を中心とするルーテル派から分れた。

(三) 東洋からの影響

一 回教國の貢獻

歐羅巴文化の生れかはりだとも云はるべき此大きな運動に對し、東洋の貢獻も、亦、實に偉大なるものである。東洋からの刺戟と寄與とが無かつたら、現代の世界を制してゐる優れた歐羅巴文化も、結局は、伸びて來はしないではなかつたらうかとさへ考へられるのである。その貢獻の一半は、回教徒の手で行はれてゐる。彼等の中でも、歐羅巴に最接近して前衛の役目を勤めたものは、歐人から世界の眞珠と稱せられ、そして歐羅巴のどんな都會にもまだ見受けられなかつた街燈の備へさへ夙にあつたと云ふコルドバであつた。シチリアのバレルモも同斷である。回教徒は、間もなく、ノルマン人のためバレルモを奪はれたけれども、彼等の影響は中々強く、十二世紀のアラビア學士などは、ここでノルマン朝のために銀製の地球儀を造つてやつたと云ふことである。バグダッドの回教徒の手で希臘の古典がアラビア譯されたのは、第九世紀であつたと云ふ。此市中には、盛時、實に百以上の書肆があつて、希臘の哲學、醫學、その他の古典を譯刊したと云ふことである。

米や棉花、甘蔗など、各種東洋の植物は、歐羅巴に輸入されたし、モスール、ダマスカスあたりの美麗な織物、トレードーの笏もの類、モロッコの柔革、皆歐人をして艶羨せしめぬはなかつたが、回教徒の最大の贈り物は、何と云つても、歐人が愚にも忘れて居た古典の至寶を能くも保存し、之を傳へてくれたことであ

つた。回教徒の攝生や、賑恤の習俗も、時の基督教徒をして反省せしむるものでなければならなかつた。封建的の階級制度の存在しない回教の社會では、同じ信者である限り、すべての人は、完全に平等の立ち場にあるのである。婦人尊重の俗のみは、基督教徒が回教徒に誇り得べきものの様に思はれるが、これとても、騎士の仲間だけに行はれた特殊の現象に過ぎなかつた。

二 支那の文物の西傳

回教徒の基督教徒に傳へたものに、今一つ支那の文物がある。東西洋の間に、西域を通ずる交通線の、歴史以前の時代から存在したことは、疑はれぬ所である。漢人種が支那の中原に現れたのは、此線によつたものと想像されるのである。葡萄は、これによつて東漸したし、絹は此所謂「絹の路」によつて西方に渡つて行つた。回教徒が起つてからは、海上の交通も盛となり、第九世紀に亞刺比亞の商人で自己の支那見聞記を認めてゐるものがあるし、同時に支那人そのものにして波斯灣及紅海あたりまでも行つてゐるものもあるのである。唐宋時代に支那の南海に來て居つた回教徒は、相當の多數に達して居つたものである。やがて蒙古人が起つて來ると、北方、陸上の交通線は、これまでにない活氣を呈し、羅馬法皇を初め西歐羅巴の君主は、十三世紀に於て、屢々使節を和^{カラコルム}林の蒙古廷に派遣して居り、これが、支那には、固有の立派な文化があり、その物質的並に精神的の産物の偉大なるものある事實を彼等をして實見せしむる機會となつた。さうして支那の持つてゐるすぐれた文物は、回教徒及び蒙古人の手を傳はつて西傳したのである。製紙術の如き

も、その一つである。印刷術に付ても、支那は、世界に魁をなし、歐羅巴より四百年も前に活版を發明してゐるし、磁石は、十二世紀の初に、支那で已に航海に用ゐて居たと云ふことである。火薬も南宋以來、武器として金や蒙古によつて用ひられて居たのであるが、惜しむべし、支那人の之をば、一般の用に供し得ない中に、再生文化の歐人は、早くも之を我がものとしてしまつたのである。

第七節 歐羅巴諸國民の海陸膨脹

(一) 海上の膨脹

一 世界歴史の開幕

十字軍の頃までの歐羅巴人は、歐羅巴外のことは殆んど無知と云つて宜しかつた。此大遠征の結果、東方の事情は、少しは知られて來たが、地中海以外の海は、相變らず知られてゐなかつた。ノルマン人は、西大陸を發見してゐるのに、その事實すら忘れられて居た。十四世紀まで、羅針盤のない時代の航海は、海岸傳ひに風で進退するばかりであつた。當時、基督教徒の占めてゐる世界は、その廣さに於て、回教徒、佛教徒等、基督教外の諸大教徒の占めてゐるものには及ぶべくもなかつた。

所が、十六世紀以降、再生文化の潮に乗つた彼等が、俄然、恐ろしい力を現し、海陸の上に邁進して、四五〇年の間に、世界を奄有し、地球陸地面積の五分の四を占むるに至つたと云ふことは、驚くべき事實と云

世界の大三人種



I 白人 II 黃人 III 黑人

はねばならぬ。世界歴史の幕は、極めて進取的な歐人の手によつて切り落され、歐羅巴の歴史は、實に世界歴史の核心たらんとするに至つた。歐人が築き上げた此大帝國は、一つの基督教世界たるには違ひないが、彼等が中世に懐いて居た様な神の國ではなくて、彼等の腕力によつて異國、異民族を伐り従へることによつて作られた、力の國に外ならなかつた。

二 海上發展の先驅

I 東大陸に於ける葡萄牙人

亞刺比亞人の地理學は、歐人の目を開いてくれたものであつたが、水夫の教練所として、大洋時代への準備をしてくれたものは、地中海上の海國たるウエネチア及びジェノアであつた。彼等が、十四世紀の初に、ジブラルタル海峡を越えて大西洋に出で、和蘭への航路を開いた事實は、痛く時の葡萄牙人の海洋本能を刺戟し、葡人は、これから、頻りに出動して大西洋上の島々を發見し、十五世紀の中頃には、阿弗利加の西岸をカップ・ウエルデまで進んで、南方に踰えられない焦熱地獄があると云ふ浮説を打ち

破つた。さうしてたうとう喜望峰に達し、該世紀の末には、印度航路を開くの壯舉に成功したのである。

葡人は、かくて阿弗利加や印度に於て、要所々々を手に入れたが、彼等本來の目的は、回教徒の掌裡にありし香料貿易の奪取にあつたので、錫蘭から、マラッカ海峡を渡つて終に太平洋に出で、香料列島を窮め、有力な艦隊を以て波斯灣、及び、亞刺比亞海に於ける回教徒を撃破し、之をば、全く印度洋上から驅除してしまつた。葡人の飽くなき征服欲とその破壊的な火器とは、向ふ所、敵なく、彼等は、勢に乗じて一五三五年、支那の澳門を占め、それから八年の後には、日本の種子島に到り、長崎を第二の澳門たらしめようとなすへした。

葡人は、専ら東洋を彼の活動舞臺としたけれども、偶然の機會から、彼は、南米大陸で伯拉西をもその手に入れた。

II 西大陸の西班牙人

歐羅巴に於て大洋時代の先端を切つた功名は、リスボンの良港を有する葡萄牙人に歸せられねばならなかつた。西班牙も、十三世紀の中葉に至り、回教徒からセウイル及びカヂスの兩港を奪回したが、彼の新地発見は、大地は、球體だから、西航して止まざれば、結局、極東の支那に到るに違ひないと説きまはつた冒險者に動かされて行つた遠征の、偶然の結果に外ならなかつた。しかし、西班牙人の発見した西大陸は、香料以上の金銀の産地たりしこととて、一攫千金を夢る騎士達は、争うて新地に押し渡り、一千年前に歐羅巴を

あらしまはつた蠻人連にも劣らない掠奪と亂暴とを働き、ここに芽生えて居つた文化すらも、滅茶々に叩きこわしてしまつた。伯拉西を除く西大陸は、全く西班牙人の一手に占められてしまひ相な勢にまでなつた。彼が雇ひ入れた一航海者は、十六世紀の初に於て、己の名を永く留めたマガリアエンス海峡を通つて太平洋に出で、終にフィリッピン群島を發見した。地球は初めて周航され、これから五十年にして、墨西哥の西班牙人は、フィリッピンを占領して之をもその治下に置いた。

西班牙の大帝國は、一五五〇年に於て、實に二一〇萬方呎に達した。これ、世界の全陸地面積の約四分の一に該當するものである。

III 後進の諸海國民

葡、西の兩國民が、すばらしい大きな領土を手に入れると、歐羅巴の海國民は、和蘭、英吉利、佛蘭西を初め、スカンヂナビアの諸國までも、一齊に之に續いた。彼等の多くは、東印度會社を十七世紀の初に建て、和蘭の如きは、率先して東洋にやつて來、彼の敵、西班牙が一時、葡萄牙を併合すると、奇貨、措くべしとして盛に葡國の植民地を奪取し、終に東印度群島を己の物とした。やがて、佛英の二國も、印度の經路に従つたから、葡國は、東洋では、僅に二三の足場を持つてゐるに過ぎなくなつた。

これ等後進の海國は、西大陸でも、それぞれ植民地獲得の競争に従事したけれども、何れも邊隅に逐ひ込められ、佛英の二大國の加奈陀と新英蘭土とに對峙して相争ふあるのみとなつた。兩國は、印度でも、亦、

互に争つた。これ第十七世紀に於ける歐羅巴植民地の概勢である。

(二) 陸上の膨脹

露國の膨脹



歐羅巴人の無人の境を往くが如き膨脹は、海上に止まらなかつた。蒙古人に征服せられ、其專制の下に呻吟すること二百年あまりに及んだ露西亞は、葡萄牙の海上進出と時を同うして、終に蒙古人の羈縛を脱した。當時の露國は、所謂、莫斯科大公國で、ウオルガ河上流にあり、八方を強い國家や、民族で圍まれてゐる開けない小國に過ぎなかつた。彼の東方には、ウラルの嶺を越えると、坦々たる大平野がはてしなく連なつてゐるから、此方面への膨脹も、大に意味あることであつた。唯、歐羅巴方面の關心が、より重大と感ぜられたためか、當時、皇帝の稱號を名のつたばかりの莫斯科大公は、すべてを剽盜の集團であるカザック族に一任し、一五八一年を以てウラルの東麓に進出させたのが、彼が西伯利亞征服の第一歩で、遠征隊の長驅してオホツク海に達したるは、これから六十年の後であり、十七

世紀の末には、カムチャツカ半嶋に至るまでの北西伯利亞の一帶は、全く彼等の席捲する所となつたのである。

(三) 極西と極東

かやうにして、不敵の基督教徒は、世界の海陸の殆んどすべてを踏み蹂つたが、此際、彼等の占領又は接觸した國土は、二つの種類に分たれる。まだ開けてゐない、人間もさう繁殖して居ない、従つて極めて容易に征服された亞米利加大陸の様な所は、第一種である。阿弗利加大陸がしばらく放棄の態たりしは、歐人の掠奪本能を満足するに足るべき、より以上の恰適地が他にあつたからなのである。そしてこれ等の國土は、皆適當に分割されたが、今一つの種類は、歐羅巴と同じく、古い獨立の文明系統を發展してゐる印度や、支那、日本の如き國である。ここは、政治的に統一されてもゐるので、歐人も、さう手軽に侵略することも出来ないのである。印度は、十六世紀の初、モゴル帝國興つて、ともかくその殆んど全土を統べたから、佛英と雖も、該王朝が二百年後に頽敗するまでは、之を併呑し得なかつた。

葡人、西人等、極東初來の、所謂、南蠻人は、頻に交易と布教とを支那に求めたが、支那政府は、一貫して之を拒絶した。これ等の加特力教民が、布教に深い熱意を表したりしは、新教の分離によつて齟らされし教勢の不振を償はんがためであつた。當時、日本は戰國末で、諸侯の中には、南蠻との交通によつてその國を興さうと思ふものも尠くはなかつたこととて、交易と布教とは、共に歓迎されたのであるが、既にして統

一の政府が中央に出来る様になると、新政府は、交易一方の平和的な和蘭人をば容れたが、物騒な葡人、西人は、悉く之を驅逐し、寛永以來(十七世紀初半)、終に嚴重なる鎖國の政策を樹つるに至つたのである。南方海上からやつて來た歐人は、此様に、極めて特別のわづかな場合を除き、悉く極東の海上から一掃された。英人も、一時、平戸に商館を構へたが、とても見込なしとして終に之を引き拂つた。北方の露西亞人、亦、之が除外例ではないのである。

カザツクは、西伯利亞のなべての河流とは違つて、東流してゐる黒龍江の水路を利用して太平洋に出でようとしたが、折しも、滿洲に崛起して明朝を亡し、支那の天地を統一した清朝の強硬なる抗議に退却を餘儀なくされた。即、一六八九年の尼布楚條約を以て、露國は、黒龍江の全水域の清國領たるを認めざるを得なかつたのである。後三十餘年、露國は、清國と更に通商條約を結んで、恰克圖に於ける陸上貿易を約束したけれども、それは、極めて制限的のものであつた。露國の進路は、かくて、支那のために全く堰き止められた。極東をしてその堅く閉ざれたる門戸を開放せしめんがためには、再生文化が興へた力だけでは足らなかつた。極西は、今一段の精力を蓄積して之にとりかからなければならなかつた。極西の極東への侵迫を妨げた今一つの事情がある。それは、極西自體に内在せし宗教上、政治上の争ひであつた。

第八節 歐羅巴の新なる戰國時代

(一) 諸大王國の擡頭

一 第十六世紀初年の歐羅巴

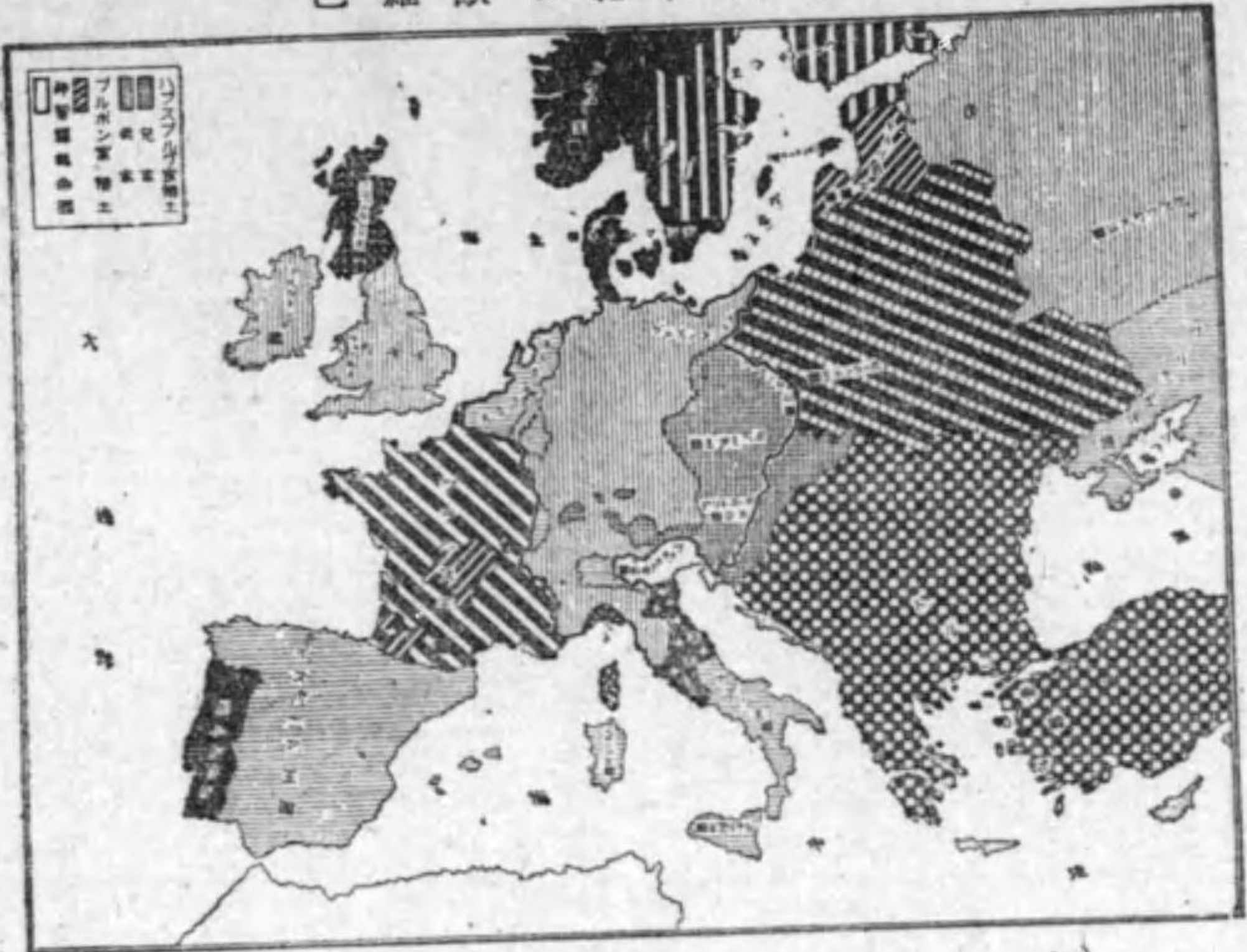
伊太利の再生文化が、その極盛時に達した第十六世紀初の基督教の歐羅巴では、回教徒をやつとイベリア半島から逐ひ拂ふことが出来たと思つたら、今度は、新事の土耳古人がバルカン方面から歐羅巴に侵入しつゝあつた。土耳古は、非常な勢で、新月形沃地に向ひ、埃及に向ひ、又、ドナウの中流や、北阿弗利加に向つて漲りつゝあつた。東方の教會を失つてから幾久しき加特力教會では、又もや宗教改革の騒動で物情の騒然たるものがあつた。東歐羅巴では、正教會に歸依せし露國も、やつと蒙古人の羈絆を脱したばかりで、まだ、歐羅巴の國としても、數へられなかつた。その西隣にあり、加特力教會の變らざる信徒だつた波蘭土王國は、やがては、東海と黒海とに達する一大國家たらんとするの勢を示しては居たが、これとても、歐羅巴を動かしてゐる眞の潮流からは、まだ遙に離れて居た。されば、當時の歐羅巴と云へば、佛蘭西、獨逸、ポヘミア、伊太利、西班牙、葡萄牙、英吉利の諸國位を包括してゐるに過ぎない、狭い歐羅巴のことなのであつて、同じ基督教國でありながら、波蘭土や、北歐羅巴の諸國や、露國あたりは、その中に含まれては考へられて居なかつたのである。況や基督教界の共同の敵を以て目せられてゐる土耳古帝國に至つては、言ふ

までもない事實である。

二 諸大王朝の争闘

西歐羅巴の君主中、その歴史的の權威と聲名とに於て、何人も、法皇と神聖羅馬皇帝との右に出るものはなかつた。第八世紀以來、法皇は、已に領土を有し、一國の主を以て自ら居つたが、亦、それ以上、神の下に、世界の加特力教徒の靈を司つてゐる帝王以上の存在でもあつた。皇帝は之と並んで王公の上に立ち、現實の世界を統治する、所謂、諸王中の王である。彼は、十字軍に際しては、法皇と固く相結び、基督教界を以て回教界に宣戦したのであつたが、しかし、古羅馬帝國流の統一國家の理想は、中々、實現さるべくもなかつた。と云ふのは、法皇が實際に於ては、決して皇帝の眞の同情者、援助者でなかつたためであり、又歐羅巴の天地には、既にして、力能く皇帝に衝ることの出来る王者の續出を見るに至つたからである。フラン

第十六世紀の歐羅巴



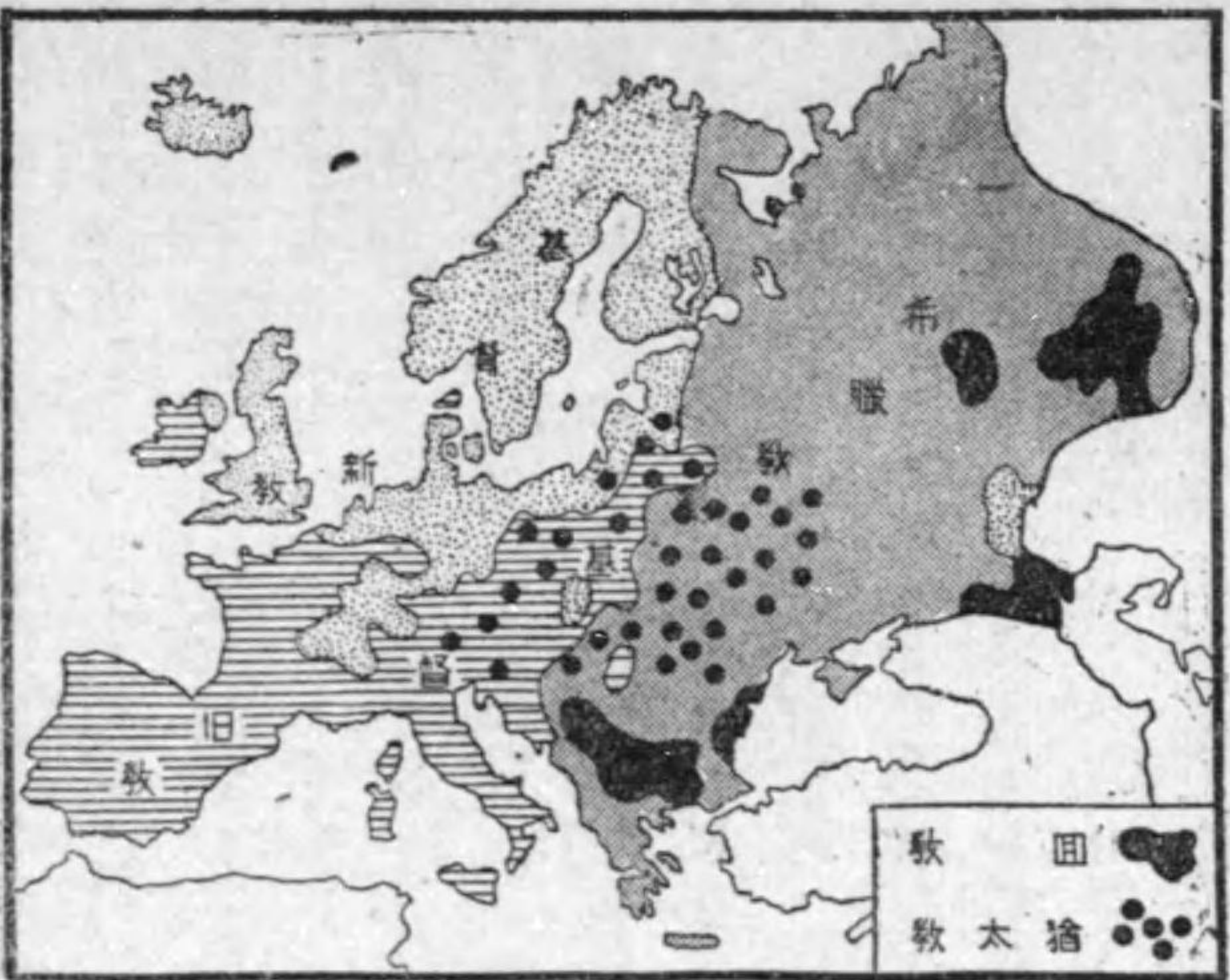
ク族の大帝國は、一時、西歐羅巴を統一しさうに見えたが、九世紀の中頃、分裂して、東フランクは獨逸、即、神聖羅馬帝國となり、西フランクは、又、佛蘭西となつて互に對立競争するに至つた。

佛國は、第十世紀以後、巴里伯によつて治められてゐる一王國だつたが、アングル・サクソン民族に統一された英國が、佛國のノルマンディー侯に征服され、その下に強固な政府を築き上げると、十一世紀この方、佛國を己が食ひものしようと思ふ、所謂、大陸政策にとりかかつたため、絶え間なき侵襲に悩まされた。たうとう百年戦役の難戦ともなつたが、やつと之を勝ち抜いて、一五五九年には、最後の英兵をもカレー港から驅除し、四百年にわたる執拗なる英國の野望を全く挫いてしまつた。英國には、此役の後、永い内亂もあつたが、チュードル王朝の王位を踐むに及び、大に王權を擴張して、十六世紀には、愛蘭土を征服した。但し、北隣の蘇格蘭は、依然たる獨立王國である。

佛英の二國は、ともに、封建諸侯の滅落に乗じて起つて來たが、最も驚嘆に値するは、西班牙の勃興であつた。此處にも、中世の間に多くの基督教國が建てられ、頻に回教國を蠶喰して行つたが、カスチル、アラゴンの二王國が、國王同志の結婚に由て合邦し、西班牙王國となつてからは、一四九二年、終に回教徒を驅逐し、全く半嶋の統一を卒ふることが出來た。さうして同時に發見された西大陸をその植民地となし、その資源を獲得することにより、西班牙王は、忽にして、富、列國に冠たり、其權力に於ても、亦、並ぶものなきに至つた。元來、神聖羅馬皇帝の位は、一定の選舉員によつて選ばれることになつて居り、十三世紀來

は、ハプスブルグ伯、その選に當つて居たが、それが、終には、事實上、彼の世襲となつてしまつた。蓋し、伯は、昔、東方からの侵入者に對し基督教の歐羅巴を援護のために設けられた、東方の藩鎮、即、奥太

歐洲宗教分布



利の大公となつたのが、彼が運の開きで、それから、段々と膨脹して行つたものである。實に彼が後年の大きな領土は、武力ではなくて、婚姻の關係で次第に手に入れられたものなのである。皇帝、崩じて嗣なく、彼の孫たる西班牙王は、直に皇統を紹ぎ、帝國と西班牙王國とを己が一手に總攬することになつた。これ實に一五一九年のこと、それから後、間もなく、ポヘミア王國も亦その併合する所となつた。

(二) 舊新兩教の争とその國際戰役

かかる大國の出現に對し、西歐羅巴の諸國は、大となく、小となく、皆齊しく脅威を感じた。大なるには、嫉妬心も可なり働いてゐるが、すべての國を通じて、不安の情が高まつて來た。折しも、獨逸では、法皇に對する宗教上

の反抗運動が起つたので、諸王公は、それぞれ兩派に分れて相争ひ、皇帝、法皇、力を合せて之を鎮壓せんと努めるが、及ばなかつた。宗教上の動機に政治上のそれも交つてゐるから、舊教君主、常に必ずしも、舊教國を支持するとは限らず、佛王の如きは、皇帝を苦めるため、却つて新教君主の尻押しまでした。そのため、流石の皇帝も、終には届して信仰の自由を各國君主に認め、奥太利と西班牙とをば、それぞれ元の通りの別國となし、己は、世を厭つて退隱するに至つたのである。

されど、歐羅巴の各國は、中々、これで治まらない。つとに奥太利に叛いて居た瑞西は、十六世紀の初には、事實上の獨立國となつて居たし、和蘭の小民族も、次で西班牙に向て叛旗を翻した。羅馬法皇の忠實な支持者だつた英國王その人までが終には舊教會を離脱して獨立の英國國教會を樹つるに至つた。

佛王は、西班牙王と同じく、熱心な舊教徒として、國內の異端に嚴辣な壓迫を加へたけれども、政治的には、彼は、皇帝の反對者を以て一貫した。されば、十六世紀末、ブルボン王朝が君臨してからの奥佛兩國の關係は、ハプスブルグ、ブルボン兩大王朝のはてしなき覇權の争であつたのである。

斯様な状態は、十七世紀の前半に至り、終にポヘミアのチェッコ人々、丁抹、瑞典等、新教に凝り固まつてゐる北歐人の反舊教運動となり、列強、亦、争うて之に干渉したため、忽にして慘憺たる大戰役の爆發となつた。嗣は、その動機に於て宗教的のものではあつたが、亦、その中に、多分に、政治的、民族的の因子をも加味して居つた。舊教君主たる佛王は、瑞典や和蘭等の新教國に助けられ、獨逸の新教君主の牛耳を握

つて皇帝に向つて一大争覇戦を挑んだのである。此際、主として戦場となつた所は、獨逸で、前後三十年に及ぶ亂闘のために、此國は、全く見る影もなく蹂躪され、結局、一六四八年のウエストフリアの公會を以て、神聖羅馬帝國內の各國は、事實上、各獨立國として取り扱はれることになり、ハプスブルグ家に對する打撃となつて初めて其局を結ぶに至つたのである。

(三) 近世歐羅巴の國際生活

かくてハプスブルグの時代、即、皇帝の時代は去つて、諸王の時代となつたが、諸王中、率先して覇權を獲得したるは、ブルボン王朝であつた。當時、歐羅巴の強國には、佛國を外にしては、奥、西の兩ハプスブルグ家と、英國とあるのみである。西班牙は、和蘭を失つてゐるし、英國のため、その海軍を撃滅されてゐるから、西大陸に巨大な植民地を持つてゐるとは申せ、歐羅巴に於ける彼は、最早、魯縞をも穿ち得ぬ強弩の末勢に過ぎなかつた。それだけ、英佛の兩王朝は、旭の昇るが如き勢で、王權神授の學說なども翳され、十七世紀の英國は、ために大内亂に見舞はれたが、佛國の國運は、ひとり隆々たるものであつた。王廷の驕奢な生活では、ウエルサイユの宮廷は、各國に範を垂れたのであつた。

とは言ふものの、ウエストフリア公會の折などは、外國とのつき合に付て、殆んど何等の慣習も、まだ各國の間に出て居なかつた。やつと、これから公使の交換をすると云ふことにはなつたが、互に相手の隙を見て、之を侵さうとばかり覗つてゐるから、寸時も油斷がならず、そこで、さう云ふ物騒千萬な手合に備

ふるため、利害の比較的共通な第三國と結び、所謂、權力の均衡を保つことによつて自家の安全を圖るより外なかつた。

所詮は、一旦、緩急ある場合、自を恃むより外ないのである。歐羅巴に於ける兵制の沿革を見るに、マケドニアや羅馬帝政の往古から、既に常備軍の制はあつたが、中世になると、その大部分を通じて、軍隊は戰爭の都度、俄に編制される習はしとなつて居た。尤も、中世でも、封建の兵制だけは獨特のもので、當時の闘ひは、騎士の一騎討ちで始終した。所が再生文化で鐵砲が發明され、騎士と云ふ制度が亡くなつてしまつたので、傭兵が一般に行はれたが、これは、外國人である場合が多く、中々不廉だし、國防機關としてあまり効果的でない節も多分にあつた。そこで國民の中から志願者を募つて之を常備することも行はれ、十七世紀の末からは、徴兵で募集することも始まつたのであるが、これが、中々、不備で、當時の兵隊の中には、妻子を陣中に携帯する者などもあつた。

かかる状態で、大きな王朝の對立してゐる近世の歐羅巴では、封建そのものこそ亡くなつたけれども、封建の戰國時代は、其規模を大きくしたまま、依然として行はれてゐるのである。これでは、いかぬと、十七世紀の初に、和蘭の一學士は、國と國との間にも、人と人との間にある様な道德が行はれなければならぬ筈だと唱へて時人を警めた。

第九節 第一次全歐大戦

(一) 植民地の争奪と英國の特殊的地位

一 歐羅巴政策の一新要素としての植民地

王朝間の戦争は、絶える時がない。國は、王朝の家督であるから、王は、皆自分の王朝の利益のために、憚る所なく行動する。臣民の都合などは、あまり考へてゐないと云つて良い。尤も、新教徒も、今は、天下を齎して良心の自由を許されてゐるから、口を宗教問題に藉りて戦を他に挑むと云ふことはなくなつたが、その代り、今度は、歐羅巴を遠く隔絶してゐる海外の植民地の問題が、新しい争の原因となつて現れる様になつて來た。歐羅巴人は、中古までは、専ら農業で生活をして來た。勿論、傍ら、商業も行はれないではないが、それは、當時の地理上、交通上の關係から、地域的にも、數量的にも、大變に限られて居た。所が、再生文化この方、歐羅巴人は、廣く異域に蔓延し、東西洋の交通が、海陸、殊に海上に開かれた結果、各國の商賣は、今まで曾て見られなかつた活氣を呈して來た。勿論、植民地そのものは、各國王朝の持ち物で、此處からあがる利益を收得するのは、王朝そのものである。植民地での企業は、すべて何處でも、本國政府の専有であつたから、國の利益は、莫大であつた。これによつて歐羅巴の王家中、第一等の物持ちとなつたものは、西班牙のハプスブルグ王朝だつたのである。

抜け目のない和蘭は、東洋貿易で巨利を博したが、それと氣が付いて英佛の二國が、之に志した時には目ぼしい所は、皆、先進國に先取されて、遺利の收むべきものはなかつた。やつと印度や、北亞米利加に手を著ける位が關の山だつたのである。

二 英國の二重性格

英國は、海水が六百尺も引けば、ドーバー海峡はもとより、北海も亡くなつて、全く對岸と地續きになつてしまふと云ふほど、大陸に近い陸嶋である。中世の大陸政策も、さう云ふ所から起つたものなのであつた。所が、一度、此政策に躓いて佛國から撤退するとなると、今度は、間もなく宗教上の關係まで打ち切つて、羅馬から遠ざかつてしまつた。しかしこれは、丁度その時、歐羅巴各國に向て開かれた海上の世界に活動しようと思ふ、大きな先見から行はれたものでなかつた事は、先進の海國が、植民地の開拓に一生懸命だつたに拘らず、英國が此方面の施設を急がなかつたのを見ても知れようと思ふ。英國の海運が、大洋の到る處で不逞の海賊を働いたのは、かなり久しいことではあるが、しかし彼の初めて植民地を拓いたのは、一六〇七年で、此點では、佛國にすらも、先んじられてゐるのである。

近世の歐羅巴史は、永く歐羅巴大陸に即して居た英國が、次第にこれから離れて行く行程の物語りだとも謂はれる。そこで我々は、英國から見た場合の歐羅巴には、英國をも含めてゐる地理學上の歐羅巴洲、即、大歐羅巴と、英國を除いて考へられる大陸歐羅巴、即、小歐羅巴との二種あることを記さねらぬ。中世を

での歐羅巴は大歐だつたが、近世の初、大洋時代にはいつてからは、英國の見地からすれば、小歐なのである。何故なら、これからの英國は對岸の大陸には背を向け、森々たる遠い海上を己の天地として、その開拓に専念するに至つてゐるからである。即、英國の歐羅巴に對するや、今や頗る消極的になつてゐるのである。かやうな意味での海外發展のためには、どんな外交政略を採るべきやについては、十六世紀の初の當時から、英人の間、已に驚くべき明確さを以て堂々の論を立ててゐる者があつた。それは、英國には、戦争によらず、即、全く平和の手段で、その國利を振張し得る道がある。それは、歐羅巴大陸の内事には、一切、介入しないで、我が思ふことに力を注ぐにあり、而して之がためには、歐羅巴列強をして力の優劣なき二つの陣屋に分れしむるにあると云ふのである。

世に均勢政策と呼ばれてゐる此政策は、かくてこれから後、何時でも、英國の海上發展に對する第一の邪魔者を挫くために適用された。その相手は、多くの場合、時の最大の海國だつたから、英國は、極り切つて、大陸の弱國を助けて、陸海の兩方面から該強國に衝つた譯で、チュードル王朝は、佛國と結んで先づ西班牙を破つた。次に北海に於て彼を脅したものは、和蘭の海軍と海運とであつた。恰もスチュワート王朝の即位によつて英蘭土と蘇格蘭との身上合同（イアン・メトソン）が行はれた英國は、内亂で苦められて居たに拘らず、強硬な態度で和蘭に挑戦し、之を屈せしめた。そこで海上での最も畏るべき競争者として最後まで残つたものは、佛國だつたが、英國は、今度は、和蘭と結んで之と戦を始め、此決闘は、一六八八年から一八一五年まで一二七

年の永きに及んだので、又、第二の百年戦役とも呼ばれてゐる。此役、英國の陸軍は、歐羅巴、亞細亞、亞米利加の三大陸に派遣され、戦は、北海やら、カリベア海やら、大西洋の到る處で行はれ、餘勢、ベンガル灣までも及んで、佛國は、終に完全に英國の撃破する所となつたのである。

(二) 歐羅巴の國際政局に於ける東歐羅巴の發達

西歐羅巴の諸國は、海外植民地に付てこそ激しく争つたけれども、露國が廣大な西伯利亞の植民地を拓いて行くことなどに對しては、誰も關心を拂つてゐる者はなかつた。歐羅巴の東方に國を建ててゐるものは、南から數へて、土耳其、奧太利、波蘭土、露西亞、瑞典などであつたが、十七世紀の戦争では、彼等も少からざる影響を感じた。三十年戦役の打撃を被つてゐるとは云へ、奧太利は、まだ兎も角も、大國としての權威を保ち得たけれども、國民的王朝斷絶し、選舉王制となつてからの波蘭土は、國勢不振に陥つたし、土耳其も、十七世紀の末この方は、全く衰頹し、之に代つて興つて來たものは、瑞典だつた。此國は、新舊兩教徒の争に乗じてバルト海を内海とする一大帝國を作り上げたが、一百年ならずしてその地位を南隣の露國に譲らざるを得なかつた。

露國は、兄弟並んで相續する習はしたりしたため、その邦土、四分五裂し、十三世紀、蒙古人の征服する所となりし頃は、實に七十二の小國に分れて居たほどであつた。後、蒙古人を驅除し、相續法も長子相續と改まり、十七世紀の初にロマノフ王朝を帝位に迎へてからは、北方に瑞典、西方に波蘭土、南方に土耳其を侵

して、次第にその領土を廣めて行つた。東歐の露西亞を文明の道に進めるためには、直接に西歐の文物を輸入するための窓を開かねばならぬとて、フィンランド灣頭に新に國都を建設し、機の乗すべきある毎に、南北に於て頻に海岸線の獲得を謀つた。

彼は、かくて、十八世紀の初には、先づ瑞典を撃破したが、ついで波蘭土王位繼承戦に干渉し、奥太利と結んで、佛國に反對し、その勢力を波國に扶植して、後年、分割の素地を作つて行つたし、同時に奥太利と共に頽唐の土耳其を伐つて亦頻にその地を侵略した。かくて露國の勃興により、東歐羅巴は、最早、西歐羅巴が無視することの出来ない、歐羅巴の有機的な一局面となつた。

(三) 局部的戦役から全歐大戦役へ

一 西班牙繼承戦役

十八世紀の歐羅巴の政局に大きな變化を齎せしものは、ロマノフ王朝の勃興の外に、ホーヘンツォーレルン王朝の頭を擡げたことである。彼等はかくてこれまでハプスブルグ、ブルボンの相角逐しつありし歐羅巴に新なる選手として現れ、共に鹿を中原に逐ふに至つたから、歐羅巴の歴史は、之によつて頗るその複雑さを加へ、これからの戦争も、従つて自ら局部的の性質から、一般的のものに移つて行つたのである。

民族思想のまだ發達してゐない近世歐羅巴では、王朝間に於ける繼承問題が戦争の原因となることが最も多かつた。國境が王者の家督でさまゐるのだから、平和的な手段で最も安價に國土を擴張しようとするれば、可

成、大きな國と縁組を結んで、之を相續する機會を待つに如くはないのである。三十年戦役で、宗教問題が解決されると、之に代つて新なる争因となつたものは、繼承問題で、十八世紀には、此種の戦役は、續出してゐるが、その中でも大きなものは、西班牙、及び、奥太利の兩ハプスブルグ王朝に於けるそれであつた。

西班牙のハプスブルグ家が絶えたために起つた前者では、當時の西歐羅巴に飛ぶ鳥を落す勢の佛王が、彼の孫をその後繼者に擬したりしたため、奥太利を初め、多くの國は之に服せず、終に、西班牙、伊太利、和蘭、獨逸を戰場とする十四年にわたる大亂となつたのである。これは、佛國側では、西班牙の植民地を一括して新王朝に與へようとしたるに對し、敵側は、之を彼等の間に分割しようとするのであつた。結局、ブルボンの西班牙王踐祚は認められたが、佛奥の兩大陸國は、永い戦闘で疲弊し、佛國の國威も、これからは傾いた。此戰、英國も、佛國に宣戦し、大兵を大陸に派して屢々佛軍を破り、平和の結ばるるに及び、西班牙からは、ジブラルタル、佛國からは、北亞米利加の植民地の勢からずを奪取した。

此役の間に擡頭したものは、ホーヘンツォーレルン家で、此王朝も、北方の藩鎮たるブランデンブルグの選舉侯位を手に入れてから漸くにして起り、次で、神聖羅馬帝國の外にある普魯西公の位を繼ぐことになり、皇帝に忠勤を勵んだる勳功で、普西亞王に陞叙せられたのである。これ實に十八世紀の初のことであつた。ブランデンブルグ選舉侯としては、皇帝の陪臣であり、又普魯亞公としては、波蘭土王の陪臣たりしホーヘンツォーレルン家も、今や普魯西王としては、波蘭土王と、對等の地位にあるものなのである。

二 史上、最初の全歐大戦

これまで述べて来た戦役は、大抵、西歐羅巴を舞臺とする局部戦でないものはなかつたが、東歐の發達により、歐羅巴の天地は、頗る利害の錯綜せる大きな國家體系となつて来たから、同じ西歐の中でも尤も東歐に接近してゐる部分をば、中歐と云ふ特別の一地域として區別することが考へられる様になつて来た。即ち、歐羅巴大陸は、西に佛、中央に奥と普、東には露、海のかなたには英があり、これ等の大國の分合によつて勢力の均衡が保たれて行つたのである。

斯様な狀勢の下に全歐戦の可能なるは、東西歐が同時にどんな形でか參戰することを必須の條件とせねばならぬ。即ち、西歐の參加せざる全歐戦も、東歐の加擔せざる全歐戦もあり得ないのである。さうすると、それには二つの場合が考へられる。東西歐の二つが中歐の參加なり不參加なりを以て互に戈を交へる場合と、東西歐が相結びて中歐を包圍攻撃する場合と、これである。而してその何れにあつても、歐大陸に於ける此種の戰爭をば、どんな形かの均勢戦たらしめようとするは、常に一貫せる英國の態度なのである。

爾來、今日まで全歐戦は、前後四回行はれて居り、その中、最近の二回は、全歐戦でもあり、世界的戰役でもあるが、前二回のそれは、純粹の歐羅巴戰を以て始終した。さうして史上最初の全歐戦は實にホーヘンツォーレルンのバプスブルグに對する中歐霸權の王朝戦にその端を發し、普國のためその地を略されて悲憤遣る方なき奥國が、東に露西亞、西に佛蘭西と結びて、終に復讐戰を普魯西に挑み、纔に英國の支援を得た

のみなる普魯西を包圍攻撃したる七年の戰役は、即ち、これなのであつた。しかし究極に於て此役も、中歐では、普國の勃興を助け、海外では、又、英國に「より」以上の膨脹の機會を與へたに過ぎなかつた。

第十節 佛國革命と第二次全歐大戦

(一) 佛國革命

第一次全歐戦後、三十年を経ないうちに第二次の大戦が又もや勃發した。今度は、西歐の佛國がその火元で、巴里に起つた革命の騒ぎから大戦亂が起つたのである。これも、元をただせば、源を英國に發したもので、英國では、革命は、英國に特有な歴史的の原因から醸生された、全く國民的のものであつた所、十八世紀、北米英國植民地の獨立戰役になると、それが一般的、普遍的の理論を與へられ、更に再轉して歐洲大陸にはいつて來ると、知的に、一番開けて居た佛國民の間にその醗酵を見るに至つたものである。十八世紀末の佛國が、多年の王朝的戰役で疲弊を極めて居た事實は疑はれないけれども、只それだけの原因でならば、當時の佛國民以上に、惡政の下に呻吟しつつありしものは他にいくらもあつた筈である。曠世の大禍亂が巴里をその微菌の培養基としたりし所以は、歐大陸中、率先して啓蒙思想の洗禮を受くるに至りたりしものが佛國民であつたからなのである。

かくて革命の動亂は一七八九年のバスチエ破壊を起點として二十有六年の永きにわたり、その間に、恒心

なき佛國民は、政變に次ぐに政變を以てして、憲法を更改すること前後實に六回に及び、あらゆる種類の政治形體を経験し、これからの立憲運動に提供するに一七九一年の民主主義的憲法と、一八一四年の君主主義的憲法との二つの類型を以てしたのである。

(二) 歐羅巴の動亂

一 佛國の新陸軍

第二の全歐大戰は、一七九二年、奥、普、等、中歐の君主國が、ブルボン王朝を倒し、其王を斷頭臺に戮せし不逞の佛國革命黨に對する宣戰から始まつた。備へ、完からざる巴里政府は、忽にして其國境を侵され危急存亡に迫つたので、國內の一切の異論を掃除し、舉國一致の體制を整へて外患に衝り、終に能く勁敵を討ち破つたのみならず、更に勢に乘じ、ライン、アルプ、ピレネーの自然の境界線を踰へて敵地深く侵入するに至つた。遠征の目標は革命の諸原理を宣傳して、各國民をその壓制政府から救出するにありとされたが、それは、終には、全くの征服戰になり變つて居り、平和は一七九七年乃至九九年、並に一八〇二年乃至一八〇三年の短少なる二回おとづれて來たばかりで、歐大陸は、殆んど絶え間なく佛軍の馬蹄下に蹂躪されたのである。

かかる赫々たる戦果は、優秀なる軍隊の編制と之を率ゐる偉大なる統帥者の出現とのたまものでなければならぬが、實に革命は兵制や戦術の上にも亦革命をもたらししたのである。革命當時の佛國は財政難のため大金を出して高價な傭兵を傭ひ入れることが出来なかつた。それに四方から押し寄せて來る雲霞の如き敵軍を防ぎ止めるには、並々ならぬ大軍が必要であり、義勇兵などでは、とても満し切れるものではなかつたので、徴兵論は、勃然として起り、強制主義は專制政治の遺物だからとて、國民の中には反對の聲も相當にかつたにも拘らず、議會は、一七九三年の八月、たうとう強制徴集法を通過し、十八歳乃至二十五歳の男子は、既婚者と癩疾者とを除き、悉く之を第一線に立たせることにし、忽にしてその六十萬を得た。これは言はばほんの素人兵隊に過ぎぬのだが、職業的軍人から成つてゐる大敵に衝つて到る處之に打ち勝つたのは、敵が烏合の衆たるに反し、革命の産物である佛國の市民軍には、祖國救護の烈々たる愛國心の裏に燃えてゐるものがあつたからである。

二 佛國第一帝政の功名心

佛軍の百戰百勝は、又四面楚歌の普魯西が稀代の戦術家たりしその王の下に、七年役を勝ち抜いたりし如くに、古今無比の軍事的天才の指揮によりて贏ち得られたものであつた。第一次全歐大戰末期の普軍は、殆んど普兵からのみ成り立つて居たが、當時に於ける各國軍隊の中堅は、まだ、相變らず外國からの傭兵であつた。普王は腹背から攻め寄る敵に對し、成るべく犠牲多き大會戰を避け、機動戰により巧にその背後に襲ひかかり、その地を略すると云ふ戦法に出たので、戦ひは、自ら持久的、長期的とならざるを得なかつた。然るに佛將ボナパルトは、敵地の占領など眼中に置かず、一の重要地點に彼が全兵力を集めて敵軍の中

央を突破し、北ぐるを追うて痛烈なる打撃を之に與へ、一舉に殲滅するの新戦術を案出し、之によつて頻に奇功を奏した。マレンゴー、アウステルリッツ、エーナ、ワグラムに顯されたすばらしい即決戦は、かくして全く世人を眩惑せしめたのである。

自由・平等・友愛の三原理の宣傳を天下に誇揚した佛國民は、武勳赫々たる大將の前にすべてを抛ち、新に皇帝と仰ぎて之に跪拜奉仕するに至つた。皇帝の稱號と玉座とは、歐羅巴では、羅馬の方唯一つしかない名譽であつた。羅馬後これを名のるものは、舊帝國の繼承者と仰がれたる神聖羅馬皇帝あるのみだつた。西歐のいかに偉大なる王者と雖、皇帝を僭することは許されなかつた。西班牙王の皇帝を稱せしは、皇位の繼承權の會々彼の身の上に落ちて來たためだつた。莫斯科大公の一五四七年皇帝フョードルを稱せしは、彼が東羅馬帝國の繼承者を以て自ら任じて居つたため、この帝號には、神聖羅馬帝國に存する様な歴史的の尊嚴性は備つて居ないのである。所が佛國の新皇帝は、一八〇六年、終に神聖羅馬帝國を撃滅し、自ら之に代つて全歐洲の征服者、覇者たらんとするに至つたのである。

ポナバルト王朝の勢は、一八一二年に至つて正にその頂點に達した。西班牙王國、ライン同盟、ワルシャウ大公國、伊太利、ナポリの兩王國は、皆、彼が傀儡だし、丁抹、那威、普魯西、奧太利の諸國は彼の臣國である。全く佛國に依存しないものは、英露兩國の勢力範圍にある數ヶ國を數ふるのみだつたので、大陸に於ける覇業の完成を期せし佛國は終に露國遠征の大冒險事業を起したが、一敗、地に塗れ、壯圖空しく地に

委してしまつた。

(三) 平和の克復

一 和約の成立

ポナバルト王朝の躓きは、直接には、露國遠征にあつたけれども、その遠源は、實に一貫した英國の反佛態度にあつた。東歐の三大君主國は初め心ならずも、佛國と歩調を共にしたけれども、結局、英國と結んで、佛國を倒すに至つたのである。所謂同盟四國、即、是で、勝利は全く彼等の手に歸したが、彼等は征服者を以て佛國に嚴罰を課することなく、只その國境を一七九〇年分に復することを條件とし、終には佛國をも戦後の歐洲整定の仲間に入れたのである。

かくて一八一四—五年、塙都ウイーンに開かれし公會は、専ら同盟四國に佛國を加へた五大國の談合で平和の一切の條件をとりきめた。東歐の三君主國は、皆、反動的の舊制國家である。西歐の英佛は、革命の發源地であるとは云へ、多年の戦禍に懲りて今や、甚しく現状の紛更を喜ばざるに至つてゐる。そのため五大國が恢復しようとしてゐる歐洲は、革命の諸原理を支持しない、舊狀の恢復を主眼とするものであつた。獨逸聯邦規約だけには、速に憲法を發布し、議會を召集すべき旨、明記してあるけれども、これは、聯邦中の小國だけに存する希望に過ぎず、塙、普等の大國は、決して之を冀つては居ないのであつた。

かくの如くにウイーン條約による新體制の復古を標榜するに拘らず、革命戦亂の間に亡んだり、若くは領

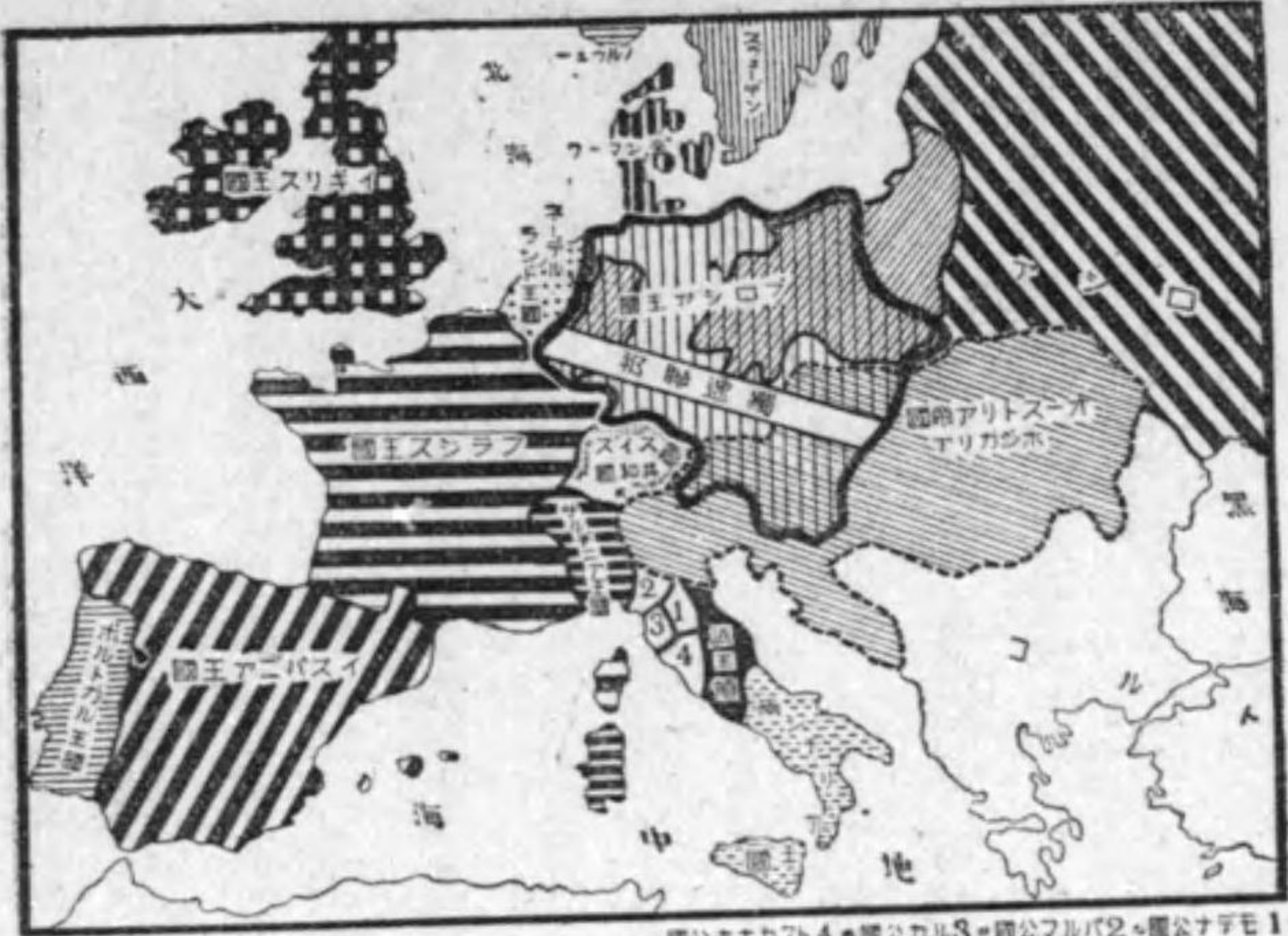
土を割かれたりした國の一々を、その舊い境界線のままに恢復すると云ふことは、到底、實行不可能の沙汰であつた。そこで斯様な場合には、大國は、統計的に國土や人民の分合を勝手氣ままに行ひ、この際、その

住民の歴史的關係や、彼等一々の希望など一切顧慮することはなかつた。戦亂中、和蘭や伊太利には、一時多くの共和國が建てられたが、共和國として生き残つたものは、一の瑞西あるのみである。

二 「歐洲協調」と「英國の平和」

ウィーンで結ばれた諸條約だけでは、持續的の平和も保障されない懸念が最多かつた。そこで露、奥、普、東方の三帝王は、一八一五年秋、基督教家族の三分家をば、それぞれに上帝から寄託されてゐる同胞として、歐洲平和支持のために協力すべき申し合せをなした。世に神聖同盟の名で知られてゐる此結合は、全く歐洲的のもので、新世界はその考慮の中に加へられてなかつた。歐洲的のものであるが、回教の土耳其は之に召請されてなかつた。それほど明白に基督教的の

巴羅歐の後會公シーイウ



結合であるにも拘らず、羅馬法皇も加入の勧誘を受けてゐないのであつた。これは、希臘舊教の法皇を兼ねるにもひとしき露帝を發案者としてゐるからであつたらう。

十字軍この方、回教國の存在は、基督教徒にとつて眼の上の瘤であつた。羅馬法皇は之がために西歐羅馬舊教諸國の結束を考へたが、それは、單なる精神的の存在に過ぎない彼としては、實際に於て及びもない所だつたので、心あるものは、實力ある一人の俗人君主の手で基督教世界が統一せらるる日の到來せんことを窃に夢みてゐるばかりであつた。土耳其が歐洲に侵入してからは、彼を畏るる基督教徒の間に色々の聯盟案は考案せられ、十七世紀の初、時の佛王のものせしものでは、十五の基督教國を結合することになつて居たし、更にこれから一百年後の一案では二十四國家の聯盟が説かれて居つた。何れも土耳其を除外してゐるのであるが、前案では、その仲間に加へられてゐないものの中に更に露國をも見るのである。

十八世紀この方、歐羅巴に對する土耳其の脅威は、もはや問題とせられなくなつて居たから、神聖同盟は、尙更、土耳其にとりあはなかつた譯である。歐洲の君主と云ふ君主は、翕然として之に参加したから、基督教國家の一大聯盟が、倏忽として出來上つた譯だが、しかし、これも實は、全く有名無實の存在でしかなかつた。

同盟四國は、一八一八年からは、更に佛國をも加へた五大強國となり、此結合は、往々にして「歐洲協調」と僭稱されたが、歐洲協調とは大それたことで、實は五國協調以上の何ものでもなく、彼等の各は、

その利とする時と所とに於て、しばらく妥協してゐるに過ぎなかつた。東方の三大國だけは、現状の打破を欲せざる點で、利害の共同を感じたけれども、英國は、必ずしもさうではなかつた。深き慮りある彼は、神聖同盟の勸誘にも應ぜず、従つて之に加入せずして、自己の行動を拘束せられない自由の地位にあり、外國の内政に干渉しようとする云ふ大陸四國の政策に雷同することを避け、そして間もなく、所謂、歐洲協調から離れてしまつた。唯一の競争者たる佛國が海上から退いてからの英國は、今や完全に四海を制し、海外の利益を開発するの必要上、寧ろこれまでよりも以上に大陸の均勢を要するに至つた。昔、羅馬はその紀律の峻嚴にして勇武絶倫なる陸軍によつて所謂「羅馬の平和」を贏ち得たが、英國は、彼が最大の海軍によつて世界の平和は十分に保たれるであらうと誇號した。英國によつて保たれる平和は、英國的でしかあり得ないのだから、眞に「海の自由」を保障されてゐない他の強國を満足せしむるに足らぬことは言ふまでもない。かかる状態の下に成立すべき一種、卑屈なる平和は、いかなる強大國と雖、肯んじ得ない所であらう。これ第三次全歐大戰の禍亂を促した動因に外ならなかつた。但し一八一五年から一九一四年までの所謂「國王の平和」をば「英國の平和」と英人が自慢するとしても、それは、大英帝國に關する限りでは、彼等の御自由であると云ふより外ない。此百年間、英人は、その無敵の海軍力を以て、能くその大なる領土を統制し、國王のしろしめす所、能く平和を保ち續けて來たことも、事實だからである（一六八九年乃至一八一五年の二二六年間に於て平和六三年、戰爭六三年、一八一五—一九一四年の九九年間では平和九三年、戰爭六年）。英

人は、又、同時に、此間に於て彼等の闡明せる政治的、經濟的の所謂「啓蒙文化」が、世界に普及せられたることをも誇つてゐるのである。

第二編 國民主義全盛の比較的平和な中間時代

第三章 國民主義の時代

第十一節 「啓蒙文化」の發展

(一) 「啓蒙文化」とは何か

歴史の永い繪卷物を繰り廣げて見ると、どの時代にもそれ／＼變化があつて飽かないのであるが、しかし靜かに之を總観すると、第十九世紀以降の現代ほど、すべての方面に渡る變動の著しきを曾て見ないのである。ひとり形の上ばかりではない。思想上のことでもそれである。これは世界の何處の歴史よりも變化に富み、わけでも、再生文化この方、えらい發展をなし遂げてゐる歐洲を中心として演ぜられた事で、これがため、人類の生活事情は、僅々數世代（エネレシヨン）の間に、それより以前の何千年といふ永い時代を通じての變化を以てしても、とても比べられない、眞に革命的と言つてもよいほど變つたのである。再生文化で四方の海に擴まつた歐人も、極東、近東の佛教及び回教の社會だけには、まだ深くはいり得なかつたのに、今やその堅く閉

されたる門戸をも打ち破つて、これ等、東方の祕密國に闖入し、これからは、西洋も東洋も共に含まれてゐる眞の世界歴史が展開せらるるに至つたのである。中世の末期に、明るくて暖い陽氣な南歐を出發點とした再生文化は、知的、精神的のものであつたが、十九世紀に於てその全盛の極に達し、歐洲を風靡して終には世界の隅々にまでも及んだ政治的、經濟的の大運動は、實にうす暗く、冷くて陰氣な英國をその發祥の地としてゐるのであつた。之を總括する適當な名辭がないので、私は甚だ妥當でないとは知りながら、しばらく之を「啓蒙文化」と命名して置かうと思ふ。以下、この新文化のあらはれである英國に於ける議會政治と、産業革命とに付て數言を費すであらう。

一 英國の議會政治

國事をば衆議にかけて決する風は、その所謂、衆といふ語にも大小廣狭の中々の開きがあるし、それにどうかすると氣まぐれの性質が多分につき纏うて居つたりするけれども、決して昔に珍しい現象ではない。古代の希臘、羅馬では、奴隸や外國人でない限り、すべての自由民は、斯様な相談に招請され、國家の大事をそこで決したものであつた。しかし近代の國家といふ國家で採用せざる所のない議會といふ制度は、歐羅巴、中世封建社會の等族會議（スターツ、ジエナラル）から起つたものである。これは、西班牙、佛蘭西、獨逸等、西歐羅巴の諸國で普く行はれて居た僧侶、貴族、平民三等族の會議で、大陸の諸國では、強い王者のため、結局、壓倒されてしまつたが、不思議にも、英國では、生き残つたのである。これ蓋し此場合、英國の貴族が、大陸の同族

とは違ひ、概ね平民を助けて王者に衝り、議會の防衛に任じて之を守り通したからなのである。

歐羅巴大陸から一葦帯水の陸島である英國は、その一千餘年にわたる歴史の上で、幾度となく外國から其王室を迎へる機會を持つた。此國の議會制度の發達は、かやうな歴史的の過去と密接の關係があるといふ事は、特に銘記に値する興味ある事供である。耶紀一二一五年の「大憲章」は、ノルマン王朝以來、追及された不首尾なる大陸政策の齎らせし、寧ろ偶然とも言はるべき産物であつた。更に又英國民の性情に無理解なりし蘇格蘭傳來のスチュアルト王朝が議會無視の淺慮なる政策を採つたりし結果は、終に畏るべき大内亂の勃發ともなつたのである。此不幸な出來事から、英國民は、國王、議會、互に和衷協同することの外に、その政治的發展を確保するの途なきを覺つたのであるが、十八世紀の初めに大陸から迎へられて君臨したハノウアー王朝（即現ウインヅル王朝）も、これ亦、その新なる祖國の事情に疎く、英語を解せざる獨逸人たりしがため、これまで王の御前に開かれて居た内閣會議をば寧ろ英國宰臣に委して顧みない風となつたりしことは、内閣制度の發達のために却つて好都合ならしめたのであつた。

議會の發達は、政黨の發達をその預件とする。英國に於ける政黨は、十七世紀の大内亂當時の王キアラリアーズ黨と議會黨ランドヘッスとから起つてゐる。此對立には地方的、朋黨的、閥閥的の性質、最も濃厚であつたが、全國的の制度である議會そのものの發達につれて次第に國民的性質を帯び、かくてトーリー、ホイグの兩黨から、終には、近代的な保守黨、自由黨と進化するに至つたのである。英國のこの議會政治にあこがれて革命を起した

佛國民が、徒らに理論の徹底を期して、終には無政府亂脈に陥りたりしとは異り、英國民は、能く政争を克服し、又、進んでは、佛國の禍心をも挫くことが出來たのであつた。佛國革命以降の戰亂時代に英國民の發揮し得たる愛國心は、大陸の多くの絶對國民のそれに劣らないのであつた。

二 其の産業上の革命

議會政治と相並んで、啓蒙文化を彩どる今一つの著しき特色は、英國に始まつた經濟上の大變革である。人類が文字を作つてからの所謂文明史は、まだ一萬年にも滿つまいが、その間に於ける我々の經濟的生活は、その形の上に多少時代的の變遷を免れぬにせよ、その實際上の性質は、殆んど變らないと申してよろし。漁獵なり、牧畜なり、農業なり、商工業なり、生計の道に變りがあつても、生産の手段は、いつでも、我々の手足をたよりとするものでないものはない。その點では、一萬年を一貫して同じであつたと言つて良い。機械が用ゐられてゐないといふ點では、埃及、メソポタミアの昔と、支那、印度の現代とを問はず、どこも同じであつた。

ところが十八世紀、歐人が啓蒙時代と呼ぶ唯理主義の時代になると、英國の産業上の地位は、歐大陸諸國のそれを遙かにかけ離れたものとなつて居た。科學の進歩には、大陸と島との違ひがなかつたにせよ、英國は、大陸各國の有しない多くの有利な條件に恵まれて居た。十五世紀この方の歐大陸の王朝戰に對しては、英國は、餘程の事情がない限り、參加しなかつたから、それだけ、人間も資本も、消耗を免れて居た。それ

から彼の植民地は、彼の巧妙なる外交策により、歐羅巴の王朝戦の間に着々として伸びて行き、殊に十八世紀の中葉に加奈陀と印度とが彼のものとなつてからは、これ等の植民地の資源が自由に入手され、利用されることとなつた。機械を作るとなると、鐵が必要になるし、更に又鐵を鑄かすための石炭が要求されるのであるが、英國ではこれ等の原料は、その最も適當地點に殆んど無盡藏に埋藏されてゐるのである。實に鬼に金棒といはねばならぬ。

かやうな事情が相加はつて、十八世紀後半以降の驚くべき機械の發明が英國に實現され、それが纖維業關係から始まつて、十九世紀には交通通信機關の革命とまでもなり、此驚くべき産業上の大變革は、彼の政治上に於ける民主制度と共に、燎原の火の如く十九世紀以降の世界を風靡したのである。

(二) 反動時代の諸革弊

啓蒙文化は、英國に於ける諸弊竇の釐革を切つ掛けとして、これから四方に蔓延して行つた。二十年あまりにわたる對佛戰役の消費と犠牲とは、尋常一様ではなかつたから、流石の富める英國も、戦後は、ひどく弱つて居た。國債は山積してゐるし、貿易をはじめ、すべての事業は萎縮し切つてゐる。復員で失業者が多く、物價が高い。しかるに大地主たる貴族は、極めて利己的に、外國の穀物に保護税を課することにしたから、一般民衆は生活費の不廉に甚しく難澁した。歐洲大陸は、どこもかしこも、反動黨の天下で、民衆のための思ひやりや、施設は、すべて後とまわしにされたが、英國も、この大勢の埒外には居なかつた。しかし

ながら、此國は、政治上、經濟上の新しい運動では、正にその先端に立つてゐる所だ。政治思想の點では、歐羅巴では、先覺として自も許し、人も推してゐる所なのである。民心は、いつまでも、理不盡なる反動者流の専恣と横暴とに屈しては居なかつた。志士論客の、口に筆に當局に警告を與へて止まぬものも尠くはなかつた。獨逸では、反動政治に對する反抗の中心は、大學にあつたが、英國の場合、新興の商工業者であり、それは、國民的であつたと言つても、決して過言ではなかつた。蓋し大革命、及び、之に續く大亂の間に、佛國に起つた政治上の實物教育は、英國の上下をして、深く省察せしむるものがあつたからである。

第十七世紀末、名譽革命この方の英國の社會は、少數貴族の掌裡にあり、初めホイグ黨、勢力をふるひしも、十八世紀の中葉この方は、トリー黨の天下であつた。けれども、引き續いた大戦亂の後、情弊刷新の要求は、あらゆる方面に向つて聲高く提起されて居り、保守黨の思慮ある政治家の中にさへ、早くも勢の止むべからざるを伺見して、經濟上の改革に著手し、厳しい干涉政策の緩和を試むるものもあつた。かくて十九世紀の二十年代を起點とし、約半世紀の永きにわたつて新なる改革の時代となり、その間に國教徒ではない英國臣民に對する身分上の數々の缺格條件は撤されたし、結社法は改正されたし、新なる工場法や救貧法は制定されたが、就中、劃期的とも言はるべきは、一八三二年に於ける選舉法の改正と、一八四六年の自由貿易政策の樹立とであつた。前者により、頗る中古的な選舉制は一掃せられ、所謂、第三階級、即、平民は、初めて政治上の一要素となることが出來た。さうして、これから五十年の間に、選舉權は、なほ二度(一

八六七、一八八四―五)も擴張されたし、選舉場裡の腐敗の取締に關する法律(一八八三)も完成されて、各國は此方面では、範を英國に求めざるはなきに至つた。更に後者によつては、英國は産業に對する一切の保護乃至干渉を撤し、必要の品は、それが何であらうと、どこからでも之を輸入して我が用を満たし、一切内外の別を立てないことにした。蓋し英國自身の優秀なる産業上の施設と、その製品の眞價とは、一切の競争を超越するの自信力を英國民に鼓吹してあまりあるものがあつたからである。かくて十九世紀この方、解放は正に歐羅巴を通ずる一大思潮となつた。

第十二節 西大陸の解放

(一) アングル・サクソン民族の解放

英國の新世界に於ける植民地は、佛國にすら後れたけれども、他國のわりこみ運動を許さず、逐次、和蘭や瑞典のそれを併呑して、十三個の植民地を大西洋の岸に築き上げ、北方加奈陀の佛國植民地と對立するに至つた。所が、十八世紀の中葉になると、此加奈陀の植民地までも佛國から取り上げてしまつたから、西大陸の天地には、中南米の羅典民族と北米のアングル・サクソンと相對立するばかりとなつてしまつたのである。佛國の此大なる損失は、彼が大陸政策から手を抜ききれない、即、植民政策に第一眼目を置き得ない運命的な事情によるものであつた。之に反し、英國の成功は、植民地に對する其一貫せる執心によるもので、

此政策は牢乎たるものではあつたけれども、佛國とは違つて聊、うつちやらかしの氣味もあつた。然し、さうして本國のうるさい干渉の外に立つてゐると云ふ事は、植民地それ自の發達のためには、寧ろ却て好都合なのだつた。植民地は、もとより王朝の家督であり、家産なのであつて、その中には、王に直隸してゐるもの、王が負債その他の關係から一私人に附與した^{プロプライエタリー・コロニー}もの、及び王から買ひとつた特許狀で會社が經營してゐるものの三種類あつたけれども、年所を経るに従つて、結局は、王領の一種に歸著してしまつた。本國の植民地經略は、十七十八世紀當時に普き重商主義^{マーカントリズム}の思想を以てせられ、植民地からは、本國にない貨物を供給させるばかりで、産業的には、一切、本國と競争させない様にしたし、本國と競争する地位にある外國に利益を與ふるが如きことなからしめたし、更に進んでは、政費や國防費の負擔にも任じさせることにした。七年役の後には、わけても此最後の課稅政策を露骨に行つて行かうとした。植民地を本國の搾取の目的物となすことは、すべての國に公行の習俗で、少しも奇しまれなかつたものであるのに、たかが實際上の費用負擔の問題がアングル・サクソンの北米では、はしなくも、えらい物議を起し、本國への反對運動を唆る原因となつてしまつたのである。

元來、北米は、墨西哥や秘魯の様に當時の歐人が一番に欲しがる金や銀の眼前にごろついてゐる所ではない。熊や狼や開けない土人の跋扈してゐる雪ばかりの不毛の野と考へられて居た所だから、本國は、あまり深い關心を之に拂つては居なかつた。それだけ、植民地も、自由に伸びて行くことが出来たのであるが、佛

人が加奈陀から追ひ拂はれてしまふと、植民地が本國を必要とする理由の少からずも同時に亡くなつたことになり、自然に、彼等の我がままを募らせることになつたと云ふ事は、是非もなかつたのである。すべての植民地は、國王勅任の知事の支配の下にあるとは申せ、それは、外部との關係の上のことで、各州そのものの自治は、特許狀で夙に保證されて居たのである。所が、本國が急に植民地に干渉し、わけても、之に政費の負擔を命ずると云ふことになる、植民地は、堂々と、得意の憲法論を駁して、代議なき課税は非立憲であると叫んで、頑固な抵抗を始め、彼等は、交々新に憲法を制定し、一七七六年七月四日、終に十三州の獨立を天下に布告し、その劈頭第一に、すべての人は、自然に於て自由・平等・獨立の存在であると聲明するに至つた。此戦は七年の長期にわたる双方にとつて中々の難戦であつたが、英國に對し、怨を懷いてゐる佛、西の諸國の、交々米人を救護したりしたため、十三州は辛うじて獨立の目的を達することが出来、一七八七年、聯邦主義の新憲法を制定し、北亞米利加合衆國なる共和國を建立したのである。

尤大な北米の植民地を失つたことは、英國にとり、大きな打撃であつたことは争はれぬ。しかしながら、假に米國獨立の事實なく、加奈陀を包含したアングル・サクソンの一大植民地が、順調な發達を大西洋の彼岸に遂げて行つたとするならば、歴史と傳説とを誇る本國も、或は、結局は、その偉大なる植民地のために壓倒せられ、その中に埋没されてしまふ様な結果になりはしなかつたらうか。米國獨立後の現在の歴史的展開に於て、アングル・サクソン世界に於ける重心の、次第に英國より米國に移動せんとしつつあるを感ぜし

むるものがあるではなからうか。

(二) 羅典民族の解放

北米に植民した諸民族は、もとより南方にも移住を試みてゐる。即、佛人は西印度群島を占めたり、英人や葡人も皆南下したが、しかし、中南米は、やはり、西人、葡人の世界であつた。ここは、西葡兩王家の純然たる搾取的目的物で、大權を佩ぶる總督が國王の名代として之に臨み、本國人の渡航は嚴重にさしとめられ、あらゆる利益は、王朝と之をとりまく官僚とに専占されて居た。

移民は許されないが、アングル・サクソン人とは違ひ、イベリアの羅典人は、異民族との雜婚を厭はぬため、亞米利加印度人とは勿論、阿弗利加から輸入されて來た黒人との間にも、混血が行はれて、幾多の雜種がその社會層を充すに至つた。その中で、一番、威張つて居たものは、本國から來た少數の純白人だつた。

ここでは、政治は本國本位の絶對政治だが、同時に植民の精神界に君臨するものは、羅馬舊教會の絶對主義であつた。本國たる西班牙の不振を極めて居たにも拘らず、かやうな壓制政治の永く植民地に保たれたるは、此處が歐洲から遠く隔絶し、外國の干渉の容易に及び得ない別天地をなして居つたことに職由するのである。所が、十八世紀の後半に至つて、御隣りのアングル・サクソンの植民地が本國から獨立すると云ふらしい事實が持ち上つた。此は、多年、虐げられて疲弊困憊の極に達して居た羅典民族にも、多大の感銘を與へずには措かなかつた。かかれば、ボナバルト王朝の西班牙の王位を篡奪し、西班牙國民の之に反對して起

つに及び、植民地は、忽ち之に共鳴して蜂起し、十九世紀の初の三十年間に、悉く本國から脱離してしまつた。加奈陀を初め、大小の植民地は、相變らず、それぞれの歐洲國家に屬しては居るけれど、西班牙の植民地は、北米合衆國に引き續いて、皆歐洲から獨立し、伯拉西だけは本國葡萄牙から王子を迎へて帝國となつたが、その他の十餘國は、一の例外もなく、合衆國流の共和國となつた。歐洲では、共和國を以て立つてゐるものは、一の瑞西あるのみなるに、西大陸は共和的新天地として世界に臨むことになつた。これ實に産業の革命と共に、第十九世紀の序幕を飾る最も意義深き出來事と云はねばならぬ。

(三) 西大陸は西大陸人の西大陸

建國勿々の米國は、歐羅巴なら三等國位の實力を保つてゐるに過ぎぬ小國だつたにも拘らず、正に吞牛の意氣に燃えてゐたことは、獨立後三十年ならずして、第二の獨立戦とも呼べるべき對英戰役を起した事實に徴しても知らるべきである。英佛間の封鎖戦のあほりを食うて、海上貿易の受ける損害の嘗ならぬを憤れる米國が、英國に挑んだ此三年間にわたつた戦は、新英蘭土地方では、甚だ不人氣だつたし、明かに國論の一致を缺いて居たかなり無謀なるものだつたのである。

此青年國家に著しかりし爭氣や、客氣は、これから後問もなくまたもや試みられる機會に逢著した。それは、歐洲に於ける反動主義の三大君主國が、平和保持を名として、各國の現状打破運動に武力的干渉を加へ、その彈壓政策が成功すると、今度は圖に乗つてその手を西大陸までも及ぼし、嘴を羅典亞米利加の獨立

運動にさしはさまうとした時のことである。西大陸で歐洲に失つた市場のうめ合せをしようと云ふ老猾な英國が、早くも、歐洲協調に見きりをつけ、窃に米國と提携しようとしてさそひをかけたつたその際に、その手には乗らぬ米國は、一八二三年、時の大統領の名で、西大陸は、もはや歐羅巴の植民の目的物として考へらるべきではない。米國は、元來、歐洲に干渉しないことを旨としてゐるものだ。それなのに、若し、歐洲諸國が、已に獨立を承認されてゐる西大陸の國家に干渉を試みんとするが如きことありとせば、米國は、非友誼的の行爲を以て之を目せざるを得ないものだと言したのである。つまり、歐洲は歐洲だが、西大陸は今や歐洲とは別段な國際團體をなしてゐるものであることを主張せんとするものなのである。

モンロー主義と呼ばれた此獅子吼が、羅典亞米利加のこれからの發展に貢獻すること尠からざりしことは争へぬ。米國當時の大なる功名心は、彼自ら西大陸の牛耳を握らんとするにあつたことは、固より疑を容れない所である。十九世紀初年の西大陸では、アングル・サクソンの三百萬に對し、羅典民族系の人口、これ、亦、三百萬と推定せられた。尤も中南米には、印度人、黒人その他の混血種をも合して、米國人口に數倍する住民が居つたのであるから、質的には兎も角、量的には重心の南方に存せしは、争はれなかつた。羅典亞米利加の脱縛戦に際し、此千載一遇の好機に、南北兩米を打つて一丸とし、一大合衆國を新世界に築き上げるべきだとして、一八二四年、汎米會議の議が南方から提起された所、これが好果を擧げ得なかつた理由の一半には、米國自體の我利と嫉妬とが横つて居つたものと想はれるのである。

第十三節 歐米列國の極東侵迫

(一) 支那に對する海陸からの侵迫

一 南方海上からの侵迫

米國の宣言は、決して徒らなる白痴威しに止まるものではなかつたが、之に對し、多く言はず、語らずして、黙々の裡に、自國利權推進の機會をつかまへて行くことに手ぬかりなかつたものは、英國であつた。十九世紀中葉の半世紀近くも、此國では、自由黨は殆んど完全に政局の主人公となつて居た。彼は、歐大陸を騒がしつゝありし解放運動では、概ね弱小民族に聲援を吝まず、彼自らその範を垂れてゐると誇揚してゐる民主主義を世界に弘布するための努力に任ずると稱し、やがて解放を勝ち得た新國家を後見し、之によつて自國經濟上、政治上の利益を攫取する機會を怠らなかつた。彼の發展は、すべての方面にわたつて居た。假に英國の北米植民地に離叛の事實がなかつたとしたら、啓蒙文化推進期の多端なる彼は、大西洋を湖水とする大英帝國建設のためにその精力のすべてを傾倒せざるを得ず、印度洋や太平洋方面への進出は、及びもない所であつたであらう。米國の獨立は、英國をして自ら彼の關心を西方から東方に轉向するに至らしめたものであつたことは疑はれない。

歐人の支那に對する興味は、十七世紀末この方、佛國を中心として盛に喚び起されたが、しかし當時に於ける支那趣味なるものは、學者貴族等、有閑者流の道樂仕事に過ぎぬ觀があつた。獨り、英人は、より多く實利的の立ち場から此問題に臨み、佛人が革命さわぎに没頭してゐる十八世紀末から次の世紀にかけての二十年あまりの間に、有力なる使節の一行を北京廷に派遣するもの前後二度に及んだ。支那政府は、葡萄牙、和蘭等の小國に對したと同じ暴慢な態度を多く改むる所なかつたため、使節は使命を完うすることが出來ずに空しく歸つたけれども、英國の極東に對する大なる執心は、これしきの事でひるみはしなかつた。印度や支那方面に對する遠慮から、彼は歐洲大亂の間に、印度洋上の要所々々、喜望峰、錫蘭、セイシエル、モリチウス等をその手に收むることを忘れては居なかつた。一八一九年には、彼は新嘉坡を占領し、次で下緬甸までもその侵略の手を伸ばして行つた。一八三九年にはアデンを取つた。

一八三八年、汽船は、初めて大西洋を横斷し、海洋交通上の革命の完成された時、英國は愈々一大決心を以て支那に臨むこととなつた。支那をしてその門戸を開かしめんためには、砲彈によりて之を覺醒するより外なきを識つた英國は、阿片貿易に對する支那官憲の妄狀に膺懲を加ふると稱して頻に沿岸の海港に砲撃を加へ、北京政府をして力屈して、終に一八四二年、南京條約により、償金を拂ひ、香港を割き、五港を開くことを諾するに至らしめたのである。

かくして支那は歐米に向てその國を開くことにはなつたけれども、まだ完全にその眠りから覺めきつたとは云へなかつたから、列國は、之をして條約實行上の實際責任に任せしめるためには、和戰兩様の交渉を氣

永く續けて行かねばならず、南京條約後、十有五年にして、英佛聯合軍の北支那遠征となり、折しも畏るべき内亂のため窮地に立ちし北京政府をして、その城下に和約を誓はせるに至らしめた。

二 露國の南下

南方からやつて來た歐羅巴國民の中には、條約上の正當の權利で互市を通じてゐるものは南京條約の結ばれるまでは、まだ一つもなかつた。そのこれあるは、尼布楚、恰克圖の諸條約を北京政府と結んだ北方の露國あるのみだつた。露國は、かくて新興の勢、勃々たる清廷と、北京、及び恰克圖で貿易することが出來た譯だけれども、それは、實を言へば、寔に不確實なものであり、北京貿易などは四年に一回だけ、隊商を認めらるるに過ぎないと云ふ有様であつた。此方面で毛皮を興へ、茶、絹布その他の雜貨をその代りに得ようとする貿易上の利益は、莫大なるものであつたから、露國は、さう云ふ方向に條約の改正を要望して止まなかつたけれども、頑冥な清廷は、中々、聽き入れてはくれず、従つてこれから一世紀を超えるほどの長い期間にわたつて、支那に對して、露國から、使節をば、纔に二回、隊商をば三回、派出し得たるに過ぎなかつた。これは、實は支那の回避的態度のためばかりではなかつた。露國自にとつても、東方の侵略の有する意義、重且大ならずとはせざるも、歐洲政局の重大さには比べらるべくもなかつたからだつた。十八世紀の初を以て初めて歐洲政局に参加するを得た露國にとつては、彼が西境の問題は、遠い西伯利亞や日本海上の問題よりは、遙に緊急だつたのである。

されば露國の東方經路のためには、黒龍江の水路を開くこと、何よりも先決緊急だつたのに、それが閉ざれたままであつた。然るに、阿片戰役で支那の門戸が打ち破られ、英國と云ふ東亞の世界への新なる闖入者が俄に現はれて來たために、支那海ばかりか、日本海に於ける利益までも英國のために壟斷されはしないかが懸念される危機が到來した。そこで流石の露國も、愕然として急遽、之が對抗策を講ぜねばならなくなり、一八五〇年、支那政府の承諾を得ることなしに恣に彼の領水たる黒龍江を探検し、次でクリム役起り、英佛聯合艦隊の類に北太平洋上の露領を窺察するや、露國は今躊躇すべきにあらずとて、黒龍江の全左岸を露國領土に收容すべき果敢なる方針を定め、著々としてその歩を進めて行つた。彼の眼中、今はもはや清廷はないのである。英佛と干戈を交へつつあつた北京廷は、之をいかにともすることが出來ず、一八五八年、一八六〇年の兩次の條約を以て黒龍江の全左岸と、烏蘇里江の全右岸とをむざ／＼露國に割讓するに至つた次第である。

(二) 日本の開國

支那に對する露國の侵略は、十九世紀の中葉に突發したものが、彼の日本に對するや、實に十八世紀の初この方の脅威だつたのである。十七世紀の前半期、日本が嚴重な鎖國令を布いてからは、支那船及び和蘭船の長崎に出入するものを除き、沿海からは殆んど外船の跡を絶つたが、清國のために黒龍江の水路を塞がれて遠くカムチャッカによりて太平洋に出るより外、途がなくなつた露國は、頻に探検隊を出して北海の水

陸を探り、十八世紀の中頃には、斯様な冒險者の日本の沿岸に接觸するもの兩三次（一七三九、一七七二）に及んだ。之と同時に日本を威嚇したものは、露人がカムチャッカから千嶋の嶋々を従へて次第に北海道に近づいて来たことであつた。當時、露人の日本に對するや、支那で満し得なかつた貿易上の要求を徹しようとする云ふが眼目だつたけれども、日本政府の鎖國の國是を支持するや、寧ろ支那以上で、寛政四年（一七九二）と文化元年（一八〇四）との兩度に渡り、彼得堡政府が辭を卑うし、禮を篤くして派遣した使節をも、悉く追ひかへしてしまつた。これがため日本政府の非禮を憤れる露人の北海地方をあらしまわるなどの事もあり、北方防備の論は、熾に起つて來たし、日本壯士の樺太や千嶋を探検するものも輩出し、其結果として間宮海峡存在の事實も闡明され得たのであつた。實に露人の海峡發見に先つこと四十餘年の出來事だつたのである。

爾來、露國は、對土耳其古の問題で忙殺されては居たけれども、日本を開かうと云ふ發意を捨ててしまつた譯ではなかつた。支那とは最初の條約國であると云ふ關係を持つて居りながら、世界に向て眞にその門戸を開放させてやると云ふ開拓者の地位など、空しく英國に先取されてゐる迂濶千萬な露國である。彼はそれまでの行きがかりの上からも、日本だけは、自分の手で開きたい冀望だつたから、米國に左様の計畫が旋らされてゐると傳へらるるや、嘉永六年（一八五三）に至り、時をうつつさず、日本が五十年前の露使に與へた信牌を持參の使節を、日本政府の指定せる長崎に派遣したのである。

日本人とは一世紀半以上も接觸してゐるのだから、他より以上に日本國民を知つて居らねばならぬ筈の露

人が、日本との交渉に於て却て新米のヤンキーにしてやられたと云ふことは、少々訝しく思はれるが、思ふに、これは、多少に拘らず、日本を識つて居つたがための日本買ひ被りの結果に外あるまいと思ふ。日本に於て、何等の先入觀を持たなかつた米人は、誰憚ることもなく、將軍輦轂の下なる江戸灣に肉薄し、大艦と巨砲とを突きつけて臆病な幕吏の度膽を抜き、忽にしてその效を奏したのであつたが、應揚な露人は、禮貌と懇懃とで日本官憲を待つより外を知らなかつた。斯様にしてアングル・サクソンの二大國家は、殆んど一舉手一投足の勞を以て極東の黃人國を彼等の脚下に屈服せしめ、啓蒙文化のすぐれた力を遺憾なく發揮したのである。但し、兩國がこれから極東で採つて行つた政策は、かなり違つた方向を辿つて行つた。即ち英國は、自家の政治上、經濟上の利益を追及する段になると、假借する所がなかつたに反し、米國は他の得たる通商上の利益に均霑するだけで満足して、絶えて政治上、領土上の野心を懷いてゐる風がなかつたことであつた。米國の極東政策は、久しきに亙つて歐洲列強の侵略的なるとは、その趣を異にし、大概、和平的であつた。

(三) 極西への隸従か、將た極東自の解放的努力か

斯様にして鎖國の極東は俄に解放されて、支那も日本も、共に色々の點で歐米列國と繋ぎ合される新體制の下に立つことになつた。所が、この關係は、甚だ不對等なもので、司法權と關稅權とはそれ／＼少からぬ制限を加へられ、支那も日本も、條約によつて彼等の國土に來住してゐる外人をば自國裁判權の支配の下に

置くことが出来ず、關稅事項も亦、一切當該外國と協定の上でとりきめを要することになつて居り、いかにも自卑自屈の甚しきものであつた。尤もこれは、習俗の異なる極東では、甚しく不都合なものとは考へられて居なかつた節もあつた。蓋し封建の日本では、夙に屬人主義の法制が行はれて居たし、外人を夷狄視して之と齒するを欲しなかつた支那は、從來、彼の海港に行はれし諸外國民との些かばかりの貿易をも、朝貢國の貢進を以て目した習はしからまだ脱しきれず、貿易をば、中華帝國が夷狄に與ふる一種の恩典なりとする思向で少からず動かされて居たからである。然るに、國民大衆の漫然たる敵愾心と憎外心とから、折角の條約も、實行難に陥り、外人をして益々その利權を擴張するの口實を加へしめ、終には、彼等に許されたる特權をして殆んど言語を絶する不對等、不合理なるものたらしむるに至つた。歐米人の中には、國際法は、白人だけのもので、黄色人種には適用されぬ代ものだなどと嘯くものすらあつたほどである。かかれればこれからの極東の問題は、要するに、彼が果して極西への此隸従から脱して、極東それ自の獨立と面目とを完うすることが出来るだらうか否かのそれに外ならなかつた。

第十四節 澎湃たる歐羅巴の國民運動

(一) 歐羅巴の國民運動とは如何

我等は、しばらく歐羅巴に還つて啓蒙文化の歐大陸諸國に及ぼした大きな影響に一瞥を投ぜねばならぬ。

國民主義若くは民族主義の思想及び運動は、全く現代の産物である。古代の國家は、原則として、唯一の人民からのみ構成されて居た。言語や、宗教や、習俗の違ふ他の民族も、その國內に居らぬことはないけれども、それは公民としてではない。奴隸としてか、左様でなければ、外國人としてかであつて、この場合、彼等は、全く權利の主體としては取扱はれてゐないのである。當時に在ては、我々が今日、理解する様な意味の民族と云ふものはない。その存するは、征服者と被征服者との二つあるのみである。中世から近世への過渡期となつて、往年、羅馬の統一的帝國が瓦解を遂げたりし如くに、基督教の世界的教會も、破綻を告げ、國家も、教會もひとしく王朝化された。但しかやうにして起つて來た國家及び教會が、民族若くは國民を旨とするそれにおき換へらるる様になつたのは、啓蒙文化この方の新現象に屬するのである。

英國に發祥した此新文化に假に啓蒙の名を冠せしめたけれども、これは、實は十八世紀の啓蒙時代を色どる合理主義とは源を異にするものであり、英人の既得の權利利益を擁護し、その利用厚生を謀らうと云ふ飽くまでも英國的實利的な産物なのである。率先して産業を革命し世界の海上からは一切の競争者を驅除し、之をば完全に我が制下に齎すことにより、己の貨物をば、どこへでも自在に押し賣ると云ふ商工業立國の當時の英人の觀念には、個人と世界との存するのみである。彼には新なる市場を供給し、その顧客となつてくれる個人と、か様な個人から成つてゐる大きな海商世界とがあるのみなのである。彼は海でのかやうな自由を獲得するために、對岸の歐洲大陸に利害の扞格する多くの國を認め、之を利用するけれど、彼等も、實は

等しく、彼が貨物の需用者たり、顧客たらぬはないのである。されば、嶋帝國から見た世界には、古代羅馬人の彼の當時の世界を見た様に、差別的な國民なるものは存しなかつたと言つても宜い位のものであつた。實際、英人は、國民思想をば、彼等の最得意に唱道する個人的自由とは、兩立し得ないものと考へて居たのである。

けれども、此種の解放思想、個人思想も、一度、嶋國から大陸にうつされ、佛國に革命の波瀾を捲き起すとなると、佛人は「出生及び生存に於て自由及び平等の權利を有する人間」の背後に「全主權の淵源たる國民」なるものを發見せねばならなかつた。佛國の一婦人記者は、一八一〇年に於て、早くも民族なるものを定義して「すべての國は、同一の言語を用ひ、同一の風俗習慣を有し、從て民族的連絡の意識を有する一の民族によつて構成せられねばならぬ」と言つたのである。かかれば、産業上の革命が大陸の諸國に蔓延し、同時に民主思想が宣傳されて行くと、民族思想も、亦、堅く之と結びついて、到る處に解放脱縛の腥き運動を捲き起したのである。これ實に第十九世紀以降の現代を最も特色づけるものである。

(二) 佛國中心の時代

歐羅巴近世の戰國時代では、歐大陸に於ける政治上の中心は、マドリッド若くはウィーンにあつたが、ハプスブルグの勢傾いてよりは、その地位は巴里に轉じ、巴里否、ウエルサイユに於けるブルボンの驕奢を極めた王廷生活は、各國王朝の等しく景仰する所だつたのである。この後、佛國の王朝にも、降替あり、ボナ

パルトの巴里は、ブルボンのウエルサイユに取つて代つたのであるが、十九世紀の初年、ウィーンは、再、その歴史的の權威を恢復して、これから一世代にわたる反動時代に君臨したのである。しかしながら、ウィーンの歐洲に重きをなししは、王朝政治の名残としての外の何物でもなく、貴族官僚は、已に民心を失して、國民大衆の利益を外にして政治を行ふことの出來ぬ新しい時勢となり替つて居た。從て此意味に於て、曾ては、大革命の本場であつた巴里は、相變らず、最も畏るべき革命の爐床をなして居り、反動的政治擊滅の火の手は、いつもここから發せられて、其都度、全歐羅巴を震撼したのである。

一 七月革命

一八一五年の歐羅巴では、憲法政治を採用し、その國民をして曲りなりにも政治に參與せしめてゐるものは、大國で英佛の二國、小國では瑞西、ネーデルランド、瑞典の三國あるのみであつた。更に又之を民族主義の見地より見ると、英國には、蘇格蘭、愛蘭土の兩異民族は居るが、前者は、一七〇七年、後者は、一八〇一年を以て、英蘭土と合同し、その議會は、ウエストミンスターに統一され、合衆王國と云ふ大同團結が出来て居たのである。佛國はどうかと云ふに、これは、歐洲大國の中では、民族的のわづらひを國內に持つて居ない殆んど唯一の國である。その國境外には、佛語を口にする民族がまだ多少居らぬことはないけれども、國內では、少數のバスク人を除き、一人の異語民族を見ないのである。かかれば、佛國內でも、民族的不滿の認むべきなく、そのこれあるは、純乎民主的のものに過ぎなかつた。ブルボン復古王政の反動政治に

對して反省を求め、之をして選舉權を擴張して眞正の輿論政治に徹せしめようと云ふことの外にはなかつたのである。

一八三〇年の七月に巴里に勃發してその王朝を倒した革命は、か様な性質のものであつた。その響きは、中々大きく、まだ、憲法のない國では、憲法要求の運動を起さしたし、又、有力な國に壓迫されて苦んでゐる少數民族に對しては、民族的の解放なり、統一なりを求むる運動を起さした。但し前の場合、機未だ熟せずしてか、その効果的なるは少なかつたし、又後者にあつても、纔にネーデルランド王國から白耳義が解放され得た事實があつた位のもので、波蘭士民族の獨立運動などは、全く慘敗に終つたのである。

二 二月革命

I 二月革命と佛國

憲法を發布しようとするまいとそれは各國內政上の問題で、外國のあづかる所ではない筈だが、神聖同盟の所謂歐洲協調は、歐羅巴の現状紛更は、斷じて容赦が出来ぬと云ふ建前で、各國の民主運動にまでも干渉した。しかし反動諸國の結合がいかに堅固でも、それは力の乏しい西班牙とか伊太利の諸國とかの場合なら格別、佛國の様な大國家大國民を相手にするととなると、決してさう手ぎわよくばかりは行かぬことは、第一次共和政當時、列強が干渉でさんざん味噌をつけた苦い經驗を負うてゐる事實を見てもわかることだ。まして大革命からもう四十年近くも經つてゐる七月革命の當時になると、佛國民の力は著しく伸びてゐる。従つて

輿論が結束して現状の打破を要求するとなると、革命は僅々三日にして成功し、その疾風迅雷の勢は、流石の反動列強をして策を施すに所なからしめたのである。

しかしこれは、民主運動に付ての話で、民族運動の方になると、問題が中々込み入つて来るから、それはハプスブルグ、ロマノフ、オスマンの諸君主國內に於ける如き解放運動でも、若くは伊太利や獨逸に於て見らるる統一のそれでも、容易に外國との摩擦を起し、それから力強い干渉を促して事態を紛糾に赴かしむる危険性が最も多いのである。さうなると並大抵の民族では、堅固な反動的協調にはとても齒が立たぬから、歐羅巴を通ずる大動亂でも起つて、強大な王朝や、王朝の威光を籍りて跋扈して來た民族自が大打撃でも被らない限り、目的達成の見込がないのである。

然るに、歐羅巴も七月革命の時から見れば更に二十年近くも經過するととなると、産業革命は到る處に進展して第三階級のより以上の擡頭を促してゐるし、教育の普及や新聞雜誌の流布で、民衆も、政治的に著しく目を開かされて來てゐる。佛國では、社會主義を叫び、共和を唱ふるものさへ尠くなく、一八一五年の選舉權の直接國稅三百フランが七月革命では二百フランに低下されてゐるけれども、民衆はなほも之が徹底的改正を求めて止まぬのである。さうして一八四八年二月、巴里に起つた暴動で、王政は又もや覆され、一院制の共和政は建てられたが、共和の第一回の經驗から半世紀もたつて居らぬ佛國民は、まだ政治を論理的にのみ取り扱ふ癖から抜けきれず、國內、徒に騒然たる折からに、忽にして帝政の復辟は盡せられ、これがまん

まとも圖に中り、折角の革命さわざも、ポナバルト王朝をして徒に漁夫の利を占めしむるに終つたのである。

II 二月革命と伊太利及び獨逸

歐州民族の分布



トルコ	スラブ	アラブ	バルカン	ケルト	フィン	ラテン	バルト	ゲルマン	インド	シベリア	その他
トルコ	スラブ	アラブ	バルカン	ケルト	フィン	ラテン	バルト	ゲルマン	インド	シベリア	その他

佛國の第二帝政は、第一帝政同斷、新王朝護持のためにも、花々しい手柄を立てて、新なる臣民の謳歌を買はねばならなかつた。そこで彼は機を窺つて先づ事を露國と構へ、英國と結んで兵をクリムに出し、莫斯科遠征の往年の怨に報ゐた。此一戦でこれまで曲りなりにも大陸列強を繋いで居た所謂協調は、全く破れてしまひ、歐羅巴の國家組織は、潰亂に歸した。次で佛國の狙つたものは、ブルボン王朝の宿敵ハプスブルグ皇國に打撃を加へることであつた。二月革命が巴里に勃發すると、二句ならずして火の手はウイーンにも揚り、反動政治の總本山は忽にして顛され、之に伴つてこれまで奥國が尤も幅をきかして居た伊太利と獨逸とも、蜂の巢を突ついた

様な混亂状態に陥つた。そこで、此有様を見た第二帝政は、不幸な被壓抑民族に同情を吝まぬ旨を聲明したが、しかし、此際に於ける第二帝政の意圖は、實際には、さう單純なものではなかつた。民族運動は原則として彼の同情する所だとは云ふものの、それは奥太利の鼻を拉いでやる位の程度までの所であつて、伊太利なり、獨逸なりが、佛國の境にえらい壓力を及ぼす様な大きな國となることは、彼の極力、回避せねばならぬ所たるは言ふまでもなかつた。彼の眞の心底を割つて語るならば、伊なり獨なりの統一運動のどさくさまぎれに、火事場泥棒を稼がう位の事に過ぎなかつたのである。

獨伊統一運動の前途には、中々の難關が横つて居た。獨逸聯邦の三十九ヶ國の中で、統一運動に牛耳を握り得べき實力を持つてゐたものは、奥普の二國だが、此場合、若し多數の異民族が住んでゐる奥國を中心として統一をするとなれば、聯邦は、領土的には大きくはならうが、民族的立場から言へば、いかにも雜駁な、甚だ緩い組織とならざるを得ぬ。之に反して普國を中心とすることになれば、非獨逸的の民族を含むことの少くなる結果、小ぢんまりした、より多く獨逸的な新國家が誕生することになるのである。普魯西派の國史家の最も盛に鼓吹したのは後者の方で、獨逸民族の中でも心あるものは、此方を支持した。即、この場合、奥中心の大獨逸主義と、普中心の小獨逸主義との對立となる譯なのである。

翻つて伊太利では、肩を並べてゐる圓栗の八ヶ國の大部分は、外國、殊に奥國の勢力の下にあり、ここで外國的でないものは、北方の撒尼亞王國と羅馬法皇廳とだけだつた。その中、法皇廳は、民族を超越した國

際的なものだから、之をば取り除くとなれば、國民的の王朝を戴いてゐる唯一つの伊太利的國家である、撒國を中心とするより外に、統一完遂の見込がないのである。

之によつて之を見れば、獨伊何れの場合でも、奥國は、いつまでも、民族的統一の一番の邪魔者となつてゐる譯である。然るに恰もよし、二月革命で奥國內の諸民族が一齊に蜂起し、匈牙利のマジアル人などは、率先して共和國を建てると云ふ騒ぎとなり、ウィーン政府は、狼狽の極、露軍の來援を求めて辛うじて之を平定したる弱體が暴露したので、撒國と普國とは得たり賢しと、奥國に對し兵を擧げたのであるが、撒國は不幸にして戰に敗れたし、普國は、一八五〇年を以て外交的に屈辱を余儀なくされ、計畫は何れも慘敗に歸した。

奥國、衰へたりと雖、まだ歐洲の大國である。之を撃ちのめすためには、大なる外國の援助を待つか、さうでなければ、徐に我が力を養つて時を待つより外ない。撒國は前策を探り、利を以て野心沸くが如き第二帝政を誘ひ、一八五九年、之と共に先づ奥國に一撃を加へ、次で七年の後には、普國と結び、再度の打撃を奥太利に與ふることによつて略々伊太利の統一を完成した。後策により、一意専心、軍備を充實し、自力を培養して、獨力、問題の解決に邁往したものは、勇悍な普國であつた。

(三) 獨逸の歐羅巴大陸制覇の時代

クリム役後、一八五六年、巴里に國際會議は召集せられ、第二帝政は、再び歐洲政局の中心となつた。こ

れから三年後、奥國は、又々打撃を被り、ウィーンの退却は争はれなかつたから、歐洲外交界の形勢は、一層、佛國に有利となつたのである。然るに一八五〇年の屈辱の方、汲々としてその力を涵養し、對奥戰に備ふることを怠らざりし普國が、一八六六年、愈々意を決して奥國と争ふことになると、戰役は僅々七週日にしてかたづき、佛國が干渉の陰謀を旋らす餘地すらない中に、奥國は獨逸聯邦外に驅除せられ、普國を中心とする北獨逸の聯邦は組織された。是に於て奥國は、彼の國家組織に一大變改を加へざるべからざるに至り、翌年、新憲法を制定して獨逸民族を主治民族とする奥太利帝國と、マジアル民族によつて統制せらるる匈牙利王國との二國から成る實質的聯合に改むることにし、外、藏、軍の三相から成る行政府と、奥匈の兩議會の代表員をしてウィーンとブダペストとに交替的に會議せしむる立法院とから成る中央政府を設くることになつた。

か様な狀勢の下に、大陸の外交上の重心は、巴里に定着すべきか、將た伯林に移動すべきかは、興味ある問題となつたが、一八七〇年、普、佛の爭覇戰は、結局、善謀善戰の普國の勝利に歸し、翌年、北獨逸聯邦は、南獨逸の聯邦と合同し、普國を盟主とする獨逸の民族的國家は竣成したのである。戰後、幾もなくして獨逸は伯林に露奥の兩君主を招請し、歐洲の現状の保持を約する、所謂、三帝同盟を結んだが、一八七八年には、土耳其處分に關する一大國際會議を、更に七年の後にも、阿弗利加の分割に關する會議を伯林に開催するに至つた。獨逸を中心とする新なる國家體系の時代は、かくて歐羅巴大陸に發展して行つたのである。

第十五節 新月帝國に於ける解放運動

(一) 基督教世界と回教世界

さしも喧しかりし埃國の解放運動も、獨逸マジール兩民族並立と云ふ二元的解決を以て一段落を告げたので、解放問題で残つてゐるのは、今は露國と土耳其とのそれであつた。これは、兩國の國內問題ではあるが、亦同時にスラブ人と回教徒たる土耳其人との纏綿せる外交問題でもある。そこで、此處に少しく基督教界と回教界との關係に付、鳥瞰を試むるの要がある。

東大陸の北地、南地をば除き、その中間の東西にわたつて蔓つてゐる回教世界は、言はば極東と極西、即、東洋と西洋とを繋ぐものである。従つて極西から見た彼は、極東に對する一の前衛をなしてゐるから、歐人が往々にして此地域に命ずるに、中東又は近東の名を以てする所以の偶然ならざるを知るのである。極西からは最も隔絶してゐる極東の支那、日本が、鎖國の禁を釋いたのは、今から百年そこそこに過ぎず、之をば、兩間交渉の始まりから數へるとしても四百年この方のことに止まるのであるが、回教世界の西洋諸國に於けるや、實に一千數百年の永い沿革を持つてゐるのである。回教會と基督教會とは互に不俱戴天の存在を以て目し合つてゐるから、假に精神的の交渉を兩間に否定するとしても、交戰的にしろ、平和的にしろ、形而下に於ける交通は、かなり久しきにわたつて行はれて居たのである。

回教界が歐羅巴とは並々ならぬ關係を持つてゐる次第は、回教界それ自らの有する特殊の事情にも因る。東西南北に支離滅裂してゐる基督教會では、國家と教會との關係について之を見ても、洵に多殊多様であつて、教國制キョウコクセイを採れるあり、國教制に止まるあり、公認教制まで進んでゐるもあり、將た宗教を以て全く私事シゴトに過ぎぬとして國家が一切、干渉しない制なるもあつて、歐羅巴の各國は、各々その好む所に従つてゐるのであるが、回教界では、唯一の教國制が膠柱されてゐるばかりである。此處では、その人民は、一の回教信者たるのみで、民族的の差別はその間に認識されて居ない。同一の信者でさへあれば、それは全く平等な公民であつて、私權と公權とを完全に享有し、結婚し、財産を所有贈遺し、文武の官員に任ずることが出来るのである。此處には、歐米の先進國に見る様な産業の發達がないから、貧富の懸隔などと云ふほどのものもなく、其社會は、多くの關係から見ても最民主的である。回教から見た外人は、すべて回教に歸依しない人々ばかりなのであるが、これにも二種類の別がある。回教聖典コトワシを採りはせぬが、回教徒の劍に服して其臣民となつてゐる輩と、どこまでも降服を肯んじない連中とがそれである。此第二種の人民は回教界の敵で、此等のものに對しては、永遠の聖戰セイセンが宣告されてゐるのである。回教國の臣民となつた異教徒は、改宗して回教徒とならぬ限り、一切、公民權を賦與されない。回教は亞細亞、阿弗利加方面では、基督教の及びもない大きな傳道力を顯し、到る處に弘まつてゐるけれども、土耳其の様に基督教の世界に侵入してその領土を征服した國には、自然に澤山の異教徒を國內に有する譯である。これ等の輩に對しては、土耳其政府は、その信

仰、言語、教育の自由を許し、或程度まで課税権すらも認めてゐるから、かう云ふ連中は、その各々の教會を中心として、それ／＼一種の自治の生活を營んでゐる。希臘人、塞比亞人、羅馬人、勃牙利人、猶太人、アルメニア人は、皆かくして回教國內に基督教なり猶太教なりの、それ／＼の教民生活を追及してゐるのである。教國主義を立國の精神とし、教會が國家、社會の土臺となつてゐる土耳其では、かう云ふ寛大な、寧ろ無頓著と云つて然るべき制度をも少しも異としなかつた譯である。天生の武人とも云つべき土耳其人は、彼等の賤める一切の産業をば、これ等の異教徒に任し、己はその貢租によつて左團扇の生活を追ふことに満足したのである。

土耳其國內には、この外に條約上の權利によつて居留し、營業せる外國人も澤山に居る。回教に歸依しないものは、永遠に宣戰されてゐる敵の世界にあり、二つのもの間には原則としては交通がない筈だが、しかしそれは宗教的關係に於てのみであつて、政治的、經濟的にはさうではない。土耳其以前の回教國から、及び東羅馬帝國時代からの傳統があつて、それが相變らず、土耳其と基督教の諸國とを繋ぎ合して居るのである。これ等の約束は、中古の公用語たりし伊太利語でしるされてあつたので、之をば伊語でカピツラチオンと呼んだが、これは、本來、東羅馬帝國ならば、西歐の諸國に對し、又回教國ならば、基督教國に對し、恩惠的に許されたものだつたため、法權でも、稅權でも、居住權その他に付ても、極めて鷹揚な、不對等、片務的の規定を大まかに許してあつたのである。土耳其は、一四五三年の君府占領當時から、兼て君府

の一地區を居留地として與へられ、これに居住して貿易を營んで居たウエネチア人、ジェノア人に向て、是まで通り、その東羅馬帝國以來の特典を繼續することを許したのであるが、しかし、かやうな條約の最も代表的なるは、一五三五年の土佛通商條約が始まりである。佛國は、此年、土耳其と同盟條約を結んだ關係で、幾多の特權を許され、これから後、これが度々擴張され、列國、亦、之に均霑して二十世紀の現代に及んだのである。

(二) 所謂近東問題の發展

回教國が與へる恩典だから、都合によつては撤回も自由だ位に氣輕に考へられて居た條約も、次第に正式の重々しいものとなり、終には抜き差しもなくなつてしまつた。それも、土耳其政府の威張りのきく間はまだよかつたが、一六八三年、ウィーンの包圍で失敗し、所謂新軍の鼎の輕重が問はれる様になると、もう潮の引き時となり、彼の領土は、北方の強國のために頻に奪略されるばかりになつた。亞細亞領内の異教徒の數は言ふに足らぬが、全人口の四分の三がこれで占められてゐる歐領では、啓蒙文化が歐羅巴を靡かす時代になると、それに動かされた異教徒が動搖を初むるに至つたと云ふことは、洵に止むを得ない勢であつた。

既に十八世紀の間に、露國は黒海の沿岸を土耳其から奪つたし、奥國は又匈牙利を奪回した。兩大國の政策は、土耳其を犠牲に供して南に伸ぶると云ふ點で相一致したが、東地中海上に大なる政治上、經濟上の利

益を持つて居た佛英は、之を懼れ、往々にして土耳其保全の政策を採つた。十字軍以來、東地中海の側岸に少からぬ關心を持つてゐるし、土耳其の最初の同盟國でもある佛國は、埃及の去就にも大なる注意を拂つて居たが、海外の帝國と本國とを繋ぐ交通上の要路として地中海を重視せる英國は、北方の強國の之を脅すを坐視し得ない事情を持つて居た。それ故、英佛は、地中海上に於て相争ふ地位に立つては居たが、それ以上に北方の強國の南下が恐ろしかつたから、彼等は、往々にして此點に於て協力した。従て近東問題の中心點をなすものは、結局は、露英の争闘に外ならなかつた。土耳其の壓制政治は、英國自由黨の唾棄して止まぬ所だつたけれども、外交政略の上では、保守黨はもとより、自由黨も、露國に反對であるがために、却て土耳其の擁護に傾いた。

かくて羅典亞米利加が解放され、神聖同盟の三大君主國も、遠い大西洋のかなたままでは力が及ばぬとなると、同じ歐羅巴の中でも、彼等の干渉の埒外にありとされた新月帝國內に、基督教民族の猛烈な獨立の運動がもち上つたのである。率先して叛旗を翻したものは希臘人で、列國、亦、之に干渉したため、戦局は頗る紛糾したが、結局、一八二九年に至り、希臘は、その獨立を許され、塞比亞と羅馬尼とは、交々基督教知事の支配の下に立つこととなつた。しかし、獨立した希臘はその民族的統一を一層に充實したいし、塞、羅は、完全な獨立を得たいし、勃牙利人も同様の解放を勝ち得たいため、巴爾幹の政局は、中々、靜まらぬ。對希臘に功勞ありし埃及が土帝に乞うて領土をシリア方面に擴張せんとするに及んで、露國は、窮地に立て

る土廷を助けて、一時、之と保護條約を結ぶに成功し、埃及を後見した佛國と對峙したため、波瀾は又重疊したが、英國を初め列強は相結びて、一方では、佛國を制し、他の一方では、露國をしてその土耳其に對する單獨の保護權を撤せしめ、土耳其をば、列國共同の保障下におくことにして落著さした。それは實に一八四一年のことである。

佛露を抑へた英國は、かくて外交上の勝利を謳歌し得たのではあるが、東方問題に關する限り、常に第一の推進力となつて働いたものは露國で、十九世紀の間に、彼がかうしたさわぎを歐羅巴の政局に捲き起したことは、少くとも二回に及んでゐるのである。

獨裁政治と正教信仰と民族主義との三位一體をその國是としてゐる露國は、國家と教會との關係に付て見るならば、國教制と云はんよりも、寧ろ土耳其に近い國教制の國家と云ふべきで、宗教的には正教、民族的には大露西亞民族を中心とし、之を總ぶるにロマノフ王朝の獨裁權を以てしようとするものである。けれども、此國にも大革命の方、啓蒙運動がはいり込み、佛國かぶれの若い士官連が、突如、起した所謂十二月黨の共和騒動などもあつて、爾來、急進思想は、非常な勢で社會的には中流層を缺いてゐると云はるべき此國の知識階級の間にも弘まつて行き、此保守、急進兩翼の衝突は、露國の國家社會を崩壊に導くに至るべきやも知らぬ危険を胎んで居た。そこで此内憂を外患に轉回せしめて活路を切り拓くべく唱へ出されたるやに思惟せらるるものは、汎スラブ主義なるものであつた。これは民族的にはスラブであり、宗教的には又正教の

同信である巴爾幹の基督教民族を土耳其の暴政から救ひ出すべき重責は、スラブの宗族たる露人の負ふ所であらう。なければならぬと唱ふるもので、一八五三年のクリム役から二十五年後の露土戦役の頃になると、これが滔々たる露國の輿論たるに至つたのである。此際、外戦の權道が内政上の禍機を回避するに全然、役立ち得なかつたとは斷言されぬかも知らぬが、露國は、いつも列強に遮られてその膨脹的野心を十分に満足させることは出来なかつた。しかし兎に角、土耳其の基督教民族はアルメニア人を除き、悉く解放され、之と同時に近東問題も新なる局面に進出することになつた。これまでの所、主として英佛露の逐鹿場だつた近東は、一八七八年の伯林公會この方、獨逸と云ふ新なる選手をも加へることになつたから、爾來、歐洲の政局は、之により更に錯綜せる關係を展開することになつた。

第四章 帝國主義の時代

第十六節 歐羅巴の新均勢

(一) 改造された新歐羅巴

一 歐羅巴の六大強國

一八七八年を以て歐羅巴に於ける民族運動は一段落を告げたと言つて良い。當時、米國は南北戦役後の、

日本は又皇政復古後の國內改造に忙殺されて居て、その將來のこと濫りに豫測を許さなかつたから、世界歴史の先頭に立つて之を指導してゐるものは、依然として歐羅巴であつた。改造後の歐羅巴で第一線に立つてゐる大國は六つであつたが、これ等はその實力の上で便利上、英佛露獨の甲級、及び、奥伊の乙級に二分される。

甲級の四國では、民主的な英佛と反動的な露獨とが區別されるが、十九世紀の最後の三十年間、英國では保守黨が全盛を極めて居た。獨逸と戦ひ敗れて第三共和政を樹立した佛國では、一八七九年、やつと君主政逆轉の危機を脱し、これから後は、又、軍閥や排猶太人主義者や僧侶黨の保守的、武斷的勢力を破壊し、共和政體を確立すべく努力しつゝあつた。反動陣の統帥たる露國は、露土戦役後、尙ほ其運動を止めず、終には皇帝までも弑害した兇暴な社會革命黨(民意黨)を勦滅のため大童で、その目的は略々達せられたし、國家中、國家を立つるに等しとなした加特力教會に對する所謂文化闘争でこそは失敗したけれども、帝政獨逸の社會黨鎮壓策は、著々として追及せられ、之と同時に一八八三年乃至八九年、その思慮深き疾病、傷害並に養老及び羸弱に關する勞働保險の一大法系は、すべての國に率先して此國に完成された。乙級國家の奥國は、強國中、植民地を有たない唯一の國たることとて、伯林條約によつて新に彼に統治を委任されたボスニア、ヘルツェゴビナの二州への膨脹と、その經綸とによつてその民族的内紛を緩和する機會に供さうとした。新なる伊太利王國は、内に一の民族患をも有しないが、一八七〇年の羅馬府占領のため甚しく法皇

應から怨まれてゐる。國民は未回収地イムレアシチヂョの回收を熱望してゐるのであるが、奥太利との同盟で、これは封ぜられてしまつてゐる。政界では、左黨が次第に勢力を得つつあり、之により選舉權は擴張されたが、新王國の前途は、必ずしも甚だ好望とは云へなかつた。

二 歐羅巴の諸暗礁

かやうにして歐洲の二十ヶ國は、西歐に英佛あり、中歐に獨逸伊の三國あり、更に東歐では北に露、南に土耳其あり、その間に中小の國々を介在せしめてゐるのである。中小と云つたが、實は中位の國には一の西班牙あるのみで、大國を除くと、領土的にも人口的にも皆小國ばかりなのである。さうしてそれから此方と云ふもの、歐羅巴の政局は急に著しく平穩になつたのであるが、それは民族問題の片がついてしまつて、最早、平和を脅す危険がなくなつたからだと云ふ譯ではない。民族の解放にも、分化バチユカラズム的になると分立的セパラチズムなるとあり、分立に徹底するなら理想的だけれども、言語や、宗教や、教育や、行政の點でしばらく或程度の自由を得るだけで満足し、後日を待たうと云ふのもあるから、左様にして分化を許されてゐる民族は、更に進んで分立の機會を攫まうとするであらうし、已に分立の目的を達してゐるものでも、もつと之を充實完成しようとするであらうから、ちつとも安心はならぬのである。即、現に佛國はアルサス・ローレンの恢復を求めてゐる。伊太利や獨逸の愛國者は、まだ回収されてない彼等の國境外の同民族を回収しようと呼んでゐる。露奥及び土耳其の諸民族のまだ解放されないものは、頻にこれが機會を狙つてゐる。更に土耳其の領海であ

るボスフォルス、ダルダネル兩海峡開鎖の問題もある。そこで、列強は、互に深く相警めつつ、假りにもかやうな異圖から戦亂が醸され、自國破綻の緒となることのないやうにと、利害の相一致せるものと結んで、萬一に備へることを怠らなかつたのである。

(二) 兩大同盟系統の成立

一 三國同盟

若し歐羅巴の十六世紀を西班牙人のもの、十七世紀を佛人、十八世紀乃至十九世紀前半期を英人のものとするならば、十九世紀後半以降は、正に獨人の天下であつたと云つても宜しいであらう。それほど統一後の獨逸の發展はすばらしかつた。

元氣一杯な獨逸は、外交上でも多く發意を採り、復讐の機を狙つてゐる佛國を孤立せしめるために、己に味方する強國の結合を作つて我が外交上の地位を堅めて行つた。國と國との結合は第三國に對する共同の危険によつて促されるものではあるが、その結合が持續的であることは、外交上の状態ばかりではない、關係國相互の社會事情や國民思想のいかに關係することが尠くないのである。東方の三大君主國は、民族的の關係から云つても、亦政治思想の上から云つても、共鳴する所が多いので、獨逸は、統一後、いち早くも獨逸露奥三帝の同盟なるものを結んだ譯である。これは露土戦役で破綻を告げたが、戦後、獨逸は奥國が露國との對抗上、わけても巴爾幹に於ける政策上、獨逸の援助を要すること切なる事情を知り、一八七九年、機敏

にも之と同盟條約を結ぶことになつた。これは、露國から撃たれた時には互に援け合ふが、露國以外の國から伐たれば中立すべきを約するものであつた。所がこれから三年の後になると、伊太利、更にその翌年には、羅馬尼も、之に加はるることになり、かくして、獨逸伊の結合を中心とする三國同盟の一大體系が出来上つたのである。伊太利は、彼の宿望のチュニジアを佛國が先取したのが憤懣に堪へずして、羅馬尼は又、曩日の露土戦役に露國に説かれて之と共に土耳其を伐つたに拘らず、戦後、彼の期しつゝありしベッサラビアを露國にとられたるに平ならずして、それぞれかやうな舉に出たのであつた。伊國も羅馬國も、共にその未回収地の回収を期する點で奥國とは兩立し得ないものである筈なのに、國民の一時の興奮によつて輕々しく外交上の政策を決した結果、彼等はこれから、しばらく自縛自縛の地位に陥りたりしは、一九一四年、大戦の勃發となると、兩國がいづれも同盟條約を裏切り、中立を宣言するに至りたりし事情を見ても知るべきである。

二 二國同盟

獨逸の權略、功を奏して、佛國は永く結ぶに友なき孤立の地位を嘆たざるを得なかつた。三國同盟に對抗し得るだけの有力な味方を物色するとすると、彼は英國か露國かに向ふより外ないのであるが、英國は、歐大陸の同盟系統から超然たる、縛られない地位にありたいと冀つてゐるものだし、それに一八八二年の埃及事件で、佛國と意見を異にし、兵をさしむけて之を占領してからは、英佛の兩國は甚しく不和になつてゐる。

そこで佛國としては、露國の外にとりつく嶋がない譯なのに、老獪な獨逸は、王朝的緣故の濃い所の、且又、社會黨の兇行に對して同病相憫む事情を多分に持つてゐる露國をば手ばなすまいと、一八八一年に、取りあへず、三帝同盟を復活し、三年の後、再新したが、期が満つると、今度は、與國たる奥國には内所で、更に中立の密約を露國と結んだのである。これは奥國が無挑發なるに露國に攻撃を加へた場合、獨逸は奥國を赴援の義務を負はない代りに、同様の事情で獨逸が佛國から伐たれた時、露國も佛國を助けないことを約し合つた随分あぶないカラクリなのであつた。

露佛の親近が妨げられたのは、獨逸のかやうなたくらみの精ばかりでもなかつた。獨裁國の露國、歐羅巴では土耳其及び黒山國と、三國だけ取り残されてまだ憲法を持つて居ない露國と、革命の本場と考へられてゐる佛國とが結ぶと云ふことは、水と油とを交ぜる様なものとして、どちらの方からも躊躇されたためでもあつた。しかし、佛國としては、最早、そんな事に拘泥していつまでも索居を續けては居られない。恰もよし露國に、これまで獨逸で求めて居た公債を佛國の市場で借り換へるの議あり、これが巴里で歓迎されたのが縁となり、一八九一年、露佛は終に協商を結び、これが三年の後には立派な同盟條約となり、獨逸若くは獨逸の支持を得たる伊太利が佛國を伐つ時には、露國は直に佛國を赴援するが、露國が獨逸一國、若くは獨逸の支持を得たる奥國から伐たれる時には、佛國は直に露國を援助すると約束したのである。かくて三國同盟に對する二國同盟による均勢の成立となり、歐羅巴の平和はあぶなげながら保たるを得たのである。

第十七節 國民主義から帝國主義へ

(一) 外延的膨脹の要求

民族立國による改造後の新歐羅巴では、二つの同盟系統の對立で平和が保たれ得る様になつたとは云へ、すべての國の國力の發達は、同じ程度とは云へぬし、國民の意氣にも大なる違ひがあるから、國際狀勢の移動は、時の進展に伴うて蓋し避けがたい所なのである。何よりも著しいのは、進歩的の國家に見らるる産業の比類なき發展だ。生産の方法が變つてゐるし、活動の舞臺が廣くなつてゐるし、企業の規模が大きくなつてゐる。すべての事業はひどく複雑になつて來てゐる。所謂、經濟は世界的になつてゐるから、かやうな時世に於て、事業を經營して著々成功して行くためには、その企業は、大資本によつて行はれて居らねばならぬし、勿論、諸外國の事情は、十分に研究されて居らねばならぬ。そこで先進の商工業國は、皆これ等の點に於て人後に落ちぬ様、獨逸の如きは、一八九八年に於て早くも商科大學を建てたし、物事がとかく守舊的だと云ふ非難のある英國ですら、そのパーミンナム大學では、一九〇二年には、商學部を新設すると云ふ有様であつた。英國では、一八七〇年、時の自由黨内閣が行つた普通教育擴張法の效果は、十九世紀の末には、その社會の上に十二分に現れて來たのである。

か様に産業が發達して來ると、それだけ人間にも生活上の餘裕が與へられ、その増加も多々益々辨ぜられ様になる。それに社會の改良、保健や衛生の進歩の御蔭で死亡率も減少するから、その結果、十九世紀の間に歐羅巴の人口は實に三倍強になつたのである。

富も人口もすべてが生々發展して止まぬから、そこで貨物は市場を求め、人間は彼を歓迎してくれる國なり植民地なりを求めて、所謂、外延的に膨脹せねばならなくなる。獨逸や米國の貨物は、かくして英國の市場にどしどし侵入して行つたから、自由貿易國の英國にも、一九〇三年には、關稅改革の叫び聲が擧げらるるに至つた。南北戰役後の米國は、拓くべき土地は涯りなくて人手が足らぬのみなので、旺に移民を歓迎したから白人と云はず、黃人と云はず、移民の流れは物凄い勢でここに漲つて行つた。それも十九世紀の末になると、移民の種子が變つて、獨逸人や愛蘭人の潮は止まり、物心兩方の意味で之に劣つてゐると見做されてゐる東歐の斯拉ブ人や、猶太人や伊太利人が之に代つて來た。

かくて資源をとり入れるためにも、ありあまる人間を植へるためにも、自國の權力の下にある植民地が望ましいのであるが、それには國そのものが確乎たる國是、國策を持つてとりかかるでなければ、目的の達成は望まれない。土地獲得の競争がかやうにして熾烈を極め、どんな荒地や沙漠でも、亦、絶海の孤礁でも、血眼になつて探され、求められるに至つたのは、ぐづぐづしてゐると、經濟的、軍事的の重要地點を他國に先き取りされてしまふ虞れがあるからなのである。

(二) 内包的膨脹の主張

此苛烈な生存の競争は、十九世紀の中葉から世界を吹き捲つてゐる、進化論の影響を被つてゐること尠くないが、しかし各國はこれをば、單なる闘争のための闘争とはしないで、もつと深い精神上の要求から餘儀なくされてゐるのだと力説しようとして居る。此處に到つて問題は結局、又民族論に還ることになるが、所謂民族なるものにも、二た通りの見方がある。その一つは民族をば、自然物たる人種と同一視し、世の中に現れたるその初から、彼等には、それ／＼特定の資質が賦與されてあり、少くとも優劣の判然たるはじめが宿命的にきまつて居たのだと獨斷するのである。百年前、一佛人は、初めて人種平等論をものし、すべての人種の中で、アーリア人は、一番、すぐれてゐるが、アリア人の中では、ゲルマンは、とりわけ、優秀卓抜な民族であると強調したのである。論者の所謂ゲルマンは、今日の人種學者の云ふ北歐種で、長身、金髪、碧眼の體質で知られてゐるものである。民族をば非歴史的に考へ、先天的に與へられてゐると想像する祕密な素質ばかりを云々して、後天の色々な獲得物をばあまり顧みない彼等は、そこで自然に彼等の所謂民族的特質の具體的の現れである體質の保存長養に彼等の興味のすべてを集中し、他の民族との混血をば絶対に避けて自を純粹無雜の状態に置かうとつとめてゐる。これは、此説の特色であるが、しかしかやうな民族は、全く想像上のものに過ぎず、實際の世の中には、他の人種又は民族を一切交へないさう云ふ純粋な人種乃至民族など云ふものは存在して居ないのである。ゲルマン人の中には、少くとも、ケルト人やスラブ人の交つてゐることは否めない事實である。

與へられたる體質を特徴としてゐる民族に彼自の意志や選擇の自由を一切認めない此説は、十九世紀末に至り、獨逸帝國で大はやりとなり、その國民的の自負心や自惚をひどくおだてあげるに役立つたものであつた。大戦直後の米國の排外的な國民主義の中に説かれてゐる北歐種論も、これだし、又、獨逸の所謂「第三帝國」の極めて排外的な人種哲學も、之をその基調としてゐるものである。思ふに此説は、言はば、現在の多くの民族の間に一種の種姓カーストを唱へよう云ふものなのである。昔は猶太人や支那人や希臘人は、自分供は世界の選民だ、中華人だと誇りちらしたが、當時の世界には、彼等と並ぶほどの文明人は居なかつたから、威張られても仕方がなかつたが、獨逸の極端な北歐種論者に至つては、現代の濟々たる多くのすぐれた民族の間に、己のみの優性を主張しよう云ふものなのである。

今一つの見方は、か様な民族即人種論を排して、民族は歴史の産物に過ぎぬとするのである。一定の自然地域を住み家とし、祖先を共にし、言語や慣習を同うし、共同の歴史的運命を辿つて來た一團の民衆の、啓蒙文化に觸れて、自己意識を吹きこまれたものが、一個の民族として歴史の舞臺に登場するに至つたものと云ふのである。かかる場合、如上の具體的條件のすべてが揃うて居なければならぬとは言はぬ。其棲の國土を持つて居ないのに、猶太人は、熾烈な民族意識を頑守してゐる。異語者の寄合世帯でありながら、瑞西國民は、獨逸にも、佛國にも、伊太利にも、分解されることを欲しない。自己の祖先を忘れ、その固有の言語すらも失つて居ながら、全く系統の違つた新國語を繼受してそれでおさまつてゐる勃牙利人の様なものも

居るし、又人種的にも、言語的にも、全然、英人に同化し、祖先のことばなど殆んど忘れてしまつてゐるに拘らず、自己の民族的獨立を主張して止まざる愛蘭士人の如きものもある。現代の民族観はかやうに機械的でも宿命的でもない、自己自身の選擇のきく、所謂自決的のものである。十九世紀この方、民族の去就が人民投票の結果で度々決せられたのも、これによるものであるし、又現に文明國の間で歸化法を設けて一定の條件を具ふるものに歸化を許し、その生國や祖先や體質や習俗などは深く問はないのもこの事を證明するものである。今日の民族観はかくまで融通のきくものであるため、第一次世界大戦後の自決主義では、聊、小さな民族國家濫立の弊に墮した虞なかりしとは云へない。しかしここには種姓的の差別主義は絶対にないし、又少くとも國際生活の原則としては、國土の廣狭や人口の衆寡によつて民族に待遇上の差等をおくことはしないと云ふことになつてゐるのである。丁度、近代の啓蒙文化が個人に人格の意識を吹き込んだ様に、彼は今や各々の民族にもそれぞれ活を入れて、その個性を自覺せしめ、その長所天才を自在に發揮することに由て、共同文明の進展にそれぞれ應分に貢獻する所あらしめようとしてゐるのである。もとより、政治、外交や軍事の競争では、數量上の寡民族は衆民族には及びもないけれども、文教上の仕事になると、寡民族必ずしも質の上の小民族ではない。白耳義や瑞西の經濟上その他の活動や、スカンヂナヴィア諸民族の學問藝術上に於ける事業には、大國、衆民族をして尙、且、三舍を避けしむるものがなしとはしないのである。民族の思想が分析的、分化的に走り勝な現代の民族観に、一面、亦、大同的、綜合的の潮流も發展しつつ

あることは、見のがすべからざる現象である。教縁の汎イスラム主義や、大東亞佛教圈の如き、ウラル・アルタイ語縁の汎ツラン主義の如き、又汎スラブ主義や汎ゲルマン主義の如き、將た法縁のアングロ・サクソン世界や第三國際社會主義の如き大風呂敷は皆これである。王朝を中心とする王道政治の理想も亦然り。これ等は蓋し一として帝國主義に於ける内包的膨脹の根底たらんとせざるものはないのである。

(三) 國民的政策としての帝國主義とその軍事及び外交

一 陸軍主義及び海軍主義

今日文明列國の間では通商條約が結ばれ、之により平和な交通が何の差支もなく行はれてゐるから、有爲な國民ならその間にあつて自分の持つてゐる力を十分に伸して行ける筈で、所謂平和的浸漸が到る處で實現されて少しも奇しまれないのである。しかしながら國際の關係は猫眼も管ならず、いついかなる差支が突發してその道が妨げられるやも測り知られぬから、いかなる國でも、治に居て亂を忘れず、一旦、緩急ある場合に處するの術を怠ることは出来ないのである。

十九世紀の初からは、陸軍では普魯西は各國の模範となつて居た。彼はエナの慘憺たる敗後、これではならぬと伯林に陸軍大學を創立して、只管に戰略、戰術の研究に従ひ、その結果二回にわたる大きな統一戰役ですばらしい即決的の戰果を擧げ、陸軍に關する限り、押しも押されぬ世界的の權威たるに至つた。敗れた佛國を初め列國は、皆争うて普魯西の徵兵制を輸入し、軍隊の編制を改め、又之を擴張したから、各國

の常備する陸軍は、尨大なものとなり、それだけ財政上の負擔が中々大きくなつた。一八九九年、歐洲最大の陸軍國たる露國が自らの發意によつて常備兵額及び軍費豫算の縮減を目的とする會議を海牙に召集するに至りしは、かかる重荷をば聊かでも輕減したいと云ふ望みから出たものであつた。しかし、獨逸は八年後の第二回の會議に於ても然りし如く、常に一貫して軍縮に反對したから、所謂平和會議なるものも、その覗つた目的を達成することが出來ず、結局は繼に仲裁々判の制を定め得たに過ぎなかつた。

列強の軍費が目を追うて増大するばかりであつた譯は、十九世紀の末から彼等が新に海軍の競争にも従事するに至つたからである。今までは獨逸の陸軍主義（リクリズム）に對し、海軍では英國の一人天下たるの觀があつた。即、海軍力の順序から云ふと、英に次では佛露伊獨米と云ふことになつて居たが、英國海軍のあまりに壓倒的なるがために、諸外國民ばかりか、英國民そのものまでも、海軍の存在を動もすれば忘れがちとなつて居た。一八六六年に於ける赫々たるリッサ海戦の勝利も、大局に於て奧太利の敗北を匡救し得なかつたから、これ亦其眞意義を闡明されずに終つた。所が十九世紀の末年に至り、歐米列國の植民地に對する興味を加はつて來るし、米國海軍大學の戰史の一教官が、歴史に於ける海上權力の重要性に付て明確適切なる新學説を發表するし、更に之に續いては、黃海やマニラ灣の海戦が極東で戦はれて、驚くべき戰果を孕むに至つたので、文明列國の神經は忽にして聳動され、海軍競争の新しい頁を世界歴史の上に劃することになつた。十九世紀の大部分を通じて殆んど放棄のままに置かれてあつたといつて然るべき大英帝國の國防問題は、一

八七四年、久方ぶりで保守黨が政權を握ることになつてから、聊か建てなほしの新時代に入り、一八八九年には、英國の海軍力は、少くとも、最大の二國をその標準となすべき原則を定め、此方針の下に營々として艦船を充實して行つた。獨逸が建艦に於て英國を相手に遮二無二の擴張をする様になつてから、わけでも、一九〇三年この方は、英國は、その海軍に一大改革を加へねばならなかつた。

英獨の此競争に促されて、佛伊は勿論、露國も、此方面に進出した。一の植民地をも有たざる奧國の如きすらも、地中海上に新に海軍を興すに至つたのである。

二 均勢から包圍へ

一八九八年、艦隊（フロッツングゼツツ）法を制定して一大海軍を興すことになつた獨逸は、二年の後、更に大に之を擴張し、二十年の中に「最強の海軍國との戦闘がその國の覇權を危うするに至りぬべきほどの威力ある艦隊」を造り上ぐべき決意を示した。爾來、彼の外交は、往々にして逆襲的、挑發的であり、他の強國の利權獲得に際しては、之が代償を求めずに止むことはなかつた。彼は奧國との結束を固むる方策に手ぬかりなりしは言ふまでもないが、又努めて所在に新なる友好國を作つて行くことをも怠つて居なかつた。奧國の士官たりし獨逸の三公は、推されて勃牙利の公位にあつた。奧國の羅馬尼に君臨せるはホーヘンツォーレルンの三公であつたし、希臘の皇太子は獨帝の妹婿で獨逸陸軍に兵學を修めたものであつた。土耳其へは夙に陸軍部内の俊髦を送つてその改革に當らしめつつあつたから、土國の陸軍は、全く獨逸の勢力下にあつたと言つても、言

ひ過ぎではなかつた。かやうにしてわけでも中歐の二強國は、巴爾幹の各國に抜くべからざる勢力を扶植しつつあつた。

之に對して露佛の二國同盟も、亦、對抗の策を怠ることは出來ず、彼は先づ三國同盟の一角たる伊太利の軍事上、外交上の弱點に注目し、彼が地中海上の大なる海軍國と背き得ない地位にあるを見て、巧に之を引立て三國同盟内に於ける彼を中性化せしむることに成功した。次には兩同盟系統の何れにも加はらず、中立を保つてゐる國々に誘ひをかけて之をば我陣營に羅致することにとりかかつた。由來、英國は、植民政策では、到る處、露佛と衝突せざるはなかつたから、従つて三國同盟に向て、より多く同情的であつたが、佛國は、獨逸に於て共同の脅威を感じてゐる英佛は、須く小異を捨てて大同せざるべからずとて、日露の役起り、日英、露佛の兩同盟が動もすれば衝突を懸念せしむるや、俄に英國と協商して植民地の繋争問題をかたづけてしまひ、ついで與國露國にもすすめて、三年の後、更に同一の精神を以て英露協商を結ばしめ、かくして、世に三國協商として知られてゐる露佛英の三大國の結合を作つた。これは同盟を結んだものではないが、その精神に於て、六國を合從して秦に衝らんとする合從策にも類するものであつた。日本も、亦、日英同盟を介して該協商に近邇し、佛露のそれぞれと極東の現状維持を約した。

日英の二大海軍國と提携することの出來たことは、露佛同盟の最大の成功であつた。英露の兩君主國、わけても英國は、獨逸に劣らず、王朝政策的に活動し、二十世紀初年の英國は、時の國王の娘や姪を那威や西

班牙の皇后としたし、傳統的の與國たる葡萄牙とは、更にその友情を開拓して行つた。そこで獨逸は、獨帝の叔父たる英王を以て獨逸包圍のため血眼になつて奔走してゐるものと詰つたが、これは實は甚しく英王その人の人物を買ひかぶつた見當違ひに過ぎなかつたのである。

第十八節 暗黒大陸及び大洋洲の分割

(一) 暗黒大陸の分割

歐洲大陸では、均勢でしばしの安心を求めつつ、列國のひとつ向つた所は、言ふまでもなく、歐洲以外の廣い天地であつた。露土戦役の片がつくと、列國は期せずして、歐大陸とは一衣帯水の、そして歐大陸の三倍強も大きな暗黒大陸に向つた。此處では、北岸一帯が夙に歴史の光に照らされて居たばかりで、葡萄牙人の周航となつてからでも、沿岸以外は、全く未知のままに放棄されて居た。時々、奴隸狩りがその海岸をあらしまはり、所謂、黒檀貿易を營んでゐるのを見る位のもので、大陸の内部は、全く歐人未達の世界であつた。所が、十九世紀に勇悍な探検者が内地深くはいり込んで討査した結果が公にされて見ると、測るべからざる資源の埋れてゐることが判明したので、一八八〇年代、阿弗利加大陸は、俄然、植民地あさりの對象に供せらるるに至り、列國は、無益の争端を避くべく、一八八五年、伯林に會議を開いて分割の相談をすることになつた。此當時の暗黒大陸には、エチオピア、リベリアの舊新の二つの基督教國外、一の獨立國な

く、葡萄牙、西班牙の兩植民地を除くと、佛英の兩大植民國の外は、獨逸、白耳義、伊太利等皆新なる割り込み連中ばかりであつた。

かくて分割は、地圖面上ではとりきめられたが、各國の植民政策は、一成一敗で、白耳義王などは、全くの空手で、コンゴ一流域に一大植民地を建てることに成功したが、之に反しエチオピアの征服を企てた伊太利は、一八九六年、一敗地に塗れた。しかし、此大陸上で最も雄大なる計畫を懐いて居たものは、何といつても、佛英の二大國だつた。佛國は一八三〇年、已にアルジェリアを占め、五十年の後には更に隣地チュニジアを収めたので、之をばサハラの沙漠を包容してギネア灣に至るまでに奄有せしめ、更に西のダカルから紅海の入口なるデブーチまでを横断しようと思んだ。然るに新に埃及を占領した英國は、彼が兼て和蘭から奪取した喜望峰植民地までを縦断しようと思つて、此所謂ケープからカイローまでの二シー政策は、佛國の二デー政策とニール上流のファシヨダに衝突した。實に一八九八年のことである。佛國は、此際、彼にとつて、より重要な英國との協商を勝ち得んがために、甘んじてファシヨダに讓歩したから、英國は、翌年、南阿に於ける蘭人の二つの植民地を討伐し、三年あまりの遠征によつて之を併合し、略々阿弗利加の縦断を完了したのである。

(二) 大洋洲の分割

暗黒大陸と同時に分割の目的物に供せられたものに大洋洲もある。太平洋方面は、葡、西の航海者その航路を開きたりしこととて、彼等、殊に葡萄牙は、此方面に多くの植民地を入手し得たが、これが終には和蘭のために取り上げられてしまつた。従つて葡國は、印度及び南支那海に一二の小地片を持つてゐるに過ぎぬのである。

此太平洋方面でも、英佛、殊に英國は、最大の土地獲得者であつた。十八世紀に於ける英人の太平洋探検の結果、その嶋や大陸の全貌が略々わかつたので、北米の植民地を失つた彼は、その償ひをつけるべく、米國の獨立から僅か五年たつたばかりの一七八八年に一隊の罪囚を濠洲に移すことにしたが、彼が、濠洲移民の第一著歩であつた。次で英人に次ぐ太平洋の探検者たる佛人も、嶋々の分取りにとりかかつたが、獨逸も阿弗利加の分割運動に手をつけると同時に、これ亦大洋洲に進出して、ニウギネアやビスマルク群島を収め、後には西班牙からカロリン、マーシャルの諸島を買収して居然たる太平洋上の勢力たるに至つた。獨逸に次で此大海に乗り出して來たものは米國であつた。

第十九節 極東の變局

(一) 極東の歐洲列國

阿弗利加も大洋洲も殆んど無主の大陸だから、歐洲列國は、任意に之が處分を了し、そして彼等自の歐洲的均勢をここにも延長して行つたのである。次は極東である。支那と日本とが國を開かねばならなかつた當

時の極東には、これらの兩國の外に、緬甸、泰、安南、朝鮮、琉球等五箇の獨立國もあつたが、極東縁邊の島々は、已に先進の植民國に分取られたから、これから後、列強の鋒先は、自ら大陸そのものに向けられた。此方面では、佛國は一八六二年、早くも交趾支那に據つたが、その以東には、香港と浦鹽斯徳とをそれぞれ極東侵略の基地として南北から之を窺密しつつありし英露の二大國があつた。支那も日本も紛々たる内訌のため、國歩頗る艱難だつたので、歐洲列強は、之に乗じて頻りにその利權を伸長し、佛國は宗主權を主張せる支那を撃破して一八八五年、終に安南を我が手に收めたし、英國は又その翌年緬甸を併合し、佛英はかくて東西から泰を蠶食して行つた。英佛の印度支那に於けるや、無益の争鬭を止め、共に妥協して之を分割する策に出たのであるが、互に相下らざる英露は、極西に於ける彼等の争をば極東までも延長して露骨に争うた。即ち露國の大に極東及び中東への活動を開始するや、一八六一年、彼は、突如、日本の對馬嶋を占據したし、十年の後には更に伊犁を侵したので、日本は英國の助を求め、之をして撤兵を露國にかけ合つて貰はねばならなかつた。伊犁事件は、又、支那の根氣よき交渉の結果、十年の後、やつと解決が出来たのであつた。當時にあつては、朝鮮海峡そのものすら英露の逐鹿場に供されたから、中東に於ける露國の跋扈を制せんとするや、英國は一八八五年、一時、巨文嶋の占領を行つたことすらあつた。露國が京城政府に代つて交渉してくれた御蔭で、やつと英國も之を撤したのである。それほど當時の極東は、歐洲政局の延長の外の何ものでもなかつた。歐洲列強のかかる傍若無人の振舞を極東から絶つたためには、極東に列國の牛耳を握

る一雄國が興り、獨立の外交政略を以て事に當るでなければならぬが、左様なことは、どんな歐洲の國でも望みはしないのである。彼等は、極東がいつまでも團栗の背くらべで、互に勢力の均衡を保ち續けられる様な状態に居付いてゐることを冀つてゐるのである。所が、西大陸の歐洲植民地の中から米國が獨立したとは事情は大に違ふが、極東の古い文明國の中から、一の新しい勢力が起つて、歐洲の我がままの出来ぬ極東を作り上げようとするに至つた。それは他なし、日本の勃興である。

(二) 日本の勃興

一 不平等條約の改正

支那は極東文化の發祥した所謂中華の國だから、彼が自分の弟子の様に見下げて居た日本から今更、對等國視せらるるを快しとしないが、日本も亦、昔は兎も角、現在は堂々たる獨立國としての衿持を持つてゐることとて、濫に支那に追隨することを欲しないのである。所が、極東の改造は、その中心になつて眞劍に働く一つの國がなければとても行はれ得るものではない。つまり日支のどつちかが指導的地位に立たねば其見込がないのである。此意味での適否を明にしようとなると、結局は平和的なり戰爭的なりの試験にかけてためすほかないが、日本はこれ等の試みのすべてを見事に通過し、天下をして極東黃人國の先頭に立ち得るものたるを認めしめたのである。

一八七一年、日本は支那と通商條約を結んだ。日支の關係は數千年の永きに渡つてゐるけれども、兩國が

正式に條約によつて交を結んだのはこれが最初なのである。其條約たる、全く對等なもので、日支共に歐米の諸外國に向ては領事裁判權や協定稅率を認めてゐるのに、彼等同志の間では此不對等をば全く相互的ならしめてゐるのである。それはそれとして、歐米列國との不對等な條約は、獨立國としていかにも不面目極まりないもので、神經質な日本は、一日も早く之を撤せんとし、明治初年の引き續く内亂が平ぐと、明治十一年（一八七八）から愈々條約改正の仕事に着手し、初は稅權だけの恢復を目的としたが、ついで稅法二權とも幾分づつを回收する方針に改め、談判の仕方にも、國別から合議とし、更に又合議を國別に改め、幾回となき失敗にも屈せずして明治二十七年（一八九四）には、たうとう談判の第一の苦手たる英國をして法權の全部を放棄すべきを諾するに至らしめた。次で關稅自主權の完全に恢復されたのは明治四十四年（一九一）であるから、日本の條約改正の努力は、着手以來三十三年にして完了を見るに至つた譯である。倫敦の社交界で英國と國交を締する五十六箇國中の末位を許さるるに過ぎなかつた日本が、かやうにして世界一の強國たる英國をして新日本を見なほすに至らしめたりしは、極東の政局に一の重要な轉換期を劃したものである。諸外國をして進歩的日本を認識せしめんがために日本當局が採つた性急な歐化政策は、心あるものをして墮落せしめたけれども、日本上下は、戮力して諸弊を刷新し、憲法を發布して議會を召集し、法典を編纂し、歐米の國際團體に加入して遜色なきものたるを證示した。世界に於ける回教國、佛教國は一として基督教國と不對等な條約を結んで居らぬはなく（基督教國の中でもエチオピアは不對等條約の國である）、その

大概のものは、近代に於ける歐米列國の侵迫の前に退歩し萎縮せざるはなき中に於て、蕞爾たる極東の日本が堂々と正義の談判に勝利を制し、列國をして眞の獨立國家としての待遇を彼に許すに至らしめたと云ふことは、實に世界歴史上曾て見ざるの壯觀と言はねばならぬ。近代國家としての日本の面目は、ひとり、此談判に現れてゐるばかりではない。又同時に戰爭の上でも十分に證明された。

二 極東の二大戦役

凡そ國際生活では、隣り合つてゐる國の關係ほど、善きにつけ、惡しきにつけ、深刻なものはない。獨露や獨佛の關係などはこれだ。これは陸國同志の場合だが、嶋國と陸國とでも略々同じことが言へる。英佛、中世數百年の歴史は戰爭で一貫され、英國が對岸の大陸を捨てて海に向ふ時まで續いたが、陸國の佛國が同時に植民政策を事とする様になると、兩國は又もや不倶戴天の昔に返り、陸と海との兩方から彼等を脅す畏ろしい共同の敵獨逸が現れ出る時までには及んだ。英佛の此永い争は、嶋國と陸國との交渉の上に興味ある暗示を與ふるものである。

日本政府は新政開始の勿々に、邊境の問題で煩はされるが厄介だと、先づ米國を論じて小笠原島の邦屬たるを認めしめたし、一八七五年には露國に樺太を與へ、その代り千島を我手に收むることにしてこれ等の問題の片をつけた。そこで、今は残つてゐるのは支那との間に横はつてゐる琉球、台灣、朝鮮の諸問題であつた。これ等に付ても、日本は一八七九年に琉球王國をば斷然、日本所屬であるとして諸外國にも聲明し、支

那の抗議をはねつけた。當時、支那が泣き寝入つたのは、五年前、台湾に付ての争が自國に有利に解決されたのに満足したからだと思ふ。しかし日本が獨立國たるを承認して一八七五年已に條約を結んでゐる朝鮮に關しては、之を屬國視する支那の言ひ分を認める譯に行かず、一八九四年、兩國は終に干戈の間に見ゆるに至つた。此役、支那は陸海到る處に敗れて終に屈し、台湾と遼東半島とを割て和を講ずることになつたが、一面、條件緩和を目的に列國の干渉を哀求したので、露佛獨の三國は日本に迫り、之をして遼東を支那に還附せしめた。此事變は結局、三十年前の普墺戰の結果を逆に行つたものとなつた。普墺戰の場合、相戦へる兩國は大勢の上から親近の有利なるを覺り、それから十三年後には、同盟を結んだのであるが、日支は相結ぶ所か、互に別々の道に向ひ、支那は明治二十九年（一八九六）に露國と對日本の同盟密約を結んだし、孤獨を嘆ちし日本はこれから後六年、又、英國と同盟して相反目するに至つたからである。

假に當時の日本政治家に、一八六六年の普國政治家の有せしほどの遠慮と先見とを缺かなかつたにした所で、支那が墺國の様に柔順に日本の手を握るに至り得たらうかは疑問であらう。日本は支那との條約の對等なりしを此度は歐米なみに不對等ならしめたが、近代的國家にその國を作り更へる支那の仕事は、日本の維新政治の様に順調には行かなかつた。干涉三國の支那に對する代償の要求が緒となつて、列強の露骨な侵迫に支那が分割されさうな形勢になるし、時勢をわきまへぬ反動政治家と愚民の蠢動とで四百餘州は全く無政府の状態に陥り、之に乗じて露國の滿洲占領ともなつた。極東の此危機に際し、敢然として起つて露國を討

伐したものは日本であつた。

十年前の支那との戰役に際しても、小さな日本は、大きな支那には一とたまりもなく負けるだらうと思はれたものだが、今度の敵は名にし負ふ世界最大の強國たる露國のことだから、勝敗の數は初から問題ではないと考ふるものすら尠くなかつた。明治三十七年（一九〇四）は日本が開國してから丁度五十年目に當つて居るが、日本の開國當時、クリム半島にバルト海に將た極東の海上に英佛の聯合軍を迎へて戦ひつたあつた露國から、條約調印の任務を佩びて下田港にきたつた露艦は、安政大震災のつなみを食うて大破したので、露國は幕府の許を得てその代艦を戸田で造ることになり、これにより、鎖國の日本は、新時代を劃する造船事業を露人に學ぶ機縁をも握つた次第なのであつた。かくてかつては支那文化の忠實な門下だつた日本は、此度は啓蒙文化を歐米から取り入れることに懸命の努力をなし、之に成功した。昔の羅馬は、希臘を征服し得た後も、しばらくの間、中々、希臘のすぐれた文化を自分のものとするものが出来なかつたし、又今日の歐米人の祖たるゲルマン人も、羅馬の文化を十分にとり入れて自分のものとするまでに五百年もの永い年月を要したのである。然るに日本は、之を開國の時から數へると僅々五十年の間に、見事に此輸入應用の仕事を果たしたのである。それは、彼が日支の戰に倍加する十九ヶ月にわたる長い戦にもめげず、往年の戦費に十餘倍する二十億の巨費を投じ、八萬五千の戦死者、數十萬の負傷者を生ずる慘憺たる血闘をば、遂に勝ち抜いたすばらしい戦績を見てもわかるのである。露國では、對内政策的の意義のかなり濃厚だつたこの戦

は、露土戦役以上に不人気だったから、陸上でも海上でも初めから振はなかつたことは止むを得ぬのであつた。あの恐ろしい革命内亂が若し此國に二ヶ月早く勃發したら、米國で結ばれた日露の講和條約は、もつともつと日本に有利なものとなり得たことは疑はれぬのである。日本は此激戦で殆んど其國力を銷盡したかに見えたが、しかしその戦果は中々大きなものであつた。朝鮮は日本のものとなり、露國は全く南滿洲を撤し、關東州及び南樺太を日本に讓與し、北洋の漁權をも譲り渡すといふことになつた。近東で伐たれて十九世紀最後の十年代から河岸を極東に換へた露國は、かくして日本のため此處でも亦撃破されて、結局、再、近東に返らねばならなくなつた。今は露國もはや往年の脅威ではないけれども、好意の中立を守ることによつて日本の赫々の戦果に間接に貢献する所なしとしなかつた英國は、明治三十八年（一九〇五）、日本に説きて三年前の同盟條約を改訂し、第三國の無挑發の攻撃に對する應援義務を認め、新に印度をもその範圍に加へることにした。第一流の強國としての日本の國際政局に於ける地位は、かくて今や争はれないものとなつた。

(三) 米國の太平洋進出

強露を破つて勢旭の昇るが如かりし日本とは又ひどい違ひで、當時に於ける極東唯一の獨立國たる泰と支那とは共に最も振はなかつた。日本の御蔭で滿洲から露國を追ひ掃ふことの出來た支那は、今は露國のためには蒙古を、英國には西藏を侵されつつあつた。更に極東は、獨逸に次で新なる植民國米國をも迎へること

になつた。

合衆國の膨脹



米國は建國當時から憲法論上の争ひで、二つの黨派が對立して居た。元來、米國の獨立そのものは十三州の協力の結果なのであるが、さて愈々英國から分立した後の十三州は、これまで彼等の持つて居た自由をば新に出來た中央政府のためにどの程度まで割いてくれるかが問題で、この點では、出來るだけ、州の獨立と自由とをこれまで通り保ちたいといふ所謂非聯邦論と、州の權利を出來るだけ割いて新設の中央政府に與へるでなければ合衆國の獨立國家としての十分な働きが出來ぬとする聯邦論との二つに分れた譯である。かくて州權を主張する前者は、今日の民主黨、中央集權を要望する後者は共和黨となつたのであるが、此争は口舌の上に止まつて居らず、奴隸問題が切っかけとなつて、兩黨は終に南北に分れて墻に墮くに至つた。今までは、大體、民主黨の方が優勢だつたが、内亂で州權主義が敗れたとなると、爾來、米國の政界では、共和黨、概ね勢力を占め、一八六一年から大戰勃發までの五十餘年間に、民主黨の政權を占め得たるもの十年に満たなかつたのである。共和黨は、大商工業を土台に立つてゐるた

め、經濟上では保護主義を主張し、一八九〇年、敢然として之を實行したが、外交政策では、彼は帝國主義をとつて積極的進出を期した。

米國の政策は先づ歐羅巴の西大陸に於ける勢力を振ひおとすことに向けられた。佛國の第二帝政が南北戦役に乗じて墨西哥に帝政を樹立せんとたくらむや、米國は、先づ内亂に苦んでゐる南隣の共和黨を助けて佛國の異圖を挫いたし、次で一八八九年、伯西爾帝國に繼承問題が起るや、之に干渉して西大陸から全く君主政治を一掃した。彼の次にとりかゝつたものは進で西班牙を新世界から逐ひ拂つたことであつた。久しく壓制政治の下に苦しめるキウバの西班牙に向て叛旗を翻すや、米國は之に干渉し、一八九八年、西班牙を撃破してこれを西印度群島から驅除し、同時に極東に進出してフィリッピン及びグアムを割取した。西漸せる米國は、かくて彼が新なる海外植民地を本國と繋ぐ交通線を確保するの必要に迫られ、布哇の併合を斷行したし、一八九九年にはウェーク島を占領し、同時に英獨の二國とサモア群島を分割し、終に百尺竿頭一步を進めて巴奈馬運河開鑿の大事業に着手した。かやうにして南北戦役の直後に彼が露國から買収したアラスカも今や太平洋方面に對する膨脹上の重要基地たるに至つた。支那に對しては彼は門戶の開放、機會の均等を求むる一點張りて、日露役に際しては陰に日本を助けたが、かくて滿洲が露國から解放されると、彼は、今度は、滿洲に關し屢々とやか々の容喙を試みんとするに至つた。之を要するに太平洋側岸のアンゲル・サクソン世界では、日露役後に於て排日の氣勢、一般に蔽ふべからざるものがあつた。

第二十節 回教世界の萎縮

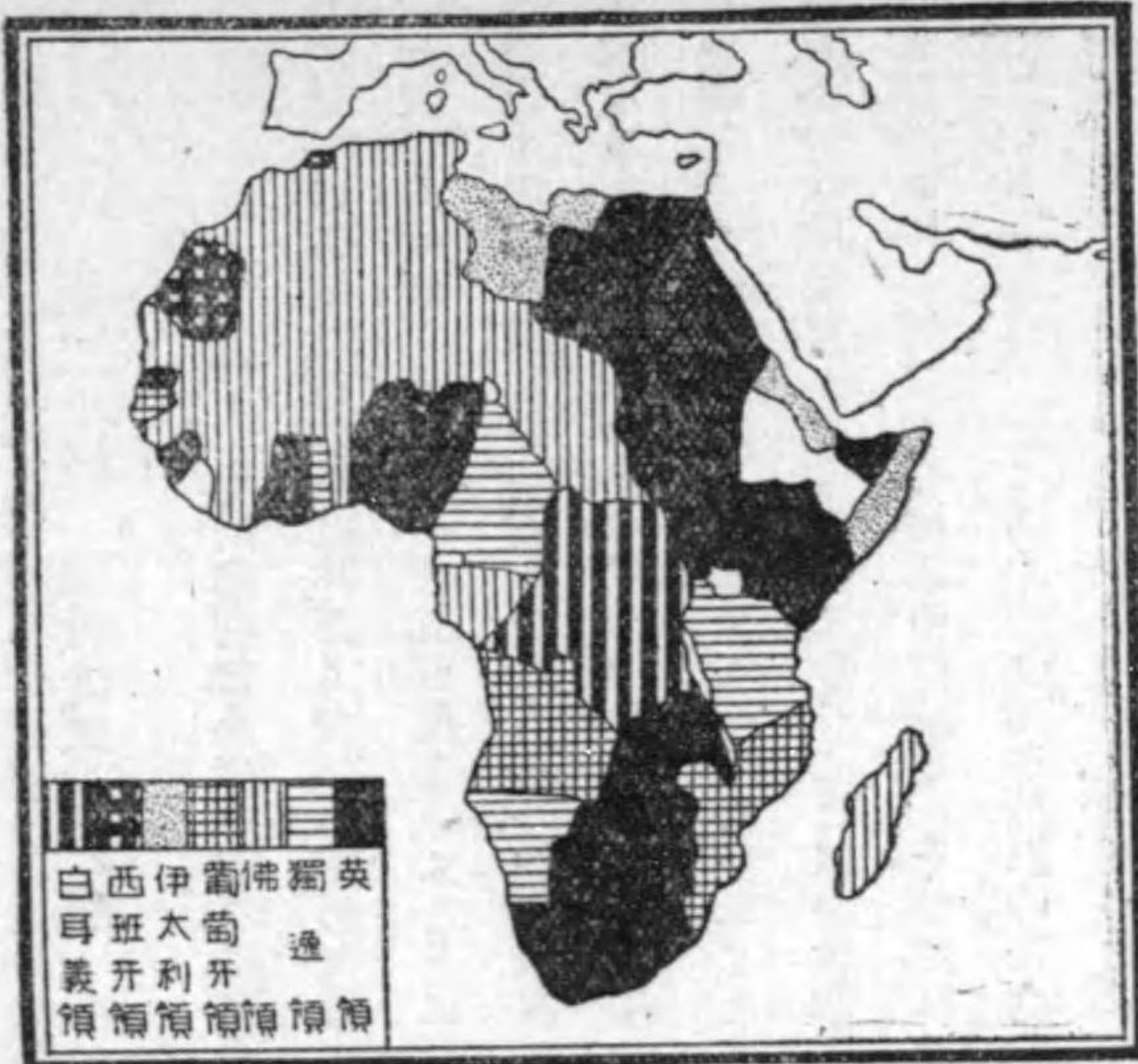
(一) 北アフリカ及び中東の回教圈

世界に於ける回教徒の數は甚だふたしかだが大體二億四千萬位で、内譯、亞細亞、一億七千萬、アフリカ、約五千三百萬、歐羅巴一千五百萬といふことになつてゐる。亞細亞の回教徒中の七千萬は印度、五千萬は舊蘭印である。種姓の制あり、最も排外的な印度にこれだけ喰ひ込んだといふことは、回教の滲透力いかに大なるものであるかを示すものといはねばならぬ。傳道會社があつてするのでもないのに、かやうに廣大な地域を、その教のために拓いてゐるといふことは驚異でなければならぬ。所が、傳道とは亦正反對で、回教世界の政治的に不振を極めてゐることは佛教世界以上である。佛教圏では、安南、緬甸、蒙古、西藏次にと基督教國に侵されては居るけれど、その間には日本の如くに萬丈の氣燄を吐いてゐるものもなきに非ざるに、回教圏では、どこもかしこも冬枯れの景色である。

第一に北阿は、回教が、その物興勿々の第七世紀に早くも席捲した所で、十六世紀この方は、ともかく土耳古の新月旗が翻つて居たのであるが、啓蒙文化で歐洲各國が勢付いて來ると、アルジェリアの佛國に占領されたのが始まりで、埃及は英國に占められるし、封建不統一の状態に陥つて居つたモロッコは佛國に、残つてゐるトリポリは伊太利に取られてしまつた。佛國は英國との一九〇四年の所謂眞摯協商で埃及を英に與

へた代償としてモロッコを得ることになつたのであるが、奉天の役で露佛同盟の軍力が打撃を被つたと見るや、その弱みに乗じて獨逸が放つたる抗議のため、モロッコの問題はこれからまだしばらく紛糾をつづけ、大戦の少し前に佛國の赤道阿弗利加領で獨逸に多少のつまりぬ代償を與へることにして、やつと鬼を付けたのである。

アフリカの分割



英露兩國の競争場たる中東では、英國の最大の關心は印度の防衛にあつた。印度は一八五八年以來、東印度會社から英國政府の直隸にうつされ、新設の印度大臣が一切、行政上の責任を負ひ、印度皇帝を稱する英王の名代たる總督が直接に統治の任にあたることになつた。此處では、印度教徒と回教徒とがその國民運動で、中々、一致協力しないため、英國をして坐ながらにして漁夫の利を占めしめてゐるといふ事實がある。今一つ土人の無数の王侯も、印度民衆に對しては往々にして却て英國政府と歩調を共にするの地位にあるのである。

外部から印度を侵すべく覗つてゐるものは露國であつた。これに對しては、英國は聊も對策を怠ることが出来ず、幾度となくアフガニスタンに遠征軍を送つて、此地方に英國の勢力を固めて行かねばならなかつたし、更に一八八三年にはベルチスタンの併合を行つた。

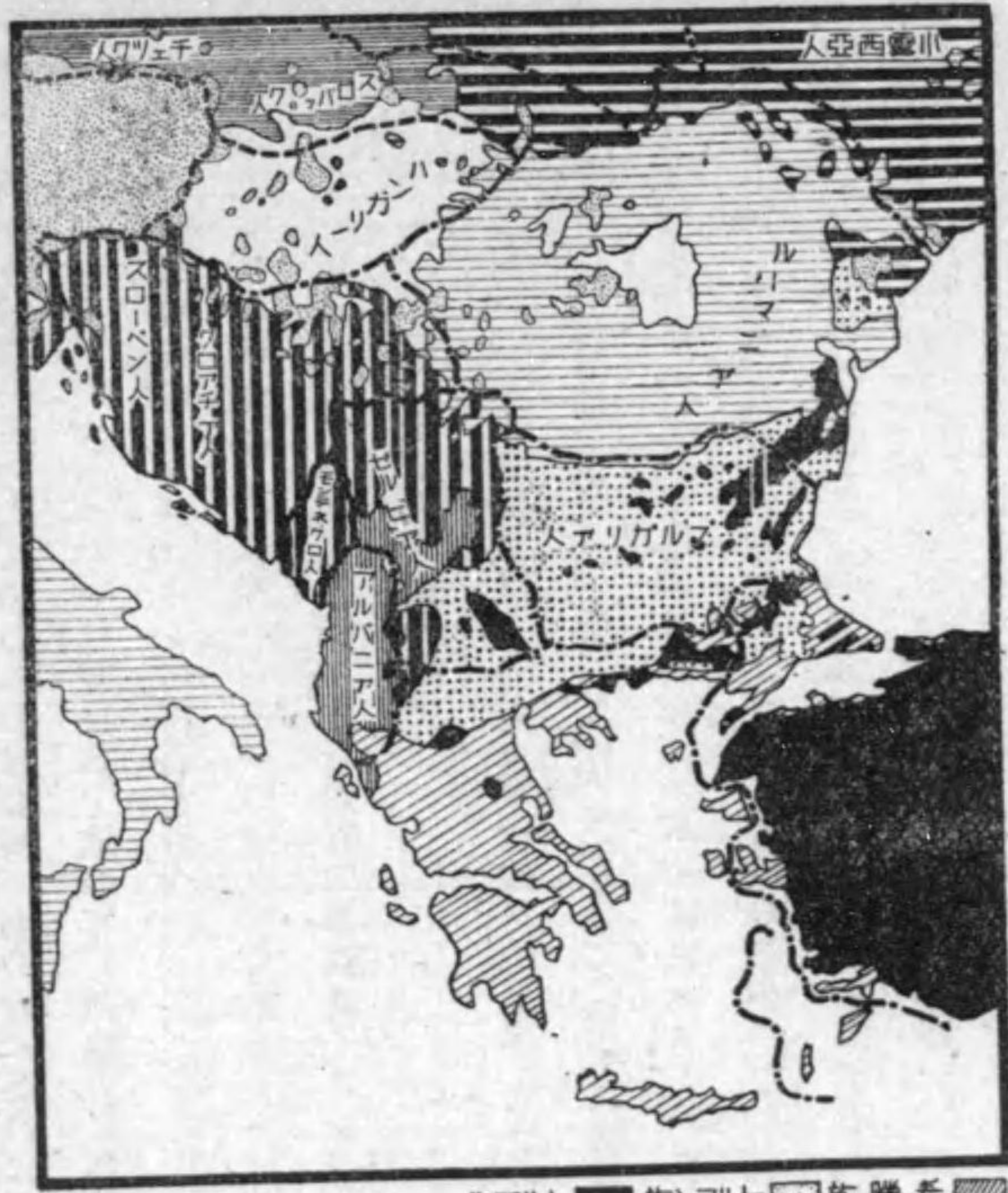
土耳其を除いては回教世界に於ける唯一の獨立國であるイラン（波斯）に對しては、英露は、一九〇七年、協商を結んでその分割を約したが、之と同時に露國はアフガニスタンからはその手を引いたのである。

(二) 土耳其帝國の陵夷

伯林條約で巴爾幹の基督教民族は一と通り解放の目的を達したといふものの、まだ回收されて居ない少数民族は、そちこちに殘されて居り、これ等は伯林條約の不徹底に慚らず、飽くまでも、土耳其の暴政からの解放を求めて止まぬ。その二三を擧げるならば、第一に東ルメリアである。これは露土役に際し、露國が勃牙利に包含せしめて大きな勃牙利を建てようとして成らなかつたものである。次にはクレイテ嶋の希臘人で、最後にはマケドニア地方である。勃牙利は、列強の慰諭をまさき入れずに、一八八五年、終に東ルメリアを併合したし、これから十二年の後には、希臘もこらへきれないで土耳其を撃ち、クレイテの奪回をはかつたが、戰敗れてその目的を遂げることが出来なかつた。しかしこの騒ぎでクレイテは基督教徒たる總督の下に自治を許さることになつた。残るはマケドニアだが、これは民族的には一番の難物であつた。此地方はかつて中世紀に勃牙利に併されたことあり、後には塞比亞の領土となつたこともあつた。かやうな關係から土

耳古の領有に歸してからでも、判然たる民族性の識別せらるるものなく、羽振りのよい隣族に靡いて行くといつた態なのである。さういふことになると、勃牙利と戦つて敗北を喫してゐる塞耳比や、土耳其に敗れて

立獨の族民諸幹爾巴



希臘族 ■ アルケ族 ■ コルト族

ゐる希臘は、マケドニアでは頭が上からず、一番、勢の良い勃牙利が又最も効果的な宣傳を行つたため、マケドニアの土民にも、勃牙利語をと、勃牙利の教會に歸依するものが少くないといふ状態となつてゐるのであつた。ここにも自治を要求する所謂民族運動はあるのであるが、問題が問題なので、露埃の二國は、一八九七年に、成るべく事を荒立てぬ様、現状を維持しようといふ協商を結び、しばらく御茶を濁して行くよりも外なかつた。土耳其帝國內には、

まだ民族的統一の熾に論ぜられてゐるアルメニアの問題もあるが、これは、露、土、イランの三國に分れ分れになつて居るため、一々、解放して更に統一せねばならぬこととて、その困難は一と通りならず、自然あともまはしにされた。巴爾幹にはアルバニアがあるが、これは露埃の話し合で獨立させることにきまつた。蓋し埃や伊や塞の皆共に熱望する此地方の處分法としては、さしあたり止むを得なかつたのである。

かくて近東問題は日露戦まで持ち越したが、日本の勝利は世界の有色人種に甚大の刺戟を與へた。中にも奮然として蹶起したものは、土耳其の青年で、統一及び進歩を標語とした彼等は、一九〇八年、軍隊を抱きこむことによつて一舉に革命に成功し、獨裁君主を倒して三十三年前の憲法を恢復した。新政府の政策とする所は、オスマン・土耳其族を中心とする國民主義であり、彼等は進歩のためにはあらゆる舊弊を打破するが、同時に所謂、國の統一のためには、國內に於けるあらゆる異分子の打倒を期した。革命後の新土耳其はかやうにして着々として彼の奪はれたる利権や國土を回收せんと意氣込みつつあつたから、勃牙利は、さうなつたら厄介と、直に土耳其の宗主權を脱して完全獨立を宣言したし、埃太利は、又、その委任統治領たるボヘ二州の併合を聲明した。

土耳其が第二の日本となるのをおめく、坐視が出来ぬと、一九一一年になると、伊太利も、突如、戦を土耳其に挑んでトリポリを奪つたし、今まで、犬猿、嘗ならざりし巴爾幹の列國も、終に同盟を結んで、一九一二年、土耳其を打ち、之を分割した。アルバニアを獨立させることになつた結果、獲物の分配で一もめを

演じ、一旦は巴爾幹同盟の同志討ちまでになつたが、結局、勃牙利の屈服となり、彼を犠牲にすることによつてすべての處分法が決められ、敗れて、殆んど歐羅巴から逐はれるばかりだつた土耳其の、辛うじてその足を歐羅巴に留めたのが一九一三年であつた。而して一年の後には全歐大戰の火の手は巴爾幹に於ける此餘燼の中から揚つたのである。

第三編 世界の戰國時代

第五章 第三次全歐大戰

第二十一節 大戰の勃發

(一) 大戰前夕の歐羅巴

世界の平和は、平和の大國間に保たると否とに關係すること最も多い。戦争も小國の間だけで済むならば比較的無難だけれど、國土廣く、人口多く、從て他と接觸する面の多い大國同志の間になると、局面のいやましに廓大することは蓋し避けられないからだ。幸にして歐羅巴では一八七一年の方、四十餘年のながき、大國間にはかつて戦の交へられたことはない。日本と露國とは戦つてゐるが、これは極東でのことだし、又幸に他に飛火もせず済んだ。伊太利も干戈を動かしては居るが、相手は弱い土耳其だつた。世界の八大強國の中、日米を除くと皆歐羅巴に集まつてゐるのだから、若しも歐洲外にこれ等の歐洲諸國をして争はしめるやうな大事變でも持ち上つたら兎も角、さうでない限り、歐羅巴の内部に火の手が揚りさへしなけ

れば、先づ以て全歐戦役はもとより、世界的の大亂も、もち上りつこはないと見て宜しいのである。さてそれでは、一九一四年當時の世界の何處に大國をして躍起となつて争はせるやうな難問題が伏在してゐたらうか。

近代の戦争は、中々、多費だから、列強は決して輕々しく動きはしないが、しかし機會さへあれば、領土上なり經濟上なりの利權をせしめて我が力を展ぶることには手ぬかりあるを得ない。さうして此場合、その取り引きは極めて現金に代償的である。英國は柏林條約でキプロス島を占領してゐるが、佛國はその代りにチュニジアを占め、更に最近にはモロッコの片をつけ、埃伊、亦皆領土的の利益に浴してゐる。獨逸は「正直な仲買人」と稱して無慾を口にしてゐるけれど、己は土耳其を抱き込んで、バグダッド鐵道の敷設權を占め、着々としてエルベからエウフラトへの方向に大經綸を行つてゐる。此間に在て露國はしばらく鳴を鎮めて大に近東に雄飛するの機を窺つてゐるのである。西大陸では羅典亞米利加の共和國のそちこちに名ばかりの革命である慢性的な政權争があり、米國は墨西哥に起つた内亂に出兵して居たが、五十年前の佛國第二帝政の様な歐洲からの干涉のない以上、これが強大國間の戦争となる心配は勿論なかつた。極東では、一九一一年、支那に革命起り、滿洲王朝倒れて、亞細亞に於ける最初の共和政府が建てられた。新政府の前途は日本は勿論、歐米列強の大なる關心事ではあるけれども、皆しばらく靜觀の態であつた。

從て巴爾幹同盟の土耳其征伐は、一番、危險性の多いものであつたが、一九一三年夏ともかく落着したの

で列強はこれでやつと安堵した。此戰を機としてアルバニアといふ新國が出来たから一九〇五年に瑞典から分立した那威を加へて大小二十二の國家が今や小さな歐洲大陸に肩を並べることになつた。歐人が縁起をかつく一九一三年は、色々の意味で歐洲のそちこちで記念される年であつた。露國はロマノフ王朝の第三百年祭を行つたし、獨逸は又ライプチヒに壯大な諸國民戰役紀念碑を建ててその除幕式を行ひ、佛國を破つた一百年前の偉業を慶し合つた。これ等は、國民的のものに止まつてゐるが、巴爾幹の平和が克復すると、海牙では平和宮の開宮式が賑々しく舉行された。これは、第二回平和會議中、礎石を置き、數年にしてやつと竣工したが、戰雲の歐洲におさまるのを待つて居つたものなのである。これ實にやがて第三回の平和會議も召集されるだらうと大望されてゐる時なのであつた。

戦争の心配は決して止みはしないが、しかし和平の運動もかなり組織的にひろまりつつあつた。ノーベルの平和賞典は、毎年、必ず、平和の功勞者に與へられてゐるし、此趣旨による著作では、時々、世界の人心に大きな感動を及ぼしてゐるものも現れて居つた。平和協會は各國に設けられ、二十世紀になると、紛争を仲裁裁判に付することに付ての條約を締結する風が旺で、一九一四年には、其數、實に一九四に及ぶと稱せられた。仲裁裁判にかけられて裁かれる事件の數も從て日に日に増加の有様であつた。

(二) 青天の霹靂

巴爾幹の戰雲は一旦收まつたが、列強の中には心の收まらぬものが少くとも一國はあつた。それは、新

に領土を南方に加へて一層にその功名心をそそられ、奥太利とは、到底、兩立の出来ぬことを覺悟するに至つた塞比亞をば、此際、一と思ひに撃ち滅すでなくては、二元帝國そのものの存立が殆いことを知つた奥國であつた。そこで奥國の軍部は、一九一三年に於て此機をはづさず塞比亞の討伐を斷行すべきを建策したのであるが、獨逸の同意を得ること能はずして沙汰止みとなつた。塞國の二國は決して初めから左様に不和なものでなかつた。巴爾幹の新建國は希臘を初め、羅馬尼も物牙利もアルバニアも皆獨逸から君主を迎へてゐるが、塞國には、豚商人の出たる君位競争者が二家あり、その中、オブレノウィチ家の執權時代には親奥政策が採られたのであるが、一九〇三年、此王朝が官廷革命で亡され、カラヂョルヂ家の時代となつてからは、背後に居る露國の勢力が加はり、從て外交政略も排奥的となり、わけても、奥國が塞比亞人の住んでゐるボヘン州を併合するに及んで、塞國は、彼が未回収地回収の希望の空しくなつたに奥國を誚うて止まざるに至つたのである。かくてボヘン州の同族をけしかけて内側から奥國を潰裂せしめようとする秘密結社が活動するし、奥國政府は又之を發いて叩きつけようとするし、互に陰險兇惡な謀略を旋らし合つた結果、塞比亞の軍閥は、彼が十年前にオブレノウィチ家を屠るに用ゐたと同じ様な惡辣な手段をハプスブルグ家に加へんとするに至つたのである。

奥太利の軍閥が狙つて居た機會は一年ならずして到來した。一九一四年六月二十八日、奥國皇太子はボスニアに行はれた演習を統監の序に妻を携へてサラエウォ市を訪うた所、待ちもうけてゐる塞國結社に襲はれて射殺された。二月革命この方、帝位にあり、やがて滿八十四才にならうといふ老帝の家庭には、不祥な事ばかり訪づれて居つた。墨西哥皇帝となつた帝の弟は共和黨のために銃殺されるし、その皇后は氣が違つてその不幸な一生を卒つたし、帝の唯一人の實子たる皇太子は妻子があるのに、一婦人と情死して果てたし、それから又、皇帝と仲たがひで久しく別居して居た皇后は無政府黨に刺殺された。かくて新に皇太子に推された帝の甥は左手結婚のため皇位の繼承權を己の愛子に斷念せざるを得なかつたが、今や夫妻、枕を並べて斃れたのである。ウィーン政府は、此恐ろしい犯行の後に塞國政府ありと睨み、獨立國としての面目をば全く踏み潰す苛烈な最後通牒をつきつけ、事變の後一ヶ月にして終に塞國に戰を宣したのである。

第二十二節 全歐戰役から世界的戰役へ

(一) 汎スラブ主義對汎ゲルマン主義の争

奥國がかやうな思ひ切つた態度に出たのは、與國獨逸との間に十分なる了解があつたからであることは言ふまでもない。一年前、奥國を制した獨逸も、此度は、之を如何ともし得なかつたのであらう。勿論、英佛等の列強は、曩に巴爾幹の火事を踏み消した擧みに倣ひ、争をば此上、燃え廣がらぬやうにしようと極力奔走したのであるが、此場合、一切の鍵は全く露國の一手に握られて居つたと言つて宜しかつた。風前の燈とも言ふべき塞國を見殺しにするか否かは彼の方寸に在つたのである。

スラブ民族の宗族として、露國は、歐洲の所在にある同族を擁護せねばならぬといふは、彼の國粹論者の絶えず力説して來た所だが、しかし、それも今や露土戰役の當時にあつた様な強い感激をば、南北のすべてのスラブ族の間に漲らすには至り得なかつた。といふのは、運動の歩調が、往年の様に、スラブ語族の間に揃うては居ないからだつた。同民族ではないが、同教の希臘の王朝は、甚しく親獨化してゐるし、之と同様な條件の羅馬尼亞は、三國同盟に加はつてゐるし、兼々、塞國とは縋りの合はぬ勃牙利は、最近の一戰この方、全く排塞的になつてゐるから、露國の鵬翼にすがつてゐるのは、塞國と黒山國とのみだからである。しかし、露國は終に此憫れな小國を助けて、彼が三十餘年前にその保護の下にある、大きな勃牙利國を建てようと試みた様な冒険をくり返すことになつた。その當時、戰爭の相手は、弱い土耳其一國だつたが、此度は、少くとも塊獨の二大國を相手とらねばならぬのに。

しばらく日露戰役後に於ける露國の内政に一瞥を投じよう。一九〇五年五月、露國は、遂に憲法を發布し、國會を召集したが、政府黨を多く選ばせようと苦心して作り上げた選舉法のあてがまるはづれで、反政府黨が多數を制した第一、第二の兩國會は、正面から政府に反對したため、續けざまに解散された。これでは折角の國會も、革命を國內に煽るための機關に過ぎぬ様なもので、政府は、思ひ切つて選舉法を改正し、御味方黨を多數に送り出して國會を骨抜きにし、かくて辛くも政局を切り抜けることが出來た。されば獨逸の記者の評する如く、それは全く皮相の立憲政治に過ぎなかつたが、ともかく政黨は結社を許されてゐ

るし、言論も、少くとも、國會内だけでは自由だつたのである。十九世紀の末から大に再舉を謀つてゐる過激な革命黨は、地下に潜行してゐるが、一九〇五年十月の大詔にあらはれてゐる溫和保守主義の精神で行かうといふ十月黨や、英國流の議院政治に徹したいと冀つてゐる立憲民主黨は、國會に代表される機會を持つて居て、公然とその持論を發表してゐるし、彼等の比較的穩健な主張は、記者や教授や地方議會やの中流の知識階級の間にも段々と勢力を弘めつつあつた。政治思想の此滔々たる滲漸は、露土戰役の當時にはとても見られない現象であつた。十年前の日露戰役の頃でも、まだこれ程ではなかつた。時代錯誤の獨裁政治を一日も早く撤し、賢明な民衆の意見を國政の上に反映せしめねばならぬといふ要求は、殆んどすべての方面で勸告されつつあり、此鬱結せる磊塊は、戰爭によつて外部に迸發されでもない限り、どうにも仕様のない状態となつて居た。そこで薄志弱行の皇帝の躊躇逡巡しつつあるを見て、陸相は、突如、總動員令を發し、これが次で獨逸からの宣戰の布告となつて萬事、終に窮したのである。實に塊太利の對塞宣戰より僅々四日の後である。かくて塊獨對露の此大戦が汎スラブ主義對汎ゲルマン主義の争たるところは明になつた。二元帝國を崩壊せしめ、その内外に於けるスラブ族の間に己の勢力を扶植しようといふ露國と、塊國の東方幕進策を助けて伯林からバグダッドまでを貫く國家系統を組織しようといふ獨逸とは、かくて決戦によつて各その目的を貫徹せんとするに至つたのである。これは實に中世以來、寸時もその歩みを止めないスラブ對ゲルマン兩大民族の人類戰の延長であるとも見られる。此闘争は、一進一退、何れに分ありとも速断されな

い。第一線のエルベ河の畔りでは、北方の西スラブ人（ボラビ人）は、ゲルマン化されてしまつたが、チニツヒ人はゲルマン世界の中に人種的の崎として突出してゐるし、又その附近に一個の島嶼（ウエンド人）をも今に残してゐる。ゲルマンは進んで普魯西からバルト沿岸をさきり従へ、フィンランド灣南までも進出してゐるが、その代り、スラブは、巴爾幹半島を奄有して之をば殆んど其制壓下に置いてゐるからである。

(二) 英獨争覇の戦

戦端は終に露獨の間に發したが、露國の與國たる佛國の之を坐視すまじきは初から知れ切つて居たから、獨逸は八月三日、進んで佛國に宣戰した。腹背兩面の敵を假想しての作戦は、獨逸の參謀本部では數十年來の宿題で、その結果は、先づ西して佛を挫き、然る後、露に向ふといふことにきまつて居た。作戦原案では、和蘭、白耳義の中立を破ることによつて國防線の比較的弱い所から佛國に侵入するといふことになつて居たが、獨逸は之をば白耳義の一國に改めて之に侵入したので、一八三九年の條約で列強から永久中立を保證されてゐる白國政府は、急を列強に訴へた。これまで英國は、戦局の廓大を防ぐべく懸命だつたが、是に至て自己自身の安危に思を致さねばならなくなつた。蓋し白國地方が大陸強國の占領する所となるは、島國たる英國を死地に陥れるものであり、十八世紀初のブルボン王朝、それから百年後のボナバルト王朝の異圖に對し、英國が一貫して抗戰を持續したるもこれがためだつた。英國はそこで、敢然として獨逸の撤兵を求め、八月四日、終に之に戰を宣するに至つたのである。

當時の英國では和平を望むの情は上下を通じて一般であつた。三十年も永い間、大體に政局を支配した保守黨が倒れて一九〇五年、自由黨は久しぶりで政權を握つたので、保守黨の帝國主義政策のため永く閑却されて居た内政上の改革や刷新で、新政府は忙殺されて居た。社會政策的立法は續々と制定される。自由黨の執政になると、近來、さまりきつて政界を賑はすことになつてゐるウェールズに於ける國教の廢格やら、愛蘭土の自治法やらを徹するためには、上院から立法の否認權をとり上げてしまはねばならぬので、一九一一年に、政府は、議會、殊に上院と大激論の末、たうとうその目的を達した。社會政策的の立法で、財政上の負擔の中々重いにも拘らず、政府は獨逸との建艦の競争も行はねばならなかつたが、ともかく可成、外國との摩擦を少くすることによつて國內の問題を片づけようと大童であつた。さうしてウェールズの廢格法も、愛蘭土の自治法も、國に内亂を惹き起しはしまいかを疑懼せらるほどの騒ぎの裡に將に法律として發布せられんとしつありし折に、獨逸の此不意討ちに接したのである。英國閣員の大部分は、初め明に參戰に反對だつたから、獨逸は心竅に彼の中立を期して横車を押し通さうとしたが、當てがはづれたのである。英國の對獨宣戰が大陸の戦役に世界的の性質を與ふるに至らしめるものであつたことは言ふまでもなかつた。第一次の全歐戰では、英國は普魯西を助けて奥佛露の普魯西包圍戰に當つたし、第二次の大戦でも、亦、佛國に對してその敵國を支持したのであるが、一九一四年の第三次大戦では、普魯西は、最早、舊阿蒙ではない。統一した大獨逸帝國として戰を英國に挑むに至つたのである。これは、陸國と島國との決闘であ

る點では、英佛の昔の争をくりかへすものであつた。

(三) 「中歐」政策の三日天下

獨逸は豫定の計畫により、白耳義から潮の如くに佛國に侵入した。佛軍は、英軍の助けを得て之を拒いだが、破竹の勢で巴里に向つた獨軍をば、辛うじてマルヌ河の線で喰ひ止めることが出来たのであつた。大戰勃發の年は、中々、多事で、日本は日英同盟の誼によつて獨逸に宣戦し、青島を抜いたし、又、獨逸の東洋艦隊を太平洋及び印度洋から驅除したが、之に對し、獨逸同盟は、土耳其をして兵を擧げしむるに成功した。所が、一九一五年の春になると、大戰勃發の勿々に獨逸の對塞宣戦はこちらから仕かけた喧嘩だからとて應援義務を拒み、兩端を觀望して居た伊太利は、遂に英佛等の聯合國に參加して獨逸に宣戦したから、此處、敵味方は、鼯鼠ごつこの態であつた。

露軍は、存外、迅速に動員集中して東普魯西を侵したが、獨逸は寡兵を以て能く之を破り、一九一五年夏には、獨軍と共に大舉して之に壓迫を加へ、終に全波蘭土を席捲した。露軍の弱點の軍需品の缺乏にあることは之によつて十分に明にされたから、獨逸同盟は同年の秋、更に勃牙利を新に味方に引き込み、大に塞比亞を伐つて黒山國と共に殆んど之を撃滅した。英佛は、急遽、その軍をサラニカに上陸せしめ、獨逸軍のエーゲ海への殺到をやつと喰ひ止めた。

獨逸土物の四國同盟は、獨逸を盟主として軍事外交、共に完全に統制されて居たから、烏合の衆たる聯合

國は、いつもこれで押されてばかり居た。内線に活動する獨逸の作戦の利は十二分に實現された。英佛のダゲネル遠征軍は、一九一五年に於て慘敗に終つたし、英國が波斯灣から派出したメソポタミアの遠征軍も、これ亦、その翌年を以て頓挫した。一九一六年夏に至り、これも伊太利と同じく三國同盟への義務を拒んで中立した羅馬尼は、聯合國に勧められて起つたが、これは、露軍の春期の作戦のもう終りを告げた後だったので、時機遅きに失して敗れ、塞比亞同様の運命に陥つてしまつた。十二月にブカレストは獨軍の手に歸したから、今や伯林からバグダッドまで、ハムブルグから波斯灣までは、四國同盟の掌裡に歸し、獨逸記者の所謂「中歐」^{ミッテアルカイロイ}は、希臘の一環だけを除いて殆んど完全に實現されたのである。

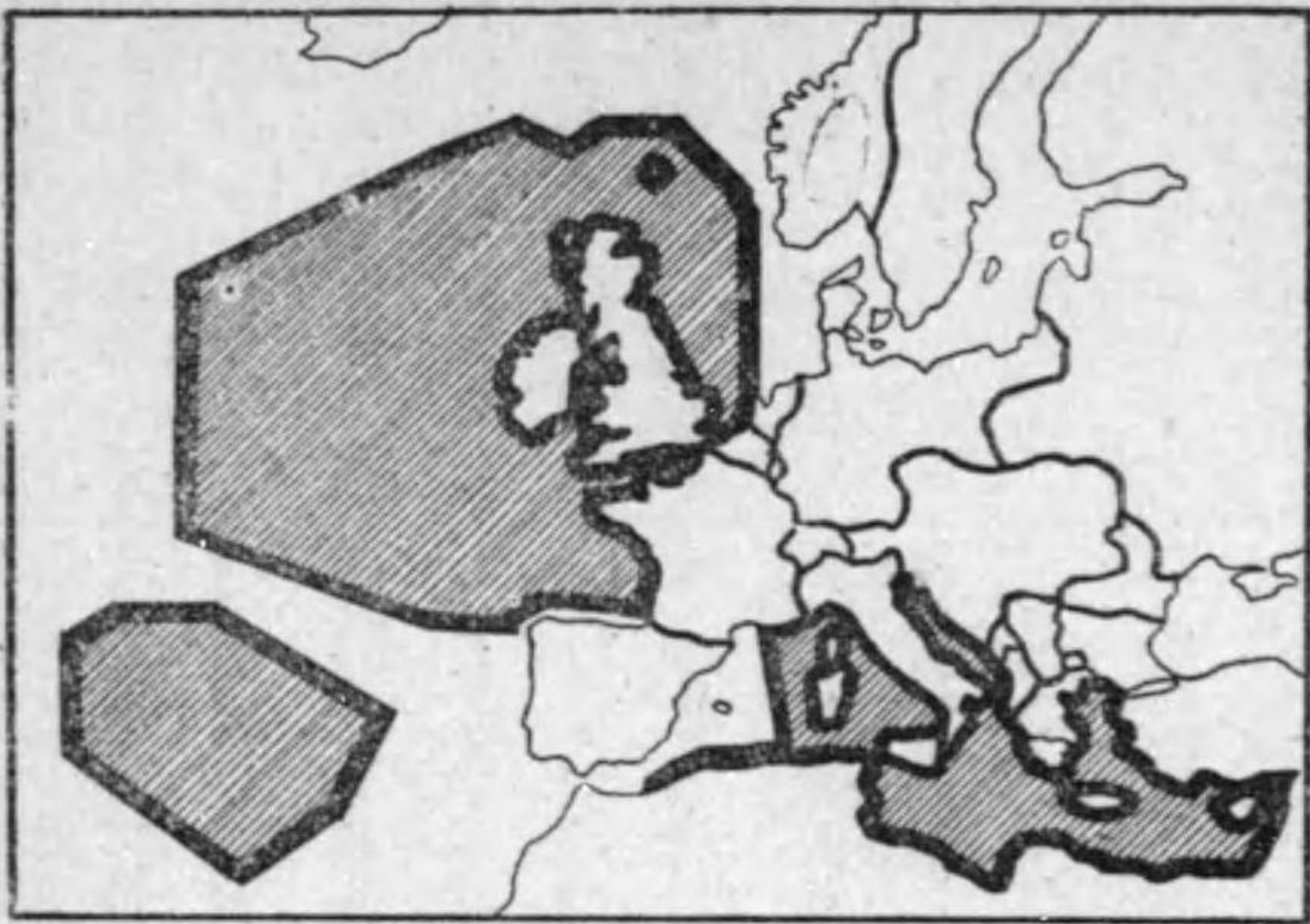
(四) 敗れたる獨逸の世界政策

一 獨逸の對英封鎖と米國の參戰

一九一六年末を以て戦争はもう二ケ年五ヶ月にもなつてゐる。その間、獨逸軍は、邀ふ所、殆んど敵なく、もとより全歐羅巴とは言へぬが、少くとも中央歐羅巴では、彼の覇制は完全に近いのである。しかし、實を言へば、彼ももうかなり疲れてゐる。白耳義をはじめ、佛國の東北部、それから東では、波蘭土、巴爾幹では、塞比亞、黒山國を奄有し、アルバニア、及び羅馬尼の大部分も彼の統制する所となつて居り、此等の國は、大體、農業國だから、食料に困ることはなかりさうに想はれるが、中々さうは行かぬ。産業革命後の歐羅巴では、それが進歩的な國であればあるほど、産業的には一層、他國依存的である様になつて來て

ゐる。獨逸は、兼て此點に注意して自給自給を期し、自分がない物は、之を代用品の發明に待たし、いゝさが始まつてからは、極力、節約を努めたものではあるが、彼が第一の悩みは、やはり、食料の缺乏せることで、麵粉の一日の定量が三分の一（二五〇瓦）に減ぜられ、その他の食品亦之に準じたから、國民は、甚しく榮養不良となつた。これ蓋し彼が全く外界から遮斷された生活を營まねばならなかつたからである。彼は、バルト海と黒海とを制し

獨逸の對英封鎖



たけれども、これ等は全くの袋の海で、四國同盟の四邊は、陸上も、海上も、敵のために蟻の這ひ出る隙間もないほどに封鎖されてゐるのである。北海では、英國の大艦隊は、スカバ・フローとロシスとに頑張つてゐるし、地中海では、英佛の艦隊は、ジブラルタル、ツーロン、ビゼルタ、マルタを堅めて居て、すべての物資の敵國輸送を嚴封してゐる。か様な状態の下にあつて、獨逸たるもの、彼の眞の敵が露國でも佛國でもなくて、英國そのものに外ならざるを痛感せざるを得なかつた。

英國を倒すでなくては、戦は絶対に勝てないとわかつてからは、獨逸國民の憎悪は一に英國に集中され、憎英の歌などは、國を擧げ

て旺にうたはれた。英國征伐のためのあらゆる方策は講ぜられた。空中船は、とりあへず、倫敦襲撃に用ゐられたが、その巨體のため成績、概ね不良だつたので、輕快敏速な飛行機によることに改め、これは、少からず、倫敦人士を威嚇した。しかし、大きな軍事的效果を之に期し得なかつたのである。水上艦艇では、獨逸は、まだ遙に英國のそれには劣つてゐるので、英國艦隊の目を掠めて出動し、その東海岸のそちこちに砲撃を加へて急ぎ逃げ歸る位のことしか出来なかつた。かくして士氣の沈滞せんことを畏るや、一九一六年五月末、獨逸の所謂大洋艦隊は、その精銳を擧げてウイルヘルムスハーフェンを出動したので、英國艦隊は馳せて丁抹の西岸に之を伐ち、獨逸艦隊をその港に追ひ込んだ。此役、英國艦隊は、少からざる艦艇を失つたけれども、北海の制海權は、依然として彼の掌裡を離れなかつた。

英國の獨逸に對する此封鎖線を突破して逆に英國を封鎖することは、これまでの様な水上艦艇では出来ぬとあつては、それは、何か然るべき新奇の武器によらねばならぬのであるが、獨逸は、之をば潜水艇に於て發見した。開戦勿々の九月に和蘭の海岸を遊弋しつつあつた英國の舊式巡洋艦三艘が、獨逸潜水艇ウー九號により、一舉に撃沈された出来事は、獨逸をして此方面の目を開かしたのである。若しウー艇による封鎖が成功して、英國と外界との交通が五旬にわたつて杜絶され得たら、一切の物資を海外に仰がねばならぬ英國は、終に降服の外なくなつてしまうのである。唯、潜水艇は、脆弱なもので、その魚雷攻撃も、無警告で行はれねば、効果が薄い。従て、客船でも襲ふ段になると、人命を損ずることも尠くないので、一九一五年五

月、ルシタニア號の撃沈により、米客一百餘名が溺死した折には、米國政府は、強硬にその非人道的行爲を弾劾し、獨逸をして終に從來、巡洋艦が行ひ來れる慣例を踏襲し、警告を發し、乗員脱出の餘暇を與へてから處分をすることに改めしめた。けれども、これで、收まらぬのは、獨逸の軍部で、そんなに米國をこわがつて遠慮して居たんでは、絶対に英國打倒の見込がないとて、政府に肉薄し、終に一九一七年二月から無制限の潜水艇政策を斷行すべき旨を聲明するに至つたので、米國は、終に獨逸との國交を斷絶し、ついで四月、之に宣戰した。米國は、獨逸を人道の敵として起つたといふものの、中立生活二年有半以上の間に軍需品の商賣で、してたまもうけた彼は、聯合國に對しては、最早、今までの様な債務國ではなく、巨大な債權を持つに至つてゐるから、聯合國が負けるとなると、米國そのものも、彼が折角の利益を棒に振らねばならなくなるのであつた。

人力でも、富資でも、何から何まで最も畏るべき力を包蔵してゐる大米國の參戰は、聯合國をして蘇色あらしめた。米國は、直にその海軍を歐洲の海上に送り出したし、又徵兵令を布いて大陸軍の編制に懸命となつた。獨逸潜水艇の無慈悲なる無警告撃沈の政策は、着々としてその破壊に成功し、英國は、一時は、食糧のストック僅々一週目といふ瀬戸さわに追ひ詰められたが、之が對策は、忽にして講ぜられ、英國海軍艦長連を擧げての反對にも拘らず、試みられた驅逐艦による商船隊護送制の效果により、終に窮地を脱するこゝとが出来た。此際、日本海軍も、地中海に出動して與國の輸送を援けた。

二 露國革命と四國同盟の崩壊

米國の參戰で息をついた聯合國は、一九一七年三月、露國に起つた革命により、露軍をば、東部戦線から失つたと同じ結果になつてしまつた。戦争勃發當時の露國は、酒專賣の制を廢し、直に禁酒令を布いて戦争に全力を傾けたほどのえらい意氣込みだつたに拘らず、官僚政治の宿弊に悩まされて戦績の一向にはかばかしきものがなかつたため、頻りに政府に戒告する所ありし其國の國會も、終には我慢がしきれず、一九一七年三月、終に帝政を廢し、國會自ら政府を組織して戦を續けることになつた。かくして今までの絶対政治が立憲政治になり代つたは良いが、政黨が勢づき、言論も活潑になつて來ると、革命黨の過激な議論も、今は誰憚ることもなく宣傳せられ、敗北思想などまでいつしか戦線に流布せられ、其結果、士氣甚しく廢弛して收拾の道も付かなくなつてしまつた。さうして十一月となり、社會民主黨中の過激派といふ徹底共產主義の一派が政權を奪取することになると、非戦思想は益々弘布せられ、それが佛國や伊國の政界や軍隊にまでもその影響を及ぼすに至つた。聯合各國は、政府の陣容を改め、惰風を一掃し、士氣を振肅し、戦争完遂、徹底戦争を標榜して邁往せねばならなかつた。

共產黨政府は、直に獨逸に向て單獨講和を提議し、一九一八年三月、兩國は和を結び、獨逸は、最早、東部戦線を要せざるに至つたので、彼はその兵力を西線に集結して、その最後の切り札たる乾坤一擲の大突撃を行ふことになつた。これは、又、獨逸決死の凄壯を極めた肉弾戦で、三月から七月まで、前後五回にわた

る猛攻撃のため、聯合軍の戦線は破れて、大戦勃發當時の様な巴里の危機は再來したが、英佛米、政治及軍事の當局者は、ここに初めて、總司令官を任じて指揮を統一するの策を決し、能く頑敵を喰ひ止むるに成功し、七月以降になると、逐次、攻勢に轉じ、榮養の缺乏で困憊せる、及び、聯合國の宣傳によつて士氣沈滞し、希望を失ふに至れる四國同盟の軍隊を所在に壓迫して行つた。かくて八月上旬以降、大勢は、全く逆轉し、四國同盟の結束にもひびが入り、勃牙利先づ降り、土耳其、之に次いだ。降伏は絶對的であつた。十一月になると奥獨の牙營にも革命おこり、ハブスブルグ、ホーヘンツォーレルンの二大王朝は、忽にして倒され、十一日に於ける獨逸のはかなき休戰條約となつて大戦は初めてその終熄を告げたのである。

第二十三節 大戦の諸特質

(一) 國民的戦役である

大戦は、終に聯合國の勝利を以て終を告げた。參戦前の米國は「勝利なき平和」を口にして、四國同盟による完勝をも、將た聯合國による徹底的勝利をも共に冀はなかつたが、一度、自己も、戦渦に投入するとなると、今度は、飽くまでも、自家の利益を完うせんといきまいたのである。之を過去の戦役に徴するに、一騎討の戦であれば格別、さうでない同盟系統間の所謂聯合戦となると、一方的の絶對勝利となつて終を告げるといふ場合は、寧ろ尠かつた。即、同盟系統の結束が異調を來し、いつの間にかやら、散れ散れに脱逸して

戦が結局うやむやの間に終を告げてしまふといふが多くは落ちであつた。中には、ボナバルト王朝の華々しい即決戦の如くに、同盟の一つ一つが順々に叩かれ、挫かれて、終には屈してしまふといふ例もあるけれども、この場合、それは神速果敢なる運動戦によるものだつたが、一九一四年の大戦にあつては、戦局の發展は、全然、之とは違ひ、兩軍四つに組み、死力を盡して揉み合ひ、戦争期間の大部分にわたり、獨軍に寧ろ分があつたのであるが、結局、力つきて投げ出されてしまつたのである。

かやうに戦が澁滞して容易に決しなかつた事情の一つには、これが正直正銘の國民戦であり、總力戦であつたといふことがあるのである。此戦は人種的戦役ではなかつた。聯合國の陣中には、白人ばかりではない、日本人や支那人(苦力として)も居るのであるが、中歐同盟には、ウラル・アルタイ語族の土耳其人が收まつてゐる。露國は韃靼人やキルギス兵を、英國は印度のグルカ兵を、佛國は又モロッコの土人兵やセネガルの黒人兵までも、その戦線に羅列せしめて居つたのである。宗教的の戦役でもない。基督教徒は互に相屠つてゐる。新教徒たる英獨兩國民は相闘つてゐるし、舊教徒たる奥伊も伐ち合つてゐる。最後に、英國は阿刺比亞人を使喚し、之をして同教同信の土耳其人と墻に闘ぐに至らしめてゐる。それかといつて、近世の歐羅巴の歴史を賑はしてゐる様な王朝戦でも決してない。獨帝は露帝、露后及び英王とは血を引いた從親同志なのに、彼等は互に俱に天を戴かないと罵り合つてゐるが、それは十八世紀に於ける様なホーヘンツォーレルンやロマノフやウインズル間の權力争では、最早、ないのである。

大戦は、真正の意味での民族戦であり、國民戦であつた。十九世紀の初、普魯西、舉國皆兵の制を採つてから、軍隊は全く國民化し、其規模の大も、昔日の比ではないけれども、それにしても、知れたものであつた。普墺戦でも、普佛戦でも、戦場にくり出された兵數では、二十世紀の大戦とは霄壤の違ひといつて宜しかつた。英米は、平時に大軍を常備しない習はしの所で、英國などでは、志願の資格を缺く職業の種類を百六十種も數へて居たほどであるのに、それが急に義務的兵役制へと一轉するといふ騒ぎであつた。どこでもかしくても、人力は總動員されて、男子といふ男子は、皆、前線に狩り出されてゐるし、銃後には、又女性までも徴集されてゐるのである。それだから、兵器を取つて戦ふ將兵は、實に夥しき數に上つてゐる。一九一五年一月に於て西部戦線の獨軍は、一五〇萬、それから翌年の二月、ウエルダンの肉弾戦にとりかからうといふ時にはそれが無慮、二三五萬に達して居たといふことである。聯合軍の兵力は、多くは之を凌駕してゐるのである。

(二) 攻城的戦役であり、長期的戦役である

獨逸の對佛作戦原案では、その主力をウエルダン以西におき、西南から巴里を包圍し、一舉に佛軍を殲滅しようといふことになつて居たが、實際に行はれた獨軍の侵入は、もつと東方からせられたのである。さてかやうにして獨軍の敗れてエヌ河に退くや、そこで急に腰をおろしてしまつたので、聯合軍も、之に倣つて塹壕での睨み合ひを續けることになつた。これは敵も味方も大將連の誰もが想像だもしなかつた所なので

あつた。やはり、時々、休みながら運動戦を行ふものと思つて居たのが、全く意外の事になつてしまつた。塹壕戦は、日露の兩軍も、奉天で約一ヶ月、行つたのであるが、然るにエヌ河に於ける對陣は、實は白耳義の海岸から瑞西の境に至るまでの蜿蜒、實に七百軒以上にわたる地下の長城でのそれなのであつた。その塹壕は、深く掘り下げた、半永久的の防禦陣地で、萬一の場合のため、他の幾條もの線も用意された縦深なもので、之を抜くことは、容易の業ではないのである。即決的效果を狙つて行つた獨軍の大殺到が躓きを見せると、戦争は、忽ちにして何人も期しない長期戦を思はしむるものと變つて居た。塹壕戦は極めて持久的な消耗戦で、大戦は實に、四年三月十五日の日子を之に費した。昔の三十年戦役や、七年戦役は休み休みの長期戦だつたが、二十世紀の大戦は、晝も夜も休みなしの伐ち合ひを以てしてのそれなのである。

(三) 立體戦であり、無法規戦であり、從て最犠牲的な戦役である

歐洲列國が國民主義から帝國主義に進展しようといふ十九世紀七十年代の末年は、電話や電燈の發明で知られて居たが、此世紀の末からは、更に無線電信や自動車の出現により、距離は一層に短縮せられ、人類社會は、經濟的に、社會的に、國際的に、漸くその面目を一新せんとするに至つた。かやうに科學の應用により、文明の利器が次々と工夫し出されて來ると、人類の個人的並に國民的の功名心は、一層、之に昂揚せられて、殆んど底止する所を知らないといふ有様である。從來の戦争では、使用兵器は、地上戦と水上戦との二種類に限られて居た所、大戦に及んでは、航空機及び潜水艇といふ立體戦兵器が新に現れて來た。他の

方面でも新しい兵器は續々工夫し出される。毒瓦斯やら戦車の如きものが現はれる。自動火器は驚くべき進歩を遂げる。砲兵力の發達になると全く隔世的で、十年前の滿洲に於ける戦役では、野砲の射程は三千米突に過ぎなかつた所、それが更に一萬米突もその上加はるといふ状態である。軍は、ひどく機械化されて來た。

武器が進歩したため、利用し得べき側面を持たない、正面ばかりの長い塹壕の對戦では、敵を破ることが層一層、困難になつて來た。さうして之と同時に、戦争は、その本然の野蠻性を益々むき出しに露出するやうになつて來た。歐洲各國は、國際法は彼等に特有のもので、文野の差別は、基督教國によつて作られた所謂國際生活の仲間にはいり、與へられたる法規や慣例を實行すると否とによつて分れるものであるかのやうに説いて居たのである。十九世紀の文明國間の戦争は、此點では模範とすべきものであるかのやうに誇つて居たものであるのに、大戰では、それが、又、いかにも、何の未練もなしに、片つぱしから叩きこわされてゐるのである。條約は、反故紙同然のものだとて白耳義の中立は破られる。御法度になつてゐる筈の毒瓦斯は遠慮會釋もなく使用される。無防禦の都市に爆彈が投下される。それから又潜水艇では、無警告の撃沈をする。ひとり獨逸ばかりではない、相手の英國だとして決して點のうち所がないといふ譯ではないのである。

かういふ戦で、戦場では最も激しい討ち合ひを晝夜兼行でやつてゐると同時に、兵糧攻めでもあり、科學戦であり、思想戦でもある大戰のいかに消耗的であり、從てその犠牲のいかに大なるものであつたかは想像

の外にあつた。大戰中、交戦國を通じて動員されたもの六五〇〇萬といはれるが、その中、戦死九九八萬餘、重傷六二九萬餘、輕傷一四〇〇萬餘、捕虜及び行方不明五九八萬餘といふことになつてゐる。此外非戦闘員の遭難の數ふべからざるものあり、大戰のための直接間接の死者は、實に無慮四二〇〇萬に達してゐるだらうと言はれてゐるのである。すべての損害を金に見積り悉すといふことは不可能だらうが、一米人は、之を三三七〇億弗と概算してゐる。恐らくは、此世の終りの時を外にしては、いかなる天災地異でも、こんなにひどい破壊を人類社會に與へるといふことはないであらう。

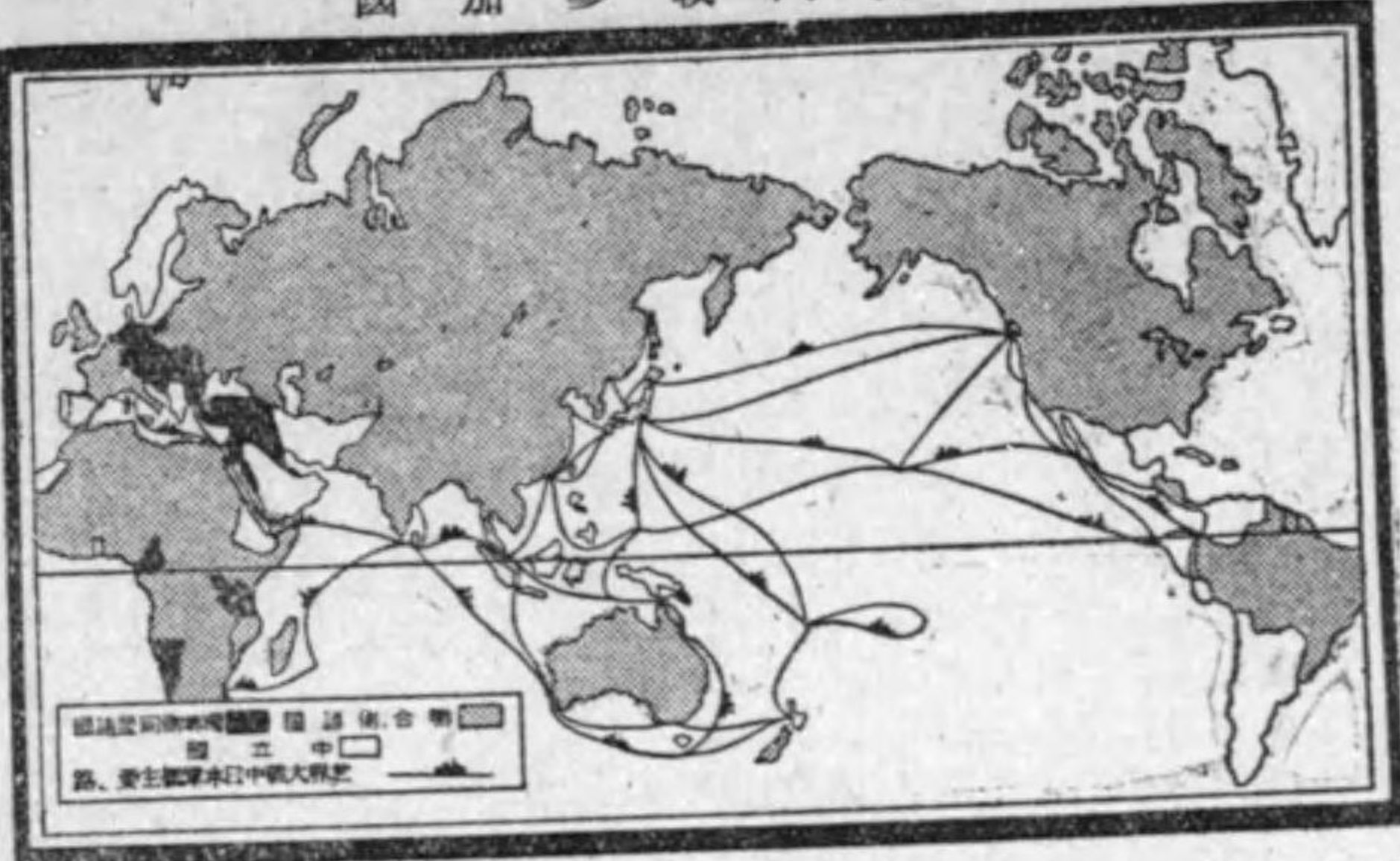
(四) 世界的戦役だが、眞の意味の世界戦役ではない

戦局が發展するに從て敵味方の陣屋に馳せ參ずるものが次第に加はつて來た。同盟條約を結んで居りながら、これはこちらから仕かけたいくさだからとて應援の義務を拒み、中立を宣言するものもあるが、又、直に參戦する氣の早い手合ひもある。敵味方は中立國をして敵に參加せしめぬよう、少くとも之を中立の地位に止めるよう、互に外交上の祕策を盡して暗闘を續けてゐる。しかしすべての國の進退は、最も現金なもので、自國に利益ある條件が提供されなければ、中々起たうとはしない。兩交戦團體のそれ／＼の提供する利益を天秤棒にかけて、より多き利益を與へてくれるものに味方するといつた態である。

かやうにして聯合國は、たうとう二十七ヶ國となり、これが四國同盟と對陣することになつた。尤もこれ等の中には、四國同盟、殊に獨逸に對して斷交はしたが、宣戦とまでは行かずに終つた五ヶ國もある。何れ

にしても、世界の五六十を數ふる獨立國中の過半が交戦國となつて居り、その面積は大地の四分の三以上にわたり、人口から言へば、人類の九割近くを包括してゐるのである。中立を守りとほしたものは十六ヶ國で、それは歐羅巴に七、亞細亞に一、南米に七、阿弗利加に一に過ぎぬ。

世界大戦参加國



此戦争の世界的たるは言ふを俟たぬが、また真正の世界戦役そのものであるとは言へない。なぜなら此大戦は、詮ずる所、歐羅巴内に於ける英獨覇権の争から起り、極東の日本と、西大陸の米國とは、會々英國の與國たりしがため、又、或は、之と利害を共にするに至りしがため、之に参加したに過ぎず、英國が勝利を制するにしても、將た團扇が獨逸に揚るにしても、その影響の第一に及ぶ所は、歐羅巴に於ける権力布置の上であり、戦役そのものは、その真髓に於て歐羅巴的のものたる以上には出でないからである。思ふに向後の世界に於て眞の世界戦役が成り立つためには、西大陸の主力が東大陸の主力と直接にぶつつかるといふことを必須の條件としなければならぬ。此場合の西大陸は、米國の統制の下にあつても、若くは、南米エー、ビー、シー

何れかの統制の下にあつても、それは問ふ所ではない。更に西大陸の相手が英大聯合である場合なら、言ふまでもないが、それが東大陸内の極東なり、蘇聯邦なり、極西なりのブロックの何れであつても、それは問題ではないのである。西大陸と大英聯合との戦であるならば、それは、直に正直正銘の世界戦役として開展せらるべきは言ふまでもないが、西大陸の相手が東大陸内のブロックの場合だと、ブロック單騎での挑戦よりは、他のブロックとの聯合を以てする方、東西兩大陸の決戦を一層に大、且、深刻ならしむるであらう。若し夫れ、西大陸も東大陸も、皆共にそのすべてのブロックを結束して決戦場に相見ると至るとせば、それこそ眞の世界大戦を實現するものと言はねばならぬ。世界大戦の世界大戦たる所以は、大西洋、太平洋、印度洋といふ大洋を争ふ所に最も多くその特色を現してゐるのである。かやうにして東西兩大陸の此戦闘では、兩大陸とも、其統一が完全なればなるほど、その世界戦役としての眞の性質が明瞭になつて来るけれども、實際に於ては、かやうな完全な統一は、中々期せられないであらう。それは、西大陸でも、已に想像されることで、米國が幅をきかさうとすれば、南米のエー、ビー、シーは必しもこれに追隨することを欲しまいし、さういふ混然たる状態は、東大陸では、一層、明に現れて來ることであらう。ここには極東、蘇聯及び極西の三大地域が相鼎立して大陸に勢力の均衡を争うてゐるし、又海には、大英聯合がある。英國は、大戦後、一時、對等の海軍力を米國に許さざるを得なかつたけれども、アルマダ艦隊撃破この方、三百余年の長年月に渡つて把握し來つた海上權をその手に恢復せんことは、彼の寤寐、忘れ得ぬ所であるだらう。かく

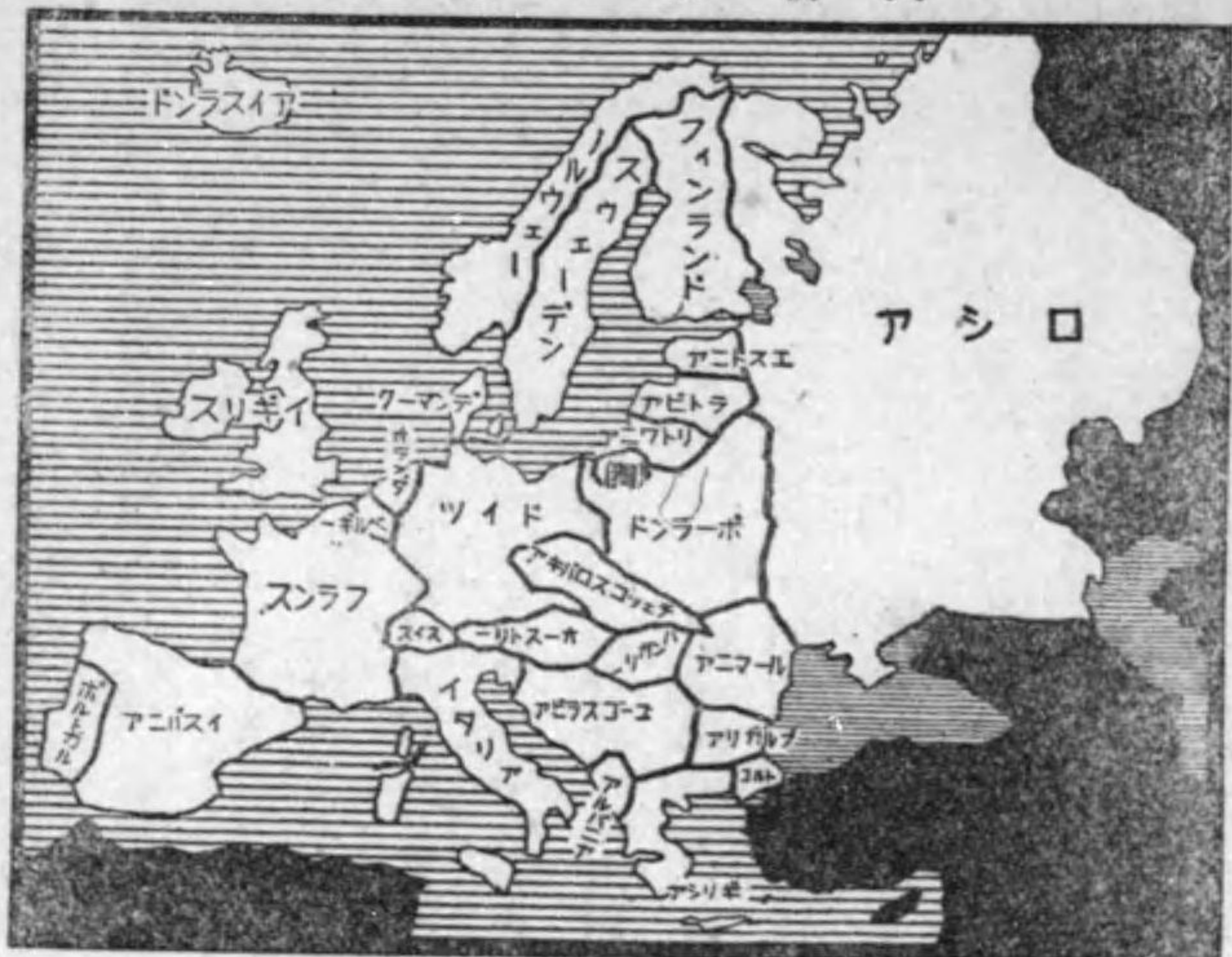
て世界大戦は、一九四一年のそれでも示される如く、西大陸は兎も角、東大陸のブロック間では、兎角、調和が保たれがたく、兩大陸間の戦では、歎を西大陸に通ずるものの跡を絶たず、それだけ、戦局の紛糾は免れがたい所であらうと思ふ。局面の複雑性を加へしむる今一つの事情は、大英聯合今後の態度にもよることであらうと考へられる。蓋し彼は、均勢の政策を以て久しく歐羅巴大陸の諸國に臨みたりし如く、東西兩大陸の争にあつても、亦、必ずや同様の政策に出るであらうからである。

第二十四節 大戦後の歐羅巴

(一) 休戦條約から五箇の平和條約へ

休戦條約の結ばれる瞬間、奥匈帝國は瓦解して、匈牙利は、獨立したから、四國同盟側は五ヶ國となつた。かくて中歐の五敗國と新に和約をとり結ぶべく、巴里に開かれた講和會議に聯合國の牛耳を握つて平和條約を纏めてくれたものは、一百年前の第二次全歐大戦當時の歐羅巴の四大國とは違ひ、英佛伊の歐羅巴の三大國に加ふるに、新に米日の歐羅巴外の二大國を以てしたる所謂五大國であつた。大戦勃發の間ぎわに三國協商の英佛露は、單獨不講和條約を結び、これには、後に日本と伊太利とも參加したのであるが、露國は、革命の結果、先づ脱退し、その代り米國は、新なる與國として仲間入りをしたから、五つの大國をなすに至つた譯なのである。ウイーンでは、敗れたる佛國の全權も、會議の席に招請されて講和の諸條件の協議に

大戦後の歐洲



第二十四節 大戦後の歐羅巴

あづかつたのみか、和約が出来ると幾くもなく、更に英露普奥の四大國の同盟に加入し、五大國としてこれからの歐洲の整定にあづかつたのであるが、今回の巴里會議では、戦敗國は、一切、招請されず、聯合國の方で條約原案をとりきめて之を敗餘の五國におしつけ、否應なしに承諾させるといふ方法によつた。第二次全歐戰當時の佛國は、城下の誓をなした點では、第三次に於ける獨逸と違はなかつたけれども、後者では、關係方面が廣く、會議で取扱はるべき問題は頗る多岐に渡り、交戦國のすべてが一々卓上に之を論議するとなると、はてしがないと考へられたからなのである。

一九一九年一月十八日を以て佛國首相を議長として巴里に開かれた會議では、大英聯合だけは、一國と見做されず、加奈陀、濠洲、ニッゼーランド、南阿弗利加の四つの自治領と印度帝國とも、それ／＼、特に獨立國に等しき代表權を與へられたから、參加國は、總計三十二ヶ國となり、その全權は、五大國は五人づつ、その他は三人、二人、又